
装甲悪鬼村正
妖甲秘聞
鋼
鋼屋ジン
（ニトロプラス）
Jin Haganeya
Illustration／なまにくATK
（ニトロプラス）
e+FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

目　次

双輪が描く軌跡のように因果は巡る。役者と舞台を変えて歴史は繰り返す。

ゆえにこの物語もまた次の一文で始まる。

この日の舞台は、計四幕。

第一幕は、決闘であった。

互いに満身創痍であった。

激闘の果て、双ふた輪わ懸がかりも叶わぬほどに母衣つばさは傷み、陰義しのぎを操るだけの熱量も残っていない。力はとうに尽き、だが未だ戦意は衰えぬ。構えた刃の切先にまで、凜と殺意を行き渡らせる。この場を支配する理ことわりは──対敵あいてに止とどめを呉くれる。ただそれきり。

きひひ、と。

一方の武者が厚い兜の奥で笑う。武者が鎧うは豪壮極まる大鎧──劔冑つるぎ。その造りから福岡一文字派の作、それも婆ば沙さ羅ら大名として名高い佐々木道どう誉よが纏った、道誉一文字と知ることができた。だが今やその堅牢な甲鉄は砕かれ見る影もない。

えいや、と。

向き合うもう一方の武者は、対敵の狂気に呑まれぬよう気を吐く。その身に鎧うは幽玄なる気配を醸し出す劔冑。手にする得物は薙刀であった。

これこそは南朝の忠臣、脇屋義助が伊予國大三島の大おお山やま祇づみ神社に奉納した、郷ごうの則のり重しげに相違ない。その姿は対敵同様、無惨に傷つき果てている。

お互い、あと一合斬り結ぶ余力しか残されていないだろう。攻防の

果て一方の刃が一方の命を絶つ。道誉一文字の仕手。郷則重の仕手。いずれがいずれの役を負うのか。
　きひ……きひひ……きひひひ……。
　道誉一文字からこぼれる笑い声は止まない。生死を分かつ一触即発の状況も、瀕死に置かれた己自身のことも、一切気にとめていないようだった。粘つく殺意がひび割れた鋼からしみ出してくるかのような嗤笑を受けて、郷則重の仕手は何を思うのか。
「魔に魅入られたか」
　郷則重から響く金きん打ちょう声じょうは、女のものであった。
「哀れなものだ。同じ武道に生きる者の、斯か様ような姿を見るのは忍びない。せめてもの情けに引導をくれてやる」
　道誉一文字から返ってくるのは、やはり嗤いと殺意のみ。
　──言葉はもう届いておるまい。女武者は敵に憐憫すら抱いていた。
　裏切りを繰り返す男ではあった。南朝の主将、楠木の側近たる彼女にとって、相容れぬ人間だった。それでも武士としての名誉も誇りも失い、ただ狂うばかりの獣と化したその姿はあまりにも痛々しい。
　だが是非も無し。救うことは叶わぬ。その義理もない。殺意に対してはただ、殺意によって応えるのみ。
　郷則重の女武者は薙刀の切先を後方、石突きを前方に向けて構える。これは下段より弧を描いて対敵を狙う意図であろう。上段より来る剣筋は比較的読みやすい。だが下段、それも薙刀のような遠い間合いより迫る剣筋を読むのは難しい。
　対して道誉一文字の仕手は中段、切先を前方に向けて構えていた。決闘において間合いの優位は圧倒的であり──高速で空を飛び交う双輪懸においては、必ずしもその限りではないが──道誉一文字が長物である薙刀を破るのは至難であった。
　ゆえに正眼の剣形、隙のない構えである。どうやら狂していても武人としての判断力は失われていないようだ。
　両雄睨み合い、動きが止まる。激しく殺気をぶつけ合い、しかし微動だにしない。これは高速で回転する独楽こまの静止である。澄んだ

静寂に包まれながら、だがその水面下で行われている闘いの激しさは苛烈であった。
　一足一刀、産毛一本の動きすら見落とすことはできない。一刹那の隙を見せた方が血の海に沈む。この切迫した均衡状態を崩すのはどちらが先が。崩れるのはどちらが先か。
　なおも静寂は続く。遠くから剣戟の音が聞こえてくる。合戦であった。このふたりと同じように、両軍の兵士達が全力を賭して、死闘を繰り広げている。
　いずれその全ての殺し合いに決着がつく。無論、この場でも。
　ゆらり、と。
　──動いたのは女武者であった。女の体力が極度の緊張感に耐えきれなくなったのか、それとも間合いの優位から来る油断がそうさせたのか……どちらにせよこの機を逃す手はない。攻撃を仕掛けようとした女武者の、身が固まったその瞬間を狙って道誉一文字が動く。先センの機。
　刃がきらめく。
　──囮であった。正眼に構える道誉一文字が斬りかかろうとすれば、刀を振り上げるしかない。当然、胴はがらんどうとなる。そこに薙刀が三日月のような剣閃を描いて、襲い来る。先センのノ後ゴ。
　剣風が走る。
　もう一度言おう。道誉一文字の仕手は、狂気の中でも判断力を失っていなかった。
　薙刀は虚しく空を切った。
　彼は飛びかからなかった。薙刀の攻撃を誘ってから、一歩飛び退いたのである。女武者の罠を見抜いた上での罠。攻撃を繰り出した後の無防備な姿が眼前に晒される。後ゴのノ先セン。
　今度こそ凶刃が女武者の命を絶つ──
　きひひひ！
　嗤う彼は再び三日月の軌跡を見た。直後、喉に激烈な衝撃。
　斬撃を繰り出した女武者は止まらなかった。刃が避けられるや否

や、今度は石突きの側を下段より振り上げたのである。薙刀は刃で斬るばかりではない。石突きもまた武器となる。ましてや武者の力で振るわれる打撃がどれほどの威力を持つのか。

きひ！　きひひひひ！

笑い声はなお高く。仰け反る道誉一文字。喉元を覆う甲鉄がたび重なる責苦に耐えかね、ついに砕け散る。兜の中で喀血する。

きひひひひひひひ！

笑い声は止まらない。三度、三日月の剣閃。今度こそ郷則重の刃がとどめを刺す。

喉を裂く。頸骨を断つ。鮮血が噴く。首が舞う。

きひ……きひひ……きひひひ……

道誉一文字の仕手は最期まで嗤っていた。

気づけば日は沈み、周囲の剣戟は止んでいた。合戦は終わったようだ。

女武者は鉛のように重い身体を引きずるように、部下達と合流した。

兵士達は皆、彼女と同様、満身創痍だった。それほどに熾烈な戦いだった。生き残ったのは半数以下。対する敵方、北朝軍の生き残りは──皆無である。

比喩ではない、正真正銘の殲滅戦であった。敵の最後の一兵まで殺し尽くさねば終わらぬ、狂気の戦であった。何もこの一戦だけではない。いまや大和で起こる戦の全てはそれなのだ。地獄──その名は今の大和にこそ相応しい。

だが、それでも──

傷だらけの女武者の元に、ひとりの童女が駆け寄ってきた。見れば他にも多くの人々が、兵士達の元へと寄ってくる。

ここはとある村の手前であった。残虐の限りを尽くす北朝軍の部隊、その進行上にたまたまこの村は存在していた。

　このままでは村は、荒れ狂う北朝軍の兵士達によって滅ぼされていたはずだ。それを彼女の部隊が迎え撃ち、村を救ってくれた──村人達はそのように解釈し、感謝の面持ちで彼女達を見つめているのだ。

　童女は輝く瞳で、女武者を見上げている。美しい甲鉄は砕け、ボロボロだ。けれど気にならなかった。その奥の優しさを知っている。

　戦う者、武人とは怖ろしいものばかりと思っていた。殺戮に酔い剛力を揮うばかりの餓狼団。それが全て。そう思っていた。

　だが違った。自分の欲望ではなく、民を守るために、戦う人がいることを知った。

　──ありがとう。

　つたない声で童女は感謝を告げた。そして、信じます、とも。

　何を？　童女はそれをどう伝えれば良いのかわからない。ただ、正しいものはあるのだと。こんな地獄にも、正しいものを守って戦う人がいるのだと、そのことを知ったのが嬉しかった。

　戈を止めると書いて武。そう、これこそが正しい〝武〟の姿に違いない。そして正しい武を揮って戦う人こそが、真の英雄なのだろう。

〝英雄〟──そう、たとえば彼女のような……

「違う」

　女武者はただ一言そう告げた。

　何が違うのだというのだろう。童女はその言葉を、大和の惨状に心を痛めているものだと判断した。そしてそれを救いきることのできない、己の非力を嘆いているのだとも。だから私は〝武〟たり得ない──そう考えているに違いない。

　だけど、あなたはこの村を救ってくれたのです。それは間違いないのです。あなたがいなければ村は滅びていたのです。

　だからわたしは、あなたを信じます。あなたこそが、英雄であると。

「違う」

　童女は三日月の軌跡を見た。

　喉を裂く。頸骨を断つ。鮮血が噴く。

童女の首が舞う。

女武者の乱心に、村人達は一斉に悲鳴を上げた。だが兵士達に動揺はない。皆が皆、悲愴の表情を浮かべ、不気味に沈黙している。
兵達に女武者は命じる。
「皆の者。これより殺戮を始める」

これより第二幕。
小さな村の、悲劇が始まる。

無意味な殺戮だった。
兵は、闇雲に逃げる村人の背を斬った。兵は、土下座して命乞いする村人の後頭部に刀を叩き付けた。兵士は殺す。村人は殺されてゆく。
なぜこんなことになったのか。村人には何も理解できない。命を賭して自らの領民を守った武士達が、今度はその守った領民を殺戮する。まったくもって理不尽である。彼らもまた北朝軍と同じように、地獄の瘴気に毒され、気が触れてしまったのだろうか。それほどに世の中は狂ってしまったのか。
絶望はやがて理不尽に対する怒りに変わり、怒りは新しい狂気を生む。
窮鼠猫を噛む。やがて村人達の一部は、逆襲に出た。
鉈、鍬、手斧。物置から探し出した粗末な凶器を手に物陰へ潜伏し、注意を怠った兵が通り掛かれば背後から襲って傷を負わせた。
恐怖を麻痺させるために、村人達もまた血に狂った。殺してやる。お前らが殺した分だけ、俺達も殺してやると。
あるいはさらに夢想したかもしれない。──大将を殺す。親玉を失い兵達が混乱に陥れば、あるいは生き延びられるかもしれないと。

将である女武者は、敵との戦いで、立っているのもやっとであるほど傷ついている。超常の力を揮う劒冑もほとんど砕けているではないか。今ならば武者といえども、なす術もなく討たれるより他ないだろう。今こそ絶好の勝機ではないか。

村人の中でも血気盛んな若い衆が、女武者に襲いかかった。

はたして一度に十の首が宙を飛んだ。

薙刀の一閃であった。手負いといえども虎は虎。鼠如きが束になったところで勝てる道理はない。さらに一閃。再び十の首が飛び、剣風に煽られて近くの家屋が倒壊する。その陰に隠れていた村人達が押し潰されて死ぬ。

女武者の薙刀が唸りを上げる都度、村人の一団が死骸の集まりと化す。斬られ、断たれ、砕かれ、引き裂かれて。荒ぶる風が村の全てを呑み尽くす。

村人達のささやかな逆襲も鎧袖一触に屠られた。兵達もまた淡々と殺戮を続けていく。

いたぶるわけではない。むしろ速やかに、苦痛を長引かせぬよう苦心している。そんな事実は、殺される者にとって何の救いにもならないのだろうが。

血の海の底で、絶望の底で、村人達は願う。

これは、おかしい。これは、正しくない。これは、間違ってる。これは、悪である。

悪なのだから、正してください。悪なのだから、罰してください。どうか、お願いします。死の連鎖を、わたしたちで終わらせないで。

うたがきこえる。

　死の淵で村人達は聞いた。優しく、力強い声。
　声はこの場で行われる罪を嘆いていた。だがその全てを赦し、愛していた。
　無限の愛に打たれて、村人達は至高の存在を幻視する。

うたがきこえる。

　べに、くりあとる、すぴりとす
　めむてす、とうろむ、びじた
　いむぷり、すぺるな、ぐらちあ
　くえ、と、くりえすて、ぺくら

　女武者だけが気づいた。
　これは金打声……否、違う。もっと心の奥底をかき回されるような、臓腑に染みこむような声。魂への汚染。
　女武者は知る。本当の敵が来る。大和全土を襲う災禍そのものがやって来る。そうだ、彼女は知っている。これはあの銀色の魔物と同じ──

　悲劇は終わり。

続いて第三幕。

それはある種の喜劇であり、
同時に単純なる惨劇である。

──生き残っていた村人達は皆、発狂した。

ある兵士は子供に喉笛を食い破られた。ある兵士は老婆に目をえぐられた。
先ほどの抵抗とは異質の反撃であった。彼らは一切の保身を考えなかった。刀で斬られようと槍で突かれようと意に介さず、兵士達に襲いかかる。
否いな、兵士に対してばかりではない。村人同士でも殺し合っている。母が腕に抱いた赤子を絞め殺し、妹が兄の陰部を嚙み千切る。皆一様に法悦の表情を浮かべながら。地獄が歓喜で満たされる。
「狭さ霧ぎり様、村人達が突然……！」
「狼狽うろたえるな！　それよりも気をつけろ、来るぞ！」
女武者の忠告は無意味に終わった。

《輪廻転生いのち・めぐる》

突如、強烈な悪臭が兵士達の鼻をついた。死臭……否、硫黄臭。
兵士達の目の前で、狂った村人達の腹が餓鬼のように膨れ上がる。次の瞬間、轟音と衝撃が一同を襲った。
何が起こったかも理解できないまま、兵士達は粉微塵に引き裂かれた。村人達が一斉に爆発したのだ。
腸わたと糞尿の爆風に煽られながら、女武者はその向こうを睨みつけた。視線の先にあるのは漆黒の影。
「悲しい」

郷則重に届いた金打声は、嘆きに満ちていた。

「死ぬのは、悲しい」

「……貴様！」

女武者は憎悪を込めて叫ぶ。彼女は知っている。漆黒の影が何ものであるのかを。身の毛がよだつ恐怖と、吐き気をもよおす悪意を知っている。

「ゆえに愛さねばならぬ」

影の正体は劔冑だった。全身を覆う漆黒は月のない夜の闇。禍々しく、けれど王者の威厳すら感じさせる。

「狭霧様、お下がりを！」

爆風を逃れた兵士達が女武者を庇うように前に出る。その様子を見て、漆黒の武者は得心が行ったように深く頷いた。

「ふむ。やはり汚染波うたは届いておらんか」

ゆっくりと歩を進める。身構える兵士達に緊張が走る。当然、生身である彼らに劔冑で鎧われた武者をどうにかできるはずはない。だが彼らの将である女武者は戦える状態ではなく、ならばせめて彼女が撤退する時間を稼がなければならない。悲痛な決意であった。

「そうか、そうか。そうであったか。なるほど。なるほどのう」

その健気さは一切報われることなく、蹂躙される。

兵士達の目の前から、漆黒の武者が消えた。否、女武者にだけは見えていた。騎航せずに地を這う武者にはあるまじき速さ。瞬く間に敵は眼前に。

──縮地法。だがそれだけではない。この世にあらざる術理を行使している。おそらくは、陰義。

漆黒の武者が一瞬背を見せる。一対多の戦況に対応した回転からの斬撃である。振るわれるのは長大な野太刀。

「相国寺流甲冑礼法〝蟒蛇ウワバミ〟」

瞬間、野太刀が何らかの〝気〟を帯びる。

「……が崩し──〝焦コガレ〟」

兵士達は最期に長くうねる剣閃を見た。首を、顔を、胴体を輪切り

にされて果てる兵士達。野太刀の間合いから遠く離れた者でさえも。幻怪極まる魔性の技であった。
「……来たな、魔王」
　吐き捨てるような女武者の言葉に、漆黒の武者は頷いた。
「うむ。嘆きの声に心を打たれてな。見過ごせなんだ。どうよ、この屍山血河の有様は。何とも惨い。悲しみで胸が張り裂けんばかりだ」
「戯れ言を申すな。如何に冷血な暴君も、血に飢えた殺人狂も、貴様が殺した数には到底及ぶまい」
　女武者は薙刀を構える。深く傷つき、騎航も陰義の行使も叶わぬ今の彼女にとって最悪の敵。絶望的な状況。だからといって退くことも許されない。
「大和を地獄に変えた、生きる災厄！　黒夜の魔王！　悪鬼！」
「悪鬼、のう？」
「然り！　北朝の総大将は人を喰らう悪鬼と成り果てた！」
　然り。この漆黒の武者こそは北朝軍の主将、すなわち足利将軍その人であった。
　なぜ北朝軍を束ねる彼が、単騎でこのような場所にいるのか。常人の理解の及ぶところではない。
「悪鬼……悪鬼……悪鬼！　きひ、きひひ、きひひひ！　如何にも、如何にも！　きひひひひひひひひひ……！」
　当然である。常人に狂人を理解できるはずもない。
「そうさな。我は、悪鬼よ。おぬしらと同じな」
「……何を言う」
「いや、なに。先ほどの乱痴気騒ぎのことよ」
　女武者は言葉を失った。漆黒の武者が言わんとしていることを理解したのだ。
「よう殺した。よくぞ殺した。我が兵どもを……それに」
「……黙れ」
「無辜の民を。分け隔てなく、一切合切、誰もかも。よくぞここまで死シに耽溺した」

「黙れと言っている！」
　激情に駆られ、女武者は刃を振るった。技も何もない、ただ闇雲に得物を振り回すだけの無意味な一撃だ。無論、そんなものが通用するはずもなく。
　ずぶり、と。不快な感触が伝わる。漆黒の武者はいつの間にか手にしていた生首で、刃を受け止めていた。先ほど彼女の元に駆け寄ってきた──そして、彼女自身の手で殺した──童女の首であった。
　愛らしかった顔は無惨に割られ、血と涎と脳漿を撒き散らしながら地面に落ちる。熟しすぎた果実が枝から腐り落ちるように。
　ひぃ、と。武人にあるまじきことに、彼女は思わず悲鳴を漏らした。漆黒の武者はさも愉快そうに嗤う。
「きひひひひひ！　やはりか！　やはりな！　道理で汚染波うたが届かぬわけだ！　おぬしらは……とっくに汚染されているのだ！」
　その時、狂った哄笑が響き渡る空に、銀色の流星が光った。光は徐々に大きくなり、真っ直ぐふたりの元へと飛んでくる。漆黒の武者は諸手を広げて、流星を迎え入れる。
「そうだ！　我らは同じ呪いで結ばれておる！　この呪いこそが我らが武力ちからの根源おおもと！　すなわち──」
　流星の正体は白銀の劒冑。月光を集めて鍛えたかのような銀色だった。裂帛の気合と共に漆黒の劒冑めがけて飛翔する。
　漆黒の劒冑もまた地を蹴り空へ舞う。狂気の哄笑と共に白銀の劒冑めがけて飛翔する。
　二条の流星は天を駆け巡り交差しまた巡る。
　銀の星は白狼めいて勇猛に。黒の星は獅子めいて厳かに。
　咆哮が夜空を叩く。哄笑が夜空を渡る。
　怒りを、慙愧を、無念を、悲嘆を、
　喜びが、慰撫が、許容が、愉悦が迎える。
　月の光と、月のない闇夜が激突する。

　第四幕──この夜最後の一幕は、最初の幕に倣っての決闘か。

否。そうでは、ない。これは茶番劇。
愚鈍な犬が水面に映った己の姿に怯えて吠えるような、滑稽極まる一幕に過ぎぬ。
白銀の劒冑が、怨敵の名を叫ぶ。
漆黒の劒冑が、宿敵の名を叫ぶ。
ふたつの声が重なった。

「「――村正！」」

それは百年に及ぶ混乱の時代だった。
民も武士も高貴なる者も、等しく時代の迷い道にいた。朝廷が北と南に分裂したことにより人々は翻弄され、今日の味方は明日の敵となり、血肉を喰らうように相争った。
誰もが己の信ずるモノとは何か、迷い苦しみ、そしてただ己が生きるため、殺める。
その乱は、地上だけではなく、天にすら及んだ。鍛治師が一世一代の技で鍛え上げ、自らの魂を焼き写す超能の鎧――劒冑を纏った武者たちが、戦いくさ場ばを眼下に天空を舞い、名乗りとともに激しく太刀を打ち合わせる。
その声音は連なり、怒号となりて地を揺らし、太刀打つ音は拍車をかける。
そして、その中にまぎれて聞こえるは、命潰える音。美しき大和は鬼のひしめく無間地獄と成り果てたのである。
――時、まさに南北朝の戦乱期。
勢州桑名に稀代の劒冑鍛冶一族がいたという。彼らが鍛えし劒冑は、まさしく劒冑の頂点というべき大名甲であったという。
しかし、後の世の人々がこれを讃えることはない。

――いざ、語ろう。
始まるのは、千せん子ご右う衛え門もんの尉じょう村正、妖甲と呼

ばれた劒冑の物語。

　そして、巡る因果の物語である。

凶相の男であった。
邸の庭で木剣を振るこの男──大だい楠なん公こうより数えて六代、南朝軍主将たる楠木の現当主が抱える苦悩は多い。鑿のみで刻み込んだかのような眉間の皺は年を重ねるほどに増え、斯くの如き凶相をもたらしていた。
然もあらん。彼が抱える苦難の過酷さたるや。
建武の新政に反旗を翻した足利尊氏が入京すると、帝は吉野に逃れ朝廷を開く。これが吉野朝──南朝の始まりである。
長きに渡る北朝との戦いにおいて幾度か京を奪還するに至るも、将領達のたび重なる陣営の鞍替えによって、その隆盛も一進一退を繰り返し、先が見えない情勢となっている。
百年に及ぶ戦で人心は荒み、大和は疲弊していく一方であった。
血も涙もなさそうな顔とは裏腹に、楠木はそんな大和の有様に心を痛めていた。この膠着した戦況を打開しなければならない。さもなくば大和は真綿で首を絞めるが如く、ゆっくりと死んでゆく。だが、どうすれば──。
悩みを振り払うかのように木剣を振る。凶相を浮かべ稽古に明け暮れるその姿には、近寄り難い迫力があった。
「驚いた。こんなところに悪鬼がいる。この世の全てを憎んで止まない、恐ろしい形相だ」
鈴を転がすような笑い声に、楠木は稽古を止めた。姿を現したのは小柄な人影。少年とも少女ともつかぬ童子──否、注意深く体つきを見れば成長を既に終えた感もある。性別も年齢も不明な、美貌の妖人であった。
「篝かがりか」
「うん、そうだ。御おん大たい将しょう。相変わらず化物じみた面つらだな」

　総大将に対しての、あまりにも不遜な態度。だが楠木にそれを気にした様子はない。
「顔で戦をするわけではない」
「だがね。御大将ともあれば、我ら南朝の顔でもある。吉野の里は人を喰らう悪鬼に取り憑かれていると噂が立てば、北朝に鬼退治という大義を与えてしまう」
「悪鬼、大いに結構。蘭陵王はその美貌を鬼面で隠して戦ったという。俺にはその手間が省ける」
　互いに軽口を叩き合う楠木と妖人──篝は奇妙な絆で結ばれていた。主将直属の側近、と一言で表せばそれだけであるのだが。篝の童子のような容貌からするとそれも充分奇妙に映るだろう。だが彼──彼女？──は、れっきとした武人である。
「よくぞ吠えた。ならば悪鬼の恐ろしさ、見せてもらおうか」
　言って、篝は手にしていた木剣を構えた。楠木もまた苦笑で応えてから、再び身構えた。
「吉野御流──〝砕クダキ〟の型にて」
「応」
　吉野御流とは、この南北朝の争乱の中で生まれ磨き上げられた、武者のための武術である。楠木と篝は同門の徒──厳密には同系列の流派だが──であり、そのこともまたふたりの奇妙な関係の一要因になっていた。こうして組み手を交えることも度々ある。
「馳走」
「参れ」
　篝が仕掛けた。楠木は技の名から動きを予測して、適切な返し技で迎え撃つ。吉野御流の稽古法である。〝砕〟への返しは、こう……

　ガッシ！　ボカッ！
　楠木は死んだ。

「甘い！」
　頭を打たれ地面をのたうつ楠木を、憤懣やるかたない様子で篝は怒鳴りつけた。
「どうした御大将！　〝砕〟から繋がる一連の流れは基礎中の基礎！　かような小手調べを受け損なうようでは面子が立つまい！」
　楠木はなかなか起き上がれない。芸術的かつ殺人的に決まった。打ち所が悪かったら、本当に死んでいた。
「悩むのも結構だがな。こうも隙ができては意味がない。己の身すら守れぬ者に、どうして天下万民を救えようか。猛省せよ！」
「……篝」
　恨めしそうに睨め上げる楠木の視線を、篝は真正面から受け止めた。無駄に凛々しい。
「何だ！　言いたいことがあるなら、はっきり申せ！」
「……今のは〝砕〟の型ではない……〝奉マツリ〟だ……！」
「………………………」
「………………………」

　くるっぽー。

　遠くで鳩が鳴いた。
「すまん！　間違えた！」
「……何を遊んでいるのですか、ふたりとも」
　呆れ顔でやってきたのは、背の高い女だった。澄んだ刃のような鋭さと美しさを兼ね備えた美女である。
「遊んでいるわけではないのだが」
　土埃を払いながら、ようやく立ち上がる。打たれた箇所はこぶになっていた。
「どうした、狭霧」
「はい。御館様、吉報でございます」
「ほう、室町殿の首でも届いたか？」

「吉野の宮より劒冑が一領届きましてございます」
「帝から？」
「へえ。それはもしかして」
　何かに気づいたのか、篝が興味深そうに身を乗り出してきた。はたして期待は裏切られなかった。
「勅によって鍛え上げられし一領が、ようやく帝の下へ献上されたとのこと」
　今度こそ、楠木の目が驚愕に見開かれる。
「もしや相州五郎入道正宗の再来と言われた、村正の鍛えし劒冑がついにできたか！」
　勢州桑名、千子村の鍛冶長は、五郎正宗の再来ならん──その風評を耳にした先帝が劒冑鍛造の勅を下してから、既に十余年が経っていた。一時期は肉体にくを捨てることに臆していると揶揄された村正だったが、ようやく待望の時が訪れたことになる。
「随分と勿体つけてくれたものだ。囚われの身で世を去られた先帝の期待に見合うものであれば良いが」
　百聞は一見に如かず、か。何にせよ劒冑は文字どおり一騎当千。名甲となればそれ以上である。幾領あっても足りるということはない。
「見てみよう。その劒冑、持ってこい」

　運ばれた鎧櫃を開けると同時に、この場にいたものは皆息を呑んだ。
　人に並ぶほどの体軀を持つ、白銀の大蟻だった。
　眩ゆく光る銀の甲鉄は月を連想させる。だが一同が言葉を失ったのは、何もこの世ならざる美しさに魅了されたばかりではない。
　劒冑が纏う禍々しい気配……その妖気とも神気ともつかぬ威圧感が、一同に畏怖を抱かせているのだ。
「なるほど、確かにこれは当代一の名甲に違いないでしょう……」
　そういう狭霧の声は、しかし震えている。

「名甲？　いや、こういうのはね」
　続く篝の言葉は、全員の心を代弁したものだった。
「妖甲──と呼ぶのだよ」
　楠木は黙って、白銀の大蟻を見つめていた。やがてその妖しさに魅入られたのか、心ここにあらずといった態で、輝く甲鉄に手を伸ばす。
「……御館様？」
　指先が、触れた。
　そして──嘔吐した。
「御館様！」
「御大将！　しっかりしろ！」
　指を劔冑から引き剝がし、もんどり打って倒れる。狭霧が何とか助け起こしたとき、楠木の顔は蒼白で、激しく息を荒げていた。
「何だ、この魔物は！」
「どうなさいました？」
　楠木は答えない。ただ怯えた眼で、白銀の大蟻を見つめていた。
「狭霧、篝」
「はい」
「何だ？」
「厳命である。何人たりともこの劔冑に触れてはならぬ」

　──勢州千子右衛門尉村正は狂人だったか。
　白銀の大蟻を見つめながら、楠木は深く嘆息した。
　たとえば青江一門の貞次は狂人であったと聞く。彼の者が鍛造した劔冑は仕手を惑わし、女子供ばかりを殺戮させる妖甲であるらしい。
　村正はそれと同じ……否、はるかに超える凶まがきの器モノである。
　村正に触れたとき、劔冑の思念がおぞましき邪気と共に流れ込んできた。その思念は明らかに狂気に冒されていた。そうだ、あれはまともではない。狂人でなければあのような思考は持ち合わせない。

狂気の劒冑は、斯かくの如く訴えたのだ。

×　　　　×　　　　×

我が銘なは村正
我、鬼に逢うては鬼を斬り
仏に逢うては仏を斬るもの也
我、善に非ず
我、義に従わず
我、正道を征ゆかず
我、正邪を諸共に断つ
我、一振の凶刃ハガネ也

我との契りを求める者
我と共に凶刃と生なる覚悟ありや
無かりせば去れ
有りせば
己が覚悟を宣誓す可べし

×　　　　　×　　　　　×

　狂気の劒冑は、斯くの如く訴えたのだ。
　そのおぞましき気配に堪えきれず、彼は倒れた。駆け寄ってきた弟に支えられ何とか立ち上がったものの、震えは止まらない。
「大丈夫ですか、兄上」
「すまん……少し眩暈がしただけだ」
　京都、花の御所──北朝軍の主将たる足利将軍の邸宅に届けられたのは、一領の劒冑。
　漆黒の甲鉄を持つ、それは見事な大おお甲かぶと虫むしであった。
　北朝が保有する名甲の数々……骨ほね喰ばみ藤とう四し郎ろう。二つ銘則宗。あるいは後の世に天下五甲として数えられる大おお典でん太た光みつ世よと較べても、この劒冑は決して見劣りしない。
　これこそは王者の劒冑である──見る者全てがそう信じるだけの偉容と風格が村正にはあった。なるほど、足利家の将軍が纏うのに、これほど相応しい劒冑はないだろう。
　だが当の将軍である彼は、ただ怯えて漆黒の大甲虫を見つめるのみだった。そんな内心を知ってか知らずか、彼の弟は労るように微笑みかけた。
「この劒冑の神々しさに気押されてしまいましたか。いや、無理もありません。まさにこれこそ天下第一の名甲に相違ありませぬ」
「……うむ」
「南朝を打ち倒さんとする今、このような劒冑が手に入るとは、まこと僥倖。聞けばこの村正、生前は南朝に仕えし鍛冶師というではありませんか。その劒冑が楠木ではなく兄上の前にある……八や幡わたの神かみの御加護がまさに我が北朝、いえ、この足利に有りという証にございましょう」
「……お前はこの劒冑が恐ろしくないのか？」
「恐ろしい？　確かにこれほど恐ろしい劒冑は他にないでしょう。南

朝の逆賊どもにとってはまさしく悪夢そのもの。この戦、勝てまするる。勝てまするぞ兄上」
　弟が昂ぶれば昂ぶるほど、彼の心は重くなっていく。
　天下第一の名甲。確かにそのとおりだ。だが同時に最も呪わしき妖甲なのではないか。
　先ほど触れたときに伝わってきた禍々しい邪気、おぞましい思念。正邪を諸共に断つと言っていた。この劔冑はただ、血に飢えているだけではないのか？
「兄上の仰りたいことはわかります。それがしも、この劔冑が放つ異様な殺気を感じております」
「ああ、まこと恐ろしき劔冑よ」
「ですが如何なる名甲妖甲とて、しょせん劔冑はただの道具に過ぎませぬ。結局はそれを扱う仕手次第……足利の棟梁たる兄上ならば、この村正を見事に使いこなせると、それがしは確信しております」
「何を言うか。本来、私は棟梁の器ではない」
　自虐や韜とう晦かいではない。彼は本心からそう思っていた。
　北朝軍の主将である彼ではあるが、現在、堅牢な権力基盤を有しているとは言い難い状況にあった。昨日の友は今日の仇。南北ともに裏切りが相次ぐような情勢である。支配者というよりは、諸将の利害調整役という立場に近い。
　政治の才に優れた弟の力を借りて、漸ようよう軍をまとめていたのである。
「才気はお前の方が上よ。お前がいなければ北朝はまとまらん」
「兄上こそ何を仰りますか。足利の棟梁は兄上を置いて他におりませぬ」
「私は武勇よりも、風流の方が好みよ」
　言って苦笑する。そういう性分なのだ。そんな自分を、兄よ家長よと守り立ててくれる弟の真心は無論嬉しい。だが同時に重荷でもあるのだ。
「兄上は心優しきお方。争い事を好まぬことは知っております。ゆえ

にそれがしは、兄上にこそこの劒冑は相応しいと考えるのです」
「どういうことだ？」
「長い戦乱に大和は疲れ切っております。将領達も北から南、南から北へ裏切りと帰参の繰り返し……このような時代に正義などありはしませぬ」
　弟の言うとおりである。荒んだ世の中に、彼もまた心を痛めていた。一刻も早くこの戦乱に終止符を打たなければならない。もうこれ以上は大和が保たないだろう。
「だからこそです。この世の闇を照らす正義の光が必要なのです。武を率いるのは善き心を持つ者でなくてはなりませぬ。心優しき兄上こそが棟梁であるべきなのです」
「……世の闇を照らす、か。そのような大難業、私に成せようか」
「そのための村正でございます。兄上が村正を纏えば、血筋はもとより、優しき心と猛き武が合わさり、名実共に北朝総大将となれましょう」
「村正が……」
　もう一度、漆黒の大甲虫を見つめる。やはり禍々しい。だがそれを言えば、そもそも武とは荒ぶるもの、凶まがきの器モノではないか。ならば武の頂点に立つのは、最も禍々しいものとなる。この劒冑が王者の威風を持つのも道理がいく。
　凶まがきの器モノを制する正しき心があってこそ、はじめて将たり得る。確かにそのとおりかも知れない。
「私にその資格があると、お前は申すのか」
「誰よりも兄上を理解しているのは自分だと、そう自負しておりますれば。それがしには見えます。村正を纏い、世を正す兄上の御姿が。北朝の武士もののふ全てが兄上の足元にひれ伏し、命を捧げましょう。その時こそ北朝の曙がやってくると確信しております」
「曙、か」
「はい。闇を照らす光でございます」
　不吉さは未だに拭えない。だが弟の誠意には応えてやりたかった。

弟にとって兄がそうであるように、兄にとっても弟はかけがえのない存在なのだから。
「お前の気持ちはわかった。そこまで言われては無む碍げにはできぬ。やってみよう」
「はい、兄上。微力ながらお手伝いいたします。全ては泰平の世のために」
　裏切りだらけの、肉親すら信じられぬような世の中で、何とか生き延びてきた。お互いを支え合って。
　それはこれからも永遠に変わることはない。そう信じていた。

×　　　　×　　　　×

　このように。
　南朝に一領。北朝に一領。村正は献上された。
　南朝に仕える鍛冶師であった村正一門が、どうしてこのような行動に及んだのか。敵と味方に分かれれば当然、村正同士で戦うことにもなる。劔冑となった身とはいえ、一門同士で殺し合う悲劇の道をどうして自ら進むのか。
　空を高速で翔け、超常の力を揮う鎧──劔冑。その鍛造過程において、最も重要な段階がある。心しん鉄がねを通す──鍛冶師自身の心魂を鎧に打ち込むのだ。鍛冶師の命が鎧と一体化することにより、劔冑は生まれる。

心鉄は劒冑の心魂、すなわち劒冑の根本理念そのものである。その在り方こそが劒冑の力を決めるのだ。
ならば村正の行動は、心鉄に刻まれた根本理念によるものなのか。

村正が献上されたこの時から、戦況は急変する。
まずは南朝軍の不可解な敗走から、事は起きた。

×　　　　　×　　　　　×

「見えるか」
「はい、間違いありません。北朝軍です。しかし妙ですね。数が少ないような」
「……北朝の連中め。何を考えている？」
平原の向こうに立ち並ぶ北朝軍。迎え撃つ南朝軍の将は箸はし尾おである。
この地における戦況は完全に膠着しており、両陣営ともに身動きが取れない状況が続いていた。それがこの時期になって、いきなりの進軍。北朝の動きは不可解であった。
一向に変わらぬ戦況に業を煮やし、一か八かの策に出るつもりか。だが、どうにも腑に落ちぬ。
「……悩んでも仕方なし。如何なる奇計妙策があろうとも粉砕してやるまでだ」

　箸尾は北朝の軍勢を迎撃すべく陣を布く。格段、策を弄したりはしない。戦の常道に則って、軍を展開する。
　どんな戦でも、流れは大概同じだ。矢を放ち、敵陣が崩れたところに騎馬が突撃する。長物を手に兵士達が激突する。そして武者は空を制するために、敵の武者と斬り結ぶ。
　武者は一騎当千の武力を持ち、また空を翔ける武者相手に、地上の刃は届かない。ゆえに戦では空を制することが重要になる。
　両軍の激突まで、あと少し。配下の武者達を引き連れて、箸尾が飛ぼうとしたその時であった。
　目に見えず、音もない何かの〝波〟が南朝軍全体を包み込んだ。辛うじて武者達だけがその違和感に気づいた。
「金打声？　いや……」

《くるわし》

　その瞬間、南朝軍は崩壊した。
　武者を除く全ての兵が、武器を手から落とし、身動きが取れなくなったのだ。
「どうした？　何が起こった！」
　突然の異変に、武者達は取り乱した。近くの者を捕まえて問いただそうにも、誰もが首を横に振り、怯えた瞳で震えるばかり。呆然とその場に立ちつくす者、膝をついて泣き出す者、悲鳴を上げて逃げ出す者さえ現れる始末だった。
　それは敗軍の恐慌であった。一度も剣戟を交えることなく、南朝軍は潰走する。
「待て、逃げるな！　ええい、どういうことだ！」
　戦意を喪失した南朝軍に、敵軍が放った矢が雨あられと降り注ぐ。為す術もなく死んでいく兵士達。騎馬に追い立てられ、槍やり衾ぶすまに貫かれ、だがそれでも兵士達は戦おうとしない。
　そして、空。勝利を確実のものにするために、武者の一団が高速で

飛来する。敵将の金打声が狼狽える箸尾を嘲笑っていた。
「勝敗は既に決した。観念してその首、ここに置いてゆけ！」
「筒井！　おのれ！」
　怒声と共に箸尾は飛翔する。降下する筒井と正面から激突、刃が交差し、火花が散る。
　激痛が走る。劔冑が右肩部甲鉄への被撃を報告する。
　武者戦においてはより高い位置を奪った側が有利である。落下の勢いを利用することで、突進力を得るからだ。完全に出遅れ、高度の優位を取られた箸尾にとって、今の状況は厳しい。
　劣勢から挽回するため、痛みを堪え迅速に旋回する。だが敵の対応も素早い。旋回する両騎の軌跡が美しい双輪を描く。
　再び激突。先ほどよりさらに強く。身体の芯に響く衝撃。
　──まずいな。痛みすら感じん。
　劔冑の騎航速度があからさまに激減する。水の中を泳ぐみたいだ。致命的なほどに遅い旋回──既に敵騎は眼前に。
「これは貴様らの仕業か！　筒井！」
「何。我らが大将の同志になってもらったのよ」
　振り下ろされる刃の煌めきが、箸尾の見た最期の光景だった。

「箸尾が討たれた」
　告げて楠木は眉をしかめる。たたでさえ不吉な顔が、地獄の牛ご頭ず馬め頭ずすら尻尾を巻いて逃げ出しそうな形相になる。
　楠木の、見る者を射殺さんとするかのような視線、その先に並ぶのは十三人の男女、楠木が懐刀として恃む十三騎である。
「妙なのは状況だ。箸尾の軍は戦う前に逃走している」
「寝返りですか？」
　訊ねる越智に、楠木は首を横に振る。
「撤退ではない。敗走だ。箸尾の軍は敵の追撃を受け、潰されている」

「そしてさらに奇妙なことが」
　楠木の言葉を継いで、狭霧が説明する。
「生き残りの中に、相当数の乱心者が現れています」
「……乱心？」
　聞き返すのは口数の少ない新田。
「逃走後、仲間に斬りかかった兵が多数現れております」
「恐怖のあまり錯乱したのであろう。珍しいことではない」
　情けない、と阿蘇は立腹する。その横で菊池がうむ、と頷いた。
「はい、確かにそのとおりかも知れません。ですが数が多いです」
「よほど恐ろしいものでも見たのか。それとも呪まじない、妖術の類かの」
　十三人の中でも一際浮いている僧衣の男、傑けつ堂どうが冗談めかして笑う。だが篝は真剣な表情で返した。
「……陰義かい？」
　その可能性は楠木も真っ先に思いついた。劒冑の中でも特上の品だけが操る、理外の業──陰義。確かに陰義ならば、この世在らざる怪異を起こせても不思議はない。だが。
（規模が大きすぎる）
　一軍を狂わせるほどの陰義──どれほどの力を有しているというのだ。余程の大業物でなければ、このような大業は起こせまい。少なくとも楠木はそのような劒冑を知らない。
　数々の名甲を所有する足利家なら、あるいは。しかし、ならば何故今まで──百年もの間──その力を使おうとしなかったのか。合点がいかぬ。
（まさか最近たまたま手に入れた、とでも言うつもりか）
　馬鹿らしい、と吐き捨てる。一瞬思い浮かべたものを、むりやり意識の隅に追いやって。
「生き残った兵達をさらに詳しく調べよ。それとしばらく北朝の動きに気をつけろ」
　──胃のあたりが嘔むかつく。

楠木は顔をしかめた。何も食中あたりを起こしたわけではない。この感覚が来るときは、たいがい不吉なことが起きる。邪悪の気配、とでも呼べば良いだろうか。

—邪悪。そう、先ほど脳裏をよぎった銀色の影が大きくなっていく。

（—村正）

あの大妖甲ならば、あるいは。

×　　　　　×　　　　　×

帯刀タテワキの儀という。

武人と劒冑とが互いの資質を問い、使い手として武器として双方が承認し合う。この儀式を経て初めて、武人と劒冑の間に縁が結ばれ、異能の力を揮う武者となるのだ。

足利の将軍として、北朝の主将として、彼は再び漆黒の大甲虫—村正と向かい合っていた。

村正と結縁するために、以前触れたときに感じたおぞましい思念……もう一度あれと対峙する。そう考えただけで怖気が震う。

しかし逃げるわけにはいかぬ。村正を鎧い、その武威を以て諸将を束ね、北朝を盤石なものとする。それこそが弟の誠意に報いることにもなる。

意を決して、漆黒の甲鉄に触れる。

　途端に流れ込む、身の毛もよだつ景色音響匂い気配肌触り味思念運命──！

　狂気に陥りそうになる精神を何とか繋ぎ止める。この嵐の向こうに行かなければならない。さもなくば望むものは得られぬ。ここでは退けぬのだ。

「……村正よ。何故おぬしは荒ぶるか？　この世を憎んでおるのか。それともただ血に飢えているだけなのか」

　おぞましき思念はより激しく襲いかかる。暴虐なる嵐の中心で彼は叫ぶ。

「村正！　おぬしは答えねばならん！　何故ならば、武人が武器に武の在り方を問うておるからだ！　答えよ……おぬしは何ものか！」

　嵐を抜ける。その先に見たのは光──否、闇──否、わからない。ただ、そこに何かがいるのを気配で感じた。再び、問う。

「おぬしは何ものか」

《村ムラ正マサと云う》

　そこにいたのは、蝦夷えみしの男だった。

《劒冑で、在る》

　蝦夷の男の姿が揺らぎ、漆黒の大甲虫へと変貌する。

「武器だな」

《如何にも。武の器で在る》

「私は足利の当主である。武家の棟梁である」

《武人であるか》

「如何にも。武を揮う人である」

　武人は武器を。武器は武人を認識する。互いを認識してふたりは対等となり、対手として、対話が生まれる。

「私の問いに答えよ。何故おぬしは荒ぶるか。この世を憎んでおるのか」

《否。何も憎まぬ》

「ならば血に飢えているのか」

《劒冑は渇かず飢かつえず。この身はただの冷たい鋼鉄はがねなれ

ば》
「ならば、何を荒ぶることがあるのか」
《冑うてが武の器だからだ。武とは、ただ荒れ狂うばかりのちから》
「……それはただのちからに過ぎぬ。野の分わきの風や海かい嘯しょうと同じだ。武では、ない」
《武である》
「それでは道がない。武道ではない」
《武に道などない》
「……おぬしが言う、武とは？」
《殺法なり。凶法なり。武とは、ただ命を奪うちからを云う》
「狂っている」
《左様。全ての武は狂っている》
「おぬしは仕手に、何を望む？」
《武の真理を》
「どのようにして？」
《善悪相殺》
「とは？」
《武は殺法なり。凶法なり。己の刃を善と云い、敵の刃を悪と云うも、世に善悪の定めは単一ならず。故に誰もが己の善なるを信じ、敵の悪なるを憎む。故に武が一殺するならば、一善一悪共に滅ぶ。村正は……善と悪を共に断つもの》
「……殺すというのか。何もかも」
《覚悟がなければ、武を揮うべきではない》
「……武を捨てよ、と？」
《冑うてが問う。武人よ、我と共に凶刃ハガネと生なる覚悟ありや？　無かりせば去れ。有りせば……己が覚悟を宣誓す可し》
「私は……」
　──やはり妖甲だ。それも想像以上の。
　村正の真意に彼は気づいていた。つまりはこう言っているのだ。自分を用いて敵を殺したならば、その代償に味方の命を差し出せと。

　血に飢えているのではないと、村正は答えた。確かにそのとおりだ。
　村正は信じている。それこそが武の本質であると。何もかもを殺し尽くす武器としての役割を全うすることを欲している。
　血に飢えている、では生ぬるい。そんなものはただ殺戮を娯楽としているだけだ。ずいぶんと無邪気で可愛らしいものだ。
　村正のそれは信仰に近い。神聖不可侵の思想。不破の誓約。このような怪物と縁を結んでよいものか？　自分はとんでもない過ちを犯そうとしているのではないか？
　だが、それでも──
「……私は武を治める。武の威と道を以てこの戦乱を終わらせる」
《……左様か。ならば宣誓を》
　そうして、彼は口ずさんだ。恐ろしい詩うたを。

　かくして、漆黒の武者は顕現した。
　刮目せよ、この雄姿を。指先、爪先、刃の切先にまで満ちる途方もない力の気配。見る者を圧倒する威厳。まさしく王者の姿であった。
　生まれ変わった兄の姿に、弟は感動していた。
「素晴らしい……何と輝かしい御姿。兄上、それがしの念願はここに成就しました。兄上こそがまさに大和を救う英雄！」
「……確かにこの劒冑の力、想像を絶する。まさか、これほどのものだとは。大和を救う──それは決して夢幻ではないだろう。だが……」
「兄上。村正の何を見ましたか？」
「……うむ、お前には話しておかねばなるまい。この村正が如何なる劒冑であるかを。村正の持つおぞましき呪戒のろいと、恐るべき能わざについて」
「……呪戒のろいと能わざ？」
「村正は今以上の大災厄を、大和にもたらすやもしれぬ」

善悪相殺。

ひとつの悪──憎き敵を殺したならば、ひとつの善──愛する味方も殺す。それが村正の呪いである。

さらに恐ろしいことに、村正はこの呪いを伝染させる。それが村正の能力〝精神同調〟である。

村正は〝波〟を放散する。その波を受けた者は村正を纏う者と精神を同調させる。そう、善悪相殺の呪いに染まった武者と、だ。

汚染波なみを受けた者は皆、呪われる。正邪諸共に断つ、呪いの集団と化す。

村正はこの呪戒のろいと能わざで、自分が唱える武の真理を広げようとしているのだ。

「……それが村正の能わざ……何と凄まじい……」

兄から村正の全てを聞かされた弟は震えていた。呪わしき村正の正体を知り、戦慄したからか。否、違う。

「やはり神は兄上を選ばれた。ついに終わります。百年に及ぶこの戦乱が、兄上の手によって。我ら北朝は無駄な血を流すことなく、勝利を収めることでしょう」

彼は歓喜に震えていた。村正の呪戒と能力は、北朝に完全な勝利をもたらす。そう確信したのだ。

「村正は妖甲に非ず、救世ぐぜの聖甲なり！　まさしくこれぞ兄上のための劒冑。全ては天の采配に違いない！」

×　　　　　　　×　　　　　　　×

　箸尾が討たれてから、情勢は急変する。
　北朝は大規模な軍を展開、急激な侵攻を開始した。足利将軍が自ら率いる主力である。
　南朝もまた、主将楠木が出陣。大軍同士が激突する大きな合戦になるはずだった。
　だが、そうはならなかった。戦は一方的だった。
　箸尾の時と同じであった。南朝軍は戦う前に潰走したのである。

　上空より見下ろす戦場は阿鼻叫喚の渦だった。
　戦意を失い逃げ惑う友軍と、それを引き裂く敵軍。これはもう戦と呼べるものではない。
「御館様！」
　楠木の元に薙刀を持つ劒冑が飛んでくる。届く金打声にははっきりと焦りの色があった。
「狭霧か。地上したは酷い有様だな。なるほど、箸尾はこれにやられたか」
「武者には影響ないようですが……」
「甲鉄に護られているからだろう。ということは、やはり」
「敵の陰義ですか、この気に障る波おとは。金打声に似てますが」
「とんでもない切り札を隠し持っていたようだな、室町殿は」
「如何なさいます？」
「逃げる。これ以上、地獄に付き合うつもりはない」
「既に傑堂和尚が兵達をまとめつつあります。間もなく撤退の準備が整うかと」
「さすがだな。では時を稼ぐとしよう」
「……よりにもよって主将自ら打って出ると？　無謀ですよ」

というものの、狭霧の声にはあきらめの響きがあった。
「俺にはこのやり方が性に合っている。〝悪党〟の流儀というやつだ。それに……」
もし兜の下を見ることができたなら、彼が陰惨な笑みを浮かべているのがわかっただろう。闘争を喜びとする修羅の笑みだ。
「俺が一番強い」
言うや否や、合当理がったり──劒冑が背負う、空を飛ぶための器具である──が爆音を轟かせた。楠木が翔ける。
逃げ惑う南朝軍を追って、先走っていた北朝の武者をすれ違い際に斬り捨てる。敵の注目が集まる中、楠木の金打声が高らかに響き渡った。
「かかってこい、北朝の腰抜けども。我が劒冑、小竜景光の錆となる名誉を呉れてやる！」
劒冑の銘に、北朝の武者達は色めき立った。
小竜景光。
備前長船派の鍛冶師景光が鍛えた、まぎれもない名甲である。かつて楠木正成が纏ったこの劒冑は楠木の歴代当主に伝えられてきた。いわば南朝軍の旗印とも言える。
「大将首だ！」
「討ち取れば、大功ぞ！」
血気に逸る一人の武者が飛び出してきた。応えて楠木もまた武者に向かって突撃する。
構えは双方共に常道である上段。ならばと武者は楠木の下方に抜けて、斬り下ろそうとする。
「御首級みしるし頂戴！」
「その意気や良し！　だが足りぬ！」
激突の瞬間、楠木は身体を回し、上下を反転させて武者を迎え撃つ。上段に構えた太刀を上方に向かって振り下ろす形となる。
「吉野御流〝霞返し〟」
楠木の太刀が甲鉄を破り、武者は袈け裟さ懸がけに斬られて墜ち

る。
　そのまま止まることなく、次の標的に狙いをつける。今度は身体を垂直に倒し、迫る敵騎の真横へと抜け、狙い澄ました一撃を繰り出す。
「吉野御流〝松マツ風カゼ〟」
　悲鳴もなく武者が爆発する。合当理を破壊されたのだ。
　ここまでのわずかな時間で、既に三人が討たれた。北朝の武者達は楠木を恐れ、身動きが取れなくなる。その隙を狙って、薙刀を持つ劒冑──郷則重を纏う狭霧が斬り込んでくる。不意を打たれた敵武者を斬り捨て、楠木と並ぶ。
「お供します」
「ついてこれるかな？」
　小竜景光が翔ける。郷則重が翔ける。刃金はがねの颶ぐ風ふうとなって、戦場の空で荒れ狂う。

「あれが楠木か。噂に違わぬ猛将だな」
　楠木の激闘を見上げるのは漆黒の劒冑、村正を纏った足利将軍。その横には無骨だが剛健なる劒冑を纏う弟が控えている。
「厄介ですな。武者には〝波〟が届きませんから」
〝波〟──すなわち村正の〝精神同調〟である。村正と結縁した兄の話を聞き、彼が最も興味を示したのはこの能力だった。
　善悪相殺の呪戒を広めるこの能わざを敵軍に向かって用いる。それが彼の策だった。
　敵を殺せば、愛する者も殺さなければならない──その呪戒に縛られ、南朝軍は戦意を喪失したのだ。
　この力があれば北朝は血を流すことなく、全ての戦で勝利する。万が一、南朝軍が覚悟を決めて反撃に出たとしても、北朝こちらが殺された数だけ、南朝あちらも死ぬ。完璧な策であった。
　唯一の欠点は先ほど彼自身が語ったとおり、武者は劒冑に護られて

いるため〝波〟が届かないことである。
「ですがしょせんは無駄な足掻き。一騎や二騎が奮闘したところで戦況は覆りませぬ」
「……今、南朝の主将である奴を押さえれば、この戦乱いくさは終わる」
「兄上、まさか自ら？　……確かに村正ならば、相手が小竜景光とはいえ後れを取ることはないでしょう。しかし呪いが……」
「楠木を討つつもりはない」
「では？」
「武者を汚染する手立てがある。集めて強めた〝波〟の塊を直接埋め込めばよい」
「何と、そのような力まで備わっているとは」
「さらに汚染された武者は〝波〟を放つ。疫病と同じだ。みるみる敵方は呪いに侵されてゆくだろう」
「それならば確かに主将を〝波〟で侵せば決着がつく。しかし捕らえられますか？　殺さずに、あの楠木を」
「そのための村正よ。ふふ、主将同士の一騎打ちなどまるで語り物の一場面だな」
「兄上の力を天下に知らしめる良い機会。お供いたします」
　黒き王者が翔ける。剛き武者が翔ける。鋼鉄の波濤となって、戦場の空に舞い上がる。

《御注進。敵騎、四五度下方うしとらのしも》
　小竜景光の警告に、楠木は振り向いた。迫り来るは月のない闇夜の漆黒。禍々しく荘厳な黒い劒冑の武者だった。
　どくん、と。心臓が激しく鼓動した。胃の辺りにわだかまる焦燥感。
　周囲の武者達がざわめく中、漆黒の武者から金打声が届く。どうやらいきなり斬りかかってくることはないらしい。

「敵ながら天晴な武者働き。さすがは楠木。我ら足利を代々苦しめただけはある」
「ほう。ということは貴方が室町殿か。主将自ら出張ってくるとは酔狂な男だな」
「人のことを言えた義理ではあるまい。だが貴殿の健闘もここまで。見よ、地上の状況を。もはや南朝に勝ち目はない」
「そうか……やはり貴方の仕業か。その劒冑の陰義ちからを使ったのか」
「答える必要はない」
「そうだな。武者の会話など刃これで充分だ」
　不敵に笑い太刀を構えつつも、楠木は警戒していた。状況は完全に北朝の勝ち戦。だというのに、主将がわざわざ危険に身を晒すなどあり得ない。狂っているのでもなければ、余程の罠が待ち構えているに違いない。
（そして、この劒冑……）
　おそらくは兵達から戦意を奪った元凶だろう。凄まじい力を秘めているのが気配から感じられる。そして、おぞましい存在感も。
（――妖甲）
　あの銀色の劒冑のような。あれに匹敵する魔物が他にも居ろうとは。
　何故だ。百年もの戦乱の中で、どうしてこれほどの大妖甲が二領、まったくの同時期に。
（手の内がわからぬ以上、迂闊な真似はできないが……是非も無し）
　意を決して、楠木は小竜景光の合当理を噴かせた。漆黒の武者を振り払うかのような速度で、空を走る。漆黒の武者もまたその後を追う。
「御館様！」
　楠木を追って狭霧は飛び出そうとした。しかしその行く手を阻むように、一騎の武者が襲い来る。
「兄上の邪魔はさせん！」

　振るわれた刃を何とか避けて素早く旋回。敵騎もまた大きく弧を描き、再び迫る。
　敵騎が手にするのは奇しくも郷則重と同じ薙刀であった。得物と甲鉄の造りから、狭霧は敵の正体を知る。
「大業物、骨喰藤四郎！　足利の者か！」
「かく言う貴騎は郷則重。それほどの劔冑を纏うとは南朝の十三騎だな！　面白い、相手にとって不足なし！」
　再び激突する両騎。剣戟の音が鳴り響く。戦場音楽を奏でる。

　激しい剣戟が、空を震わせた。
　高度で優位を取った小竜景光が打ち勝ち、漆黒の武者に一撃をくれる。だが。
「くっ……！」
　予想外の手応えに楠木は驚く。異様に硬い。太刀を振るった腕が痺れていた。
《戦果。敵騎、左肩甲鉄に被撃。しかし損傷は極めて軽微》
「ほぼ無傷だと。何という劔冑だ」
　高度優勢から敵騎の下に抜けた状態で振るう、申し分のない一撃であった。そのはずなのに、この結果。常識では考えられない堅固な甲鉄である。
　両騎共に旋回。だが今度は漆黒の武者が高位を奪う。
「旋回性こしは向こうが上か」
　敵騎が仕掛けてくる。上段に構える得物は、この時代の主流である野太刀である。武者の剛力で振るわれるその一刀の威力は強烈だ。しかも高度は劣勢。先ほどの一撃ですら通用しなかった以上、この状況で打ち合いに勝てる道理はない。ならば。
　太刀を構え直し、楠木は吶喊する。裂帛の気合が込められた太刀が振るわれ──
　──なかった。

「何？」
　漆黒の武者の振り下ろした野太刀が空を切った。小竜景光の姿が忽然として消えたのである……否。
「今の動きから躱したのか。器用な奴よ」
　打つと見せて躱す吉野御流〝虎コ眼ガン〟──小竜景光の動作は偽装であった。剣術とはとどのつまり、どこまでも化かし合いなのだ。
　逃れた小竜景光は加速して、村正から距離を置く。戦域から一旦離脱し、勝負を仕切り直す腹積もりだ。
「速いな。向こうが立て直す前に追いつくのは無理か」
《速力あしは備前、旋回こしは関……さすがは小竜景光、長船派の名に恥じぬ名甲よ》
　劒冑の感銘は仕手にも伝わってきた。
　劒冑は通常、生前の人間らしい感情は失っている。その心魂までもが鉄と化し、劒冑の一部となっているのだ。それに較べると村正は極めて人間的といえた──その思想が常軌を逸しているとはいうものの。
《仕手も良い。なるほど、あれが楠木様か。強敵ですぞ、御堂》
「殺さずに無力化する」
《そんな余裕がありますかな？》
「おぬしの力ならばできよう、村正」
　強敵には違いない。仕手も劒冑も一流の中の一流。最強と呼んでも差し支えない。
　それでも彼が勝利を確信するのは、村正の力にある。
　そう、村正の能わざは〝精神同調〟だけではないのだ。

×　　　　×　　　　×

　薙刀は源平合戦の頃に広く使われたが、南北朝争乱になると槍の登場もあって、戦場で使われることは少なくなってきている。
　だが武者の間ではいまだ愛用する者も多い。障害物のない空は、長物を振り回すのに好都合であるからだ。さらに槍では、高速で飛行する武者を狙って刺すのが難しい。このこともまた薙刀が廃れていない理由のひとつである。
　足利将軍の弟である骨喰藤四郎の仕手。大山祇神社の巫女であった郷則重の仕手。互いに劣らぬ薙刀使いである。
　両騎が描く双輪に、さらに二振の薙刀が描く円が重なる。火花を散らす。
《吉光は告げる。左腕に被撃。損害大》
「クッ！　きついのをもらってしまったな」
　骨喰藤四郎の報告を聞くまでもなく、左腕は激痛に苛まれている。何とか堪えて薙刀を支えるが、力が入らない。次の打ち合いでは力負けする可能性が高い。
「だが、こちらも一撃与えてやった。ならば充分！」
　彼もまた敵騎の甲鉄を破った、大きな手応えを感じている。今の一合は相打ちだった。
　郷則重が仕手に被害を報告する。
《右肩甲鉄に被撃。中破。内部骨格に軽度の被害あり》
「くっ……恐ろしい切れ味。骨喰の銘、飾りではないな」
　肩を深く斬られた。だが腕は動く。敵騎の方が被害は大きいと仕手──狭霧は判断した。
「このまま押し切る！」
《諒解》
　合当理を噴かせて、郷則重が疾駆する。この機を逃さず果敢に攻めてくる。

だが──それは対手あいてにとっては思惑どおりの展開だった。
「奴の肉の味は覚えたな？」
《吉光は答える。是なり。吉光は敵を喰らった》
「ならば──骨までしゃぶってやろう」
《吉光は求める。呪句を詠唱せよ》

「夕べあしたの鐘の音
寂じゃく滅めつ為い楽らくと響けども
聞いて驚く人もなし」

骨喰藤四郎の異変に、狭霧は気づいた。
「敵の動きが妖しい」
《大きなちからを感じる。陰義を発動させるものと推量する》

「花は散りても春は咲く
鳥は古巣へ帰れども
ゆきて帰らぬ死出の旅」

「させぬ！」
「もう遅い！」
両騎がぶつかり合う。打ち合いに勝ったのは片腕が使えぬはずの骨喰藤四郎だった。激突の瞬間、郷則重の動きが鈍ったのである。そこに骨喰藤四郎の刃が斬り込む。
「ああ……ッ！」
あがった悲鳴は苦痛を訴えるものではない。嬌声であった。
「……どうした、女？　骨喰ほどの逸物を眼の前にしての歓喜、気持ちはわかるが少しは慎め。はしたないぞ」
「貴様……何をした！」
「可哀想に。こんな刃で斬られれば、さぞかし痛かろう。だから情けをかけてやった」

　骨喰藤四郎が飛来する。郷則重は……立ち向かわない。辛うじて避けようとするが、その動きも鈍い。三度、骨喰の刃が郷則重を──狭霧の肉体を刻む。

「ア────あ！」

　先ほどよりもさらに甲高い嬌声。戦場にはあるまじき艶めかしさだった。

「ひっくり返したのだ。苦痛いたみを快感よろこびに。貴公はもう我が刃の誘惑から逃れられん！」

〝痛覚反転〟──それが骨喰藤四郎の陰義である。一度斬った相手の感覚を侵し、狂わせる。敵は骨喰藤四郎に与えられた苦痛をすべて快感と誤認するようになるのだ。

　苦痛が大きいほど快感も大きい。やがて敵は致命的な一撃を自ら受け入れて自滅する。

「……趣味の悪い。北朝の下衆に相応しい、外道の業だな……！」

「ほざけ牝犬。口では何とでも言えようが、肉体からだは嘘をつけぬ」

　骨喰藤四郎は薙刀を大上段に構える。その刃の輝きに狭霧は吸い込まれそうになる。

　身体が火照る。汗が噴き出す。手足が痺れる。下腹が疼く──。

「これが欲しいのだろう？　深く刺して掻き回してやるゆえ、好い声でなけ」

　視界が霞む。ぼやけて何も見えない……あの刃の切きっ先さき以外は。

　この状況で敵の一刀、はたして躱せるか……躱したいと思えるか。

×　　　　×　　　　×

　武者同士の一騎打ちは、高位の奪い合い。
　正面激突ツキウシで交差し、互いの背後に抜けて、旋回して再び激突する。
　結果、合当理が吐き出す噴煙が空に∞ふたわの軌跡を描く。双ふた輪わ懸がかりという名の所以である。両騎の力が拮抗しているほど双輪は完璧で美しい。
　この日、村正と小竜景光が描くのは、見事な双輪であった。
　しかしその美しさを斬り結ぶ当人達が見ることは叶わない。美しさとは無縁の過酷さがあるばかりである。
「剣腕では敵わぬな」
《さほど引けを取っているとは思いませぬが》
　仕手あるじの、弱気とも取れる言葉に村正は答えた。
　世辞のつもりはない。対手は確かに強い。その太刀筋の鋭さは、武人ではない村正にもわかる。だがその強敵を相手に、仕手が充分に渡り合っているのも事実だ。
「相国寺流甲冑礼法。一通り修めたゆえ何とか様にはなっているがな。私はしょせん凡才に過ぎぬ。対して彼奴あやつ、楠木の剣はまさに天てん稟ぴんよ。あれこそ英傑の器というもの。だがな」
　漆黒の劒冑に力が流れる。超常の武力を揮う劒冑がさらにその先、世の理を超える魔力を宿す。陰義だ。
「天稟の剣を、天命の剣にて破る！　この戦乱を終わらせるのだ。永い闇夜は明け、曙の光が世を照らす。それが私の道だ！」
《しかし御堂。ゆめゆめお忘れめさるな。村正の掟を》
「わかっておる。殺さずに制しなければならぬ。全ての戈ほこを止めるために。それが〝武〟だ」
《……冑うてと結縁した以上、御堂にも武の真実を知る時が来ましょうぞ》
　村正の力が頂点まで高まっていく。次の一合で決着をつける。敵は最強、南朝の主将楠木に名甲小竜景光。実力で勝る対手を、討つので

はなく捕らえるという大難業。
　だが、できるのだ。村正ならば。村正の陰義があれば。
　奇跡を可能にする村正の秘奥、その正体は━━
《御堂！》
　突然、村正が叫んだ。鋼の心を持つ劒冑には似つかわしくない、焦りに満ちた声だった。
《まずい！　敵の陰義だ！》
　劒冑に遅れて、仕手もまた危険を察した。
　━━殺気！
　それも気が弱い者ならば、ただそれだけで息の根が止まるのではというほどの。
　状況を把握するより早く、理解する━━先手を取られた。
《敵騎、一三〇度上方たつからたつみのかみ！　距離……》

　背面からの袈裟懸であった。

　鎖骨。
　胸骨。
　そして。

　小竜景光の太刀が、彼の心臓を両断する。

　武道とは勝機の奪い合いである。
　先センのノ先センならば、敵の油断や不意を突く。
　後ゴのノ先センならば、敵に先手を取らせ、それを防いで勝ちを得る。
　そして、先センの機。敵が先手を打とうとする、まさにその瞬間を制して勝利する。
　これを楠木が修めた吉野御流においては無明の理と称する。

——闇ヤミ夜ヨニ在アリテ道ミチヲ拓ヒラク。

その名が表すとおり難業である。先センの機は目には見えず、精細かつ入念な観察によって読まなければならない。

たとえば視線の動き。たとえば筋肉の緊張。たとえば呼吸の調整——そういった微妙な情報から、攻撃の兆候を悟るのだ。劒冑を纏う武者戦においては、その見極めはさらに困難となる。まさに達人の妙技である。

そして楠木はまぎれもなく達人だった。否、天才だった。否、ここは鬼才というべきか。

敵に対する愛にも似た執念。卓越した反応と剣速。それら超人的な才能をもって、楠木は先の機を逃さない。南朝最強の武者たる所以だ。

今度も、また。

楠木は知った。今こそ敵の罠が発動するその時なのだと。今まさに自分は死地に陥っているのだと。

同時に楠木は知った。今こそ絶好の勝機であると。わずか一瞬、蜘蛛の糸のように細い勝機。だが今ならば確実に殺せる。

そう——今この一瞬一刹那が、乾けん坤こん一いっ擲てきを賭すべき時！

「景光！」

《御意》

——呪句実行。

「ナウマク・サンマンダ・バザラ・ダン・カン！」

雷鳴の如き大爆音が戦場を激震させた。逃げる南朝の兵士達も、それを追う北朝の兵士達も皆、魂を砕かれたように放心した。

だがそれほどの大音声も楠木本人には届かない。

——音が、小竜景光に追いつけないのだ。

小竜景光の陰義は極めて単純明快なものである。
圧倒的な速力。ただそれのみ。
備前鍛冶は速力あしに優れるという。備前長船景光はその速力を追求した。陰義によって生み出した活力を合当理に集中、爆発させて、常軌を逸した加速を得るのである。
超加速の時間は短い。だがこの瞬間、小竜景光は音の壁を超える。
劒冑にとって速力は大きな武器だ。だが小竜景光の陰義は強すぎた。
御すことは叶わない。限界まで引き絞られた強弓が放つ矢のように、ただ射出されるだけだ。武者戦フタワガカリで使えるような代物ではない。
それでも有用な陰義には違いなかった。強襲に使えば、敵が態勢を整える前に戦闘を開始することができる。離脱に使えば、小竜景光に追いつける武者は存在せず、確実に逃げ延びることができる。遊撃戦を好む南朝軍にとって、まさにうってつけの劒冑といえた。
だが南朝六代目の主将であるこの楠木の発想は違う。劒冑と同様……あるいはそれ以上に常軌を逸した傑物だった。
この男は小竜景光の陰義を、武者戦で用いるのである。
速度は剛力。小竜景光の最高速度から放たれる一撃に耐えられる武者は皆無に違いない……当てることが可能であるならば。
御することができぬ騎航では敵騎を追えない。捉えるどころか自滅するのが関の山だ。
だが楠木は理不尽にもそれを成し遂げる。御せぬ騎航ならば、ただ真っ直ぐに飛べばよい。己自身を一本の矢と見立て、敵騎を狙撃する。
これは楠木の、先センの機を逃さぬ、鬼神めいた才能があって初めて実現可能な技である。
理論的に構築され、理論的に行使される技。だがそれは達人の鍛錬によって成されるものではない。突出した鬼才が、その才能を大前提

にして成される技。一代限りの剣。
　人はそれを、魔剣と呼ぶ。
「吉野御流堂上礼法〝月ツキ片カケ〟が景光崩し──〝倶ク利リ伽カ羅ラ〟」
　爆炎を噴き、小竜景光は流星と化した。雷鳴を轟かせ炎を従え翔けるその姿は、その銘が表すとおり破は邪じゃ顕けん正せいの竜に等しい。
　振り返る暇すら与えなかった。小竜景光は敵将を射止めた。一切の容赦なく、その心臓を粉砕した。
　殺した。確かに殺したのだ。

×　　　　　×　　　　　×

「兄上！」
　小竜景光の咆吼に、戦場の誰もが振り返っていた。彼もまた兄が討たれるその瞬間を目の当たりにした。ゆえに度し難い隙が生じた。
《吉光は警いましめる。敵騎、ほぼ直上》
「吉野御流合戦礼法〝雪颪ナダレ〟！」
　強力な打ち下ろしが、骨喰藤四郎を襲う。辛うじて受け止めるものの、左腕を負傷していた彼は薙刀を支えきれず手放してしまった。
「しまった！」
　追撃から逃れるため、大きく距離を取る。奇襲を仕掛けた武者も無

理には追わず、郷則重を庇うように並んで飛ぶ。
「狭霧、下がれ。篝が引き受ける」
「……かたじけない」
　兄への心配と己の窮地に焦る心を何とか落ち着かせ、郷則重の助太刀に来た武者と向かい合う。
　劒冑は業物ではあるようだが、銘まではわからない。拵こしらえから推測するに関鍛冶衆の系統と思われるが、いわゆる名甲の類ではなさそうだ。
　だが仕手の腕は立つ。先ほどの一撃で充分に見て取れた。郷則重の仕手に勝るとも劣らない。となればこの者もまた十三騎のひとりか。
「おのれ、一騎打ちに横やりを入れるとは見下げた奴。しょせんは悪党。卑しい吉野の豺やまいぬどもに、武者の誇りは期待できぬか」
「いたぶり嬲るが北朝のいう誇りとやらか。そんなに豺が怖いなら、屏風の虎とでも遊んでいろ」
「……吠えるなよ、痩せ犬」
「涙を拭けよ、負け犬。君達の大将は討たれた。まさかの大逆転だ。尻尾を巻いて逃げるといい」
「討たれた？　ふん、馬鹿を言え」
　その金打声には、はっきりと嘲りの響きがあった。窮地に置かれてのこの余裕。訝しむふたりに、彼は裁きを言い渡す閻魔の如く告げるのだ。
「もはやこの世に兄上を討てるものはおらん。これすなわち天意なり！　兄上こそが世を正し、天下を治めるのだ！」
　そして、奇跡は起こる。

　殺した。確かに殺したのだ。
　そのはずなのに。

《輪廻転生いのち・めぐる》

　□□□□□□！
　理解するよりも、劒冑からの警告が来るよりも早く楠木は反応した。不意打ちを何とか避けようと、身を捻る。
　回転する視界の中、自分を追って蛇のようにうねる閃きを見る。
　衝撃はその直後に来た。ぐらりと、体勢が大きく崩れる。
《御注進。右翼甲に被撃。大破》
「母衣ほろをやられたか！」
　右側の母衣──翼が綺麗に無くなっていた。これでは双輪懸はおろか、通常の騎航さえままならない。
　いったい何者がこの一撃を与えたのか。楠木は半ば確信していた。だがその直感を理性が受け入れられなかった。そんなはずがない。
　だが振り向けば、悪夢は確かにそこにいた。
　確かに殺した。完全に心臓を破壊した。そのはずなのに。
「……片翼を失ってなお飛べるのか。信じ難いな。これが小竜景光か」
　信じ難いのはこちらの方だ、と楠木は吐き捨てたかった。
　討ち取ったはずの敵将──漆黒の武者がそこにいた。
「……馬鹿な」
　心臓まで達したはずの傷は既にふさがっている。甲鉄にうっすらと浮かぶ一筋の線だけが辛うじてその名残を留めていた。
　劒冑は再生能力がある。損傷を受けようと時間をかければ、完全な状態に復元する。
　この治癒力は結縁した武者にも及ぶ。たとえ四肢を失うほどの重傷を負っても、繋げてさえおけば、いずれ元に戻る。生え代わることさえあるくらいだ。
　だが、これは異常だ。ありえない。
　たとえ劒冑の超能を以てしても、死人を甦らせることは叶わない。再生能力では間に合わない致命傷を負えば、武者とて死ぬのだ。
　そう、心臓を破壊されて生きていることなど、決してありえない！

「……怪物め！」
「大和を救うためならば、怪物にでもなろう」
　言って漆黒の武者は、その手に光り輝く球を生み出した。
「もはやこれ以上の流血は無用。〝卵〟を受け入れよ、楠木。それで全てが終わる」
「……〝卵〟？」
　光球のことを言っているのだろう。楠木は直感する。触れてはならぬ、あれは不吉の塊だ。だが……
「どのみち、その片翼はねでは逃げられまい」
　ここで詰みか？　漆黒の武者は今すぐにでもこちらを捕らえるだろう。何か手立てはないものか……。
　思考を巡らせる楠木を助けたのは、狙い澄まされた一本の矢であった。漆黒の武者は寸前のところでそれを躱す。
「桑原桑原。二度も醜態をさらすわけにはいかぬからな」
《……今の矢。心鉄の軸を狙って放つ、この技の冴え。もしや》
　見れば遠く後方、武者弓箭で武装した一騎の武者がいた。その姿に漆黒の劔冑が強く反応する。
《やはり……飽あき間ま様》
「うむ？　知っておるのか、村正」
《……昔の馴染みでございます。冑うてが蝦夷ひとであった頃の》
「そうか。おぬしは伊い勢せの國くにの鍛冶師。あやつを知っていて当然か」
　言って、足利は苦笑する。
「私も飽間のことは知っている。一時期は北朝こちらに仕えておったからな。まったく、南から北、北から南と慌ただしいことだ」
　まあ珍しくもない。主将として諸将をまとめてきた彼にとって、裏切りは日常茶飯事だった。昨日までの部下に命を狙われることも度々である。
　武者は二の矢をつがえながら、楠木に金打声を飛ばす。
「楠木殿。撤退の準備が整っております」

「……そうか。ならば地獄はここまでだ」
　飽間の矢によって、敵の隙は生じた。逃走のための手立ては整った。
　打つべきは、この一手！
「やれるな、景光！」
《御意》
「ナウマク・サンマンダ・バザラ・ダン・カン！」
　再び大爆音が轟き渡る。残りの気力を注ぎ込んでの陰義――片翼が失われている状態での超加速。無謀の極みであった。
　もはや騎航とは呼べない爆風に吹き飛ばされるような態ていで、楠木は逃げる。
　二矢目を放ち足利を牽制した武者が、その後を追った。去り際に振り返り、漆黒の劒冑を一瞥する。
「あの造り、おそらく……」

「御大将が退いた。篝達も退くぞ！」
「わかった！」
　篝と狭霧もまた、骨喰藤四郎に背を向けて逃げ出した。
　敵は追ってこない。ただふたりの背中に侮蔑の言葉を投げつける。
「尻尾を巻いて逃げるのは、どちらだったかな？」
　甘んじて受ける。これ以上の戦闘は無意味。今はただ生き延びることこそが肝要。
「すまぬ、篝……足を引っ張った」
「大したことじゃない。どのみち今回は負け戦だ。それにしても……」
　北朝の主将。漆黒の劒冑を纏った足利将軍。
　一軍を狂わせる妖術に、鬼才楠木の魔剣を以てすら斃たおせぬ不死身の肉体。
　何なのだ、この理不尽な存在は？　如何なる理り合あいによって成

り立っているのか、まるで見えてこない。
　斯様な魔物に、どうやって挑めばいいのだ？

　我が銘なは村正
　我、鬼に逢うては鬼を斬り
　仏に逢うては仏を斬るもの也

「我は楠木。南朝の武人もののふを統べる将だ」

　我との契りを求める者
　我と共に凶刃と生なる覚悟ありや
　無かりせば去れ
　有りせば――

「問い質さねばならんことがある。村正……二世千子右衛門尉村正よ」
《ほう》
　白銀の大蟻から返ってきたのは、鈴を転がすような女の声であった。
《なれが楠木様か。なるほど、さては御お父とと戦ったか》
「……やはり、あの漆黒の劒冑は！」
《始祖村正。五郎正宗の再来と謳われた、冑あれの御父よ》

「楠木殿。お耳に入れたいことがあります」
　あのみじめな敗戦の後、楠木の元にやってきたのは飽間であった。横に控えていた狭霧が露骨に嫌悪の表情を浮かべる。
「御館様は御多忙ゆえ、余計な時間を割いている暇はありませぬ。お引き取りを、飽間殿」
　狭霧の態度には理由がある。飽間は長く南朝に尽くした忠臣であっ

た。だが、領地である長島が北朝軍に囲まれたとき、彼は裏切った。敵を素通しして、北朝に降ったのである。
　裏切り自体は珍しいことではない。より良い待遇を求め、北へ南へと立ち回る佐々木や、洛中守護を任されながら先帝を北朝に売った赤松など、枚挙にいとまがない。
　だが忠臣である飽間の裏切りがもたらした衝撃は大きかった。今ではこうして南朝に帰参しているものの、未だ周囲の不審を払拭できない。
「重大な話ゆえ。是非とも」
「飽間殿。いい加減に……」
「良い、狭霧」
　憤慨する狭霧を楠木がなだめた。飽間と向かい合う。
「命を救われたな。礼を言う」
「恐縮の限り」
「して、俺に伝えたいこととは何だ？」
「足利の将軍が纏いし劔冑についてでございます」
　その言葉に楠木も狭霧も息を呑んだ。北朝に身を置いていた時期に、向こうの内情を掴んだのだろうか。
「知っているのか、あの劔冑が何ものであるのかを」
「いえ。ですが一目見たとき理解しました……長い付き合いでありましたゆえ。あの造り、しかもあれほどの名甲となれば疑いようもない」
「……どういうことだ？」
「すでに確認も取れております。里には孫しかおりませんでした。ならば、やはり。信じ難いことですが……」
「何の話をしておる」
「楠木殿。ついこの前、ようやく村正が献上されたと聞き及びましたが」
　村正。突然出てきたその銘に、楠木は戸惑った。飽間の意図が読めない。

「村正？　そういえば元はお前の管轄か。確かに届いた。しかし、あの劒冑は……」
「献上された劒冑は一領のみでございますな？」
「……飽間、何が言いたい。いや、まさか、そんな……」
　──胃が疼く。
　あの白銀の甲鉄に触れたときの吐き気がこみ上げてきた。

《左様。冑あれら村正は二領ある。冑あれは南朝に。そしてもう一領、御父は北朝に》
「ふざけるな！」
　楠木は激昂した。全てこの村正の仕業だったのか。
　妖甲であると判断した。この劒冑は狂人が造り上げたもの。必ずこの世に災いをもたらすであろうと。だから誰にも触れさせず、封印した。だというのに。
「何故、斯様な真似を！　貴様ら村正は何が望みだ！」
　村正の狂気は想像をはるかに上回っていた。天下にふたつとないはずの妖甲が二領。父と娘、ふたりとも同じ狂気に取り憑かれていたというのか。
　しかもあの力。一軍を崩壊させる恐ろしき陰義。村正は何を欲しているのだ？　この世を憎んでいるのか。それとも血に飢えているだけなのか。
《知れたこと。武の真実を広める。それが村正の願いよ》
「武の真実だと？」
《楠木様よ。南朝軍は御父の〝波〟を受けたのであろう？　そうとも、人の精神こころを侵す、冑あれら村正の能わざのことよ。あの能わざは冑あれにも備わっている。冑あれを用いれば対抗できよう。こちらも〝波〟で敵軍を侵せばよい》
「〝波〟……戦意を奪うあの力か。兵達はいったい何を恐れていたのだ？　話を聞こうにも要領を得ず、さっぱりわからん」

　兵達の誰も恐慌の理由を説明できなかった。ただ「戦えば大変なことになる」という予感だけが、彼らを怯えさせたようだ。
　そして今回もまた、箸尾の時同様、仲間を殺す乱心者が相次いだ。これも村正の力によるものなのか。
《意味がわからずとも、察することができたのだろう。〝波〟がもたらすもの。武の真実、善悪相殺を》
「……善悪相殺？」
《冑あれら村正には誓約がある。善も悪も分け隔てなく諸共に断つ、凶刃ハガネになるという誓約》
　楠木が思い出したのは、村正に触れた時に流れ込んだあの思考。
《冑あれとの結縁を望むのならば誓わねばならぬ。ひとつの悪にはひとつの善を。ひとつの憎しみにはひとつの愛を。殺してもらう》
　楠木は理解した。一殺につき一殺。敵を殺すたびに味方を殺せ。村正はそう訴えているのだと。全ての糸が繋がろうとしていた。
「村正、貴様は。貴様らの目的は……」
　善悪相殺の誓約……一軍を汚染する〝波〟の能わざ……戦意を喪失する兵達……仲間を殺す乱心者。
《周囲にいる者の精神を、善悪相殺の戒律を負う仕手と同調させる。それが〝波〟の正体よ。あまねく戦場は善悪相殺に支配される》
「物狂いめが！」
　邪悪なり、村正！　楠木ははっきりと嫌悪した。
　確かに強力な陰義を持つ劒冑だ。善悪相殺と〝精神同調〟──このふたつがあれば、戦わずして勝つことができる。だがこれは一つ間違えれば大惨事を生む恐ろしい能わざ。
　村正にはそのことがわかっているのだ。だから二領なのだ。北朝と南朝、双方に村正があれば、どちらか一方が有利になることはない。互いに敵軍を精神汚染するからだ。
　どちらが勝つということはなく、両軍とも敵味方の区別なくただ殺す。戦場は血みどろの地獄と化すのだ。
「大和を滅ぼすつもりか、妖甲！」

《それが武の真実よ。武は、ただ荒れ狂うばかりのちから。殺すきりの殺法なり。その行き着く先は滅びである》
「邪あしき妖しき村正！　人心を狂わせ無為の争いを引き起こす魔物よ！　貴様らの存在を俺は認めん。鋳潰して仏像にしてくれるわ！」
《……言ったな。劒冑に向かって、その言葉！》
　白銀の大蟻が発する金打声に、怒りが満ちる。
《愚昧！　将でありながら、武の真実に目を背けるか。人骨踏みしめ、怨念喰らい、這いずり進んで、血を啜る──武とは所詮、人喰いの所業よ。武の器である冑あれが魔物なら、武人であるおのれは悪鬼よ》
「賢さかしら口を利くな、屑鉄」
《口から血の臭いが漂っているぞ。腹を壊さぬようにな、楠木様》

×　　　×　　　×

　花の御所。足利将軍の自室に入ってきたのは、彼の弟だった。
「兄上。身体の御加減は？」
「元より何の傷も残っておらぬ。お前こそ腕を斬られただろう」
「まだ少し引き攣つりますが問題ありません。それにしても、さすがは村正。恐るべき劒冑でございますな」
「うむ。これで確信した。正しき世は来る。村正が切り開く」
　先の戦で大勝利を収めたことにより、畿内の隆盛は北朝方の優勢と

なった。
　村正を纏った足利将軍が武威を示したことにより、足利家の立場は確固たるものになろうとしている。
「つくづく楠木を逃したのが惜しい。あそこで〝卵〟を植えつけることができたなら、百年に渡るこの争乱も決着したであろうに」
「見ているこちらは胆が冷えましたぞ。今後はあのような無茶はお止めくだされ。もはや兄上が自ら出ずとも、北朝の勝利は揺らぎませぬ」
「ふふ、心臓を潰されたのは生まれて初めてよ」
　楠木に斬られた箇所を擦りながら、苦笑する。だが、やがて真剣な顔となり。
「さて、お前とはこれからのことについて話さねばならん」
「は？　と、言いますと？」
「私はな。次の将軍はお前だと思ってる」
「兄上、いきなり何を仰るのですか？」
「落ち着け。無論、はるか先の話よ。私とて早死にするつもりはない。だが、こんな時代だ。万が一のことはあり得る」
「縁起でもないことを」
「いや。こういうことは、はっきりさせておく必要がある。私には子がおらぬからな。お前になら安心して家を任せることができる」
「何と恐れ多い。兄上がそれほどに、それがしのことを気にかけてくださるとは」
「当たり前よ、血の繋がった兄弟ではないか。そしてその次は、間もなく生まれてくるお前の子に継がせると良い。これで足利の家は安泰よ」
「兄上……まだ生まれてくるのが男子おのこと決まったわけではありませぬ」
「おっと。これは少し早まったかな」
　言って、ふたりは朗らかに笑った。
　確信する。この戦が終われば、きっと良い世の中になる。

殺す必要も、裏切る必要もなくなる。人々に悪を強いる時代が終わるのだ。
北朝の……否、大和の曙だ。

×　　　　×　　　　×

楠木邸。鋼の竜が、邸の柱に絡みついていた。
小竜景光である。
劒冑は鎧としての形態の他に、動物を模った独立形態を持つ。利便性ゆえ馬の姿を持つ劒冑が多いが、大蟻の姿を持つ二世村正のように、風変わりな形状を持つものもいる。
小竜景光の独立形態はその銘が示すとおり竜である。長く伸びた姿ゆえに、何かに巻きついて待機することを好んでいた。
「景光。調子はどうだ」
柱を仰ぎ見て楠木が訊ねる。小竜景光は鎌首をもたげ、楠木を見下ろした。
《報告。機能はたらきは八割弱の恢かい復ふく。ただし合当理と右翼甲への被害が甚大。恢復には相当の時を要する。双輪懸は不可能》
「……そうか、すまなかった。無茶をさせたな。今はゆっくり休んでくれ」
《恐悦》
損傷が思った以上に大きい。これでは出陣は無理だ。

しかし北朝方は待ってくれないだろう。近いうちに大軍を率いて、決着をつけようとするはずだ。この危急存亡の秋とき、如何にして乗り越えるか。
「小竜景光を纏えぬ今、お前さんはどうするつもりかの？」
訊ねるのは僧形の男、傑堂。僧籍に入っているものの、元は楠木の血縁である。
そのせいか、相談役として頼られることも度々あった。
「村正を纏うか？」
「あり得ませぬ。あの劒冑は邪しきもの。纏えば必ず災いをもたらします」
「だが室町殿あちらさんは使っておる」
「おぞましいことです。勝つためならば手段は選ばぬとでも言うつもりか。それでは道理が通るまいに」
「善悪相殺に〝精神同調〟か。なるほど。同じ能わざがあれば対抗もできようが……」
「先に待っているのは泥沼の膠着。その間にも国は疲弊していく。まして戦にでもなれば」
「まさに末法、世の末よのう。ヒヒヒ」
「笑い事ではありませぬ、御坊」
「睨むでない。怖くて頭の毛が全部抜けてしまうわい」
笑って自らの禿頭を撫でる。しかしその瞳の奥に剣呑な光が宿るのに、楠木は気づいた。
「まあ、お前さんの言うとおりだ。村正のそれは力ではない。あくまで呪い……刃の報いは己に返るのよ」

「村正は纏えぬ。かといって戦では勝てぬ。となれば、やれることは限られておる」
楠木と別れ、傑堂は廊下を歩きながら、ひとり呟いていた。否。
「わかっておるな、上嶋」

「はい」
　いつからであろうか。傑堂の後ろには、ひとりの男が付き従っていた。
　中肉中背。美形ではなく、かといって醜くもない平凡な顔立ち。挙動、態度にもこれといって目立ったところはない。
　どこまでも凡庸な男であった。それゆえに極めて異常だった。
　何の特徴もない。正面からじっくり観察しても、目を逸らした瞬間、彼がどういう顔立ちだったか忘れてしまう。
　動き。呼吸。歩調にも癖がない。否、気配がない。目の前に立っていても見落としてしまいそうな、何もかもが希薄な男だった。
　楠木麾下の十三騎がひとり、上嶋。
　曲者揃いの十三騎の中にあってなお、彼の存在は特殊である。
「行けば、二度と帰れぬかもしれんぞ」
「さしつかえないです」
　即答する上嶋の表情からは、如何なる感情も読み取れない。
「やってくれるかの」
「すぐにたちます」
「例の手駒はどうだ？」
「あれは、とてもすじがよいです」
「そうか。ならば使え。仕掛けるならば、まさに今が好機よ」
「はい。しつれいいたします」
　そう言ったときには、既に彼の姿はなかった。
　ひとり残された傑堂は虚空を見つめている。その瞳はひどく冷たい。
「善悪相殺。そんな呪いがあるのなら、剣に迷いも生まれるだろうて。それで大将首を取れれば丸儲け。よしんば返り討ちにあったとて、勘定は合う」
　足利将軍が代償に失うとしたら、側近として恃たのむ弟あたりか。副将軍と称されるほどに力を持つ傑物だ。悪くない取引といえる。
　それに上嶋に与えた手駒は、足利将軍個人のために誂えた特別なも

の。分の悪い賭けではない。
「愛のために死ぬか。愛によって殺すのか。どちらにしても因果なことよ」

×　　　　×　　　　×

「総大将のおなりである。方々お控えなされよ！」
　花の御所。北朝の諸将が揃う間に、朗々と響き渡る声。
　皆が見守る中に現れたのは漆黒の武者。村正を身に纏う足利将軍である。
　村正が放つ王者の威風に、一同が思わず息を呑む。それが飾りでないことは、先の戦で証明済みだった。
　村正を纏う足利将軍の下、南朝を降し、この戦乱を収める。そのことを疑う者はもはや北朝にはいない。それほどに村正の示した武威は圧倒的であった。
「我が声に応じ、諸将が斯かく一堂に集まり、重ちょう畳じょう至し極ごくである」
　力が人を変えるのか、それとも理想が人を高めるのか。足利将軍の声は、以前とは別人のように、威厳に満ちている。
「さても昨今、南朝を名乗りおる逆臣どもとの戦いが重大な局面を迎えているのは周知のことである。恐れ多くも神器の簒奪がなされ、戦いに巷ちまたは荒れ果てた。かかる擾じょう乱らんを引き起こした逆

臣どもを討伐すべし」
　南北両帝ともに自らの正統を訴える以上、神器は重要だ。その奪い合いによって流れた血は、いったい如何ほどの量になろうか。
　──まったくの余談だが、とある島には四騎の劒冑が奉られている。島民達がいうには、その内の一騎は、壇ノ浦に沈んだとされる、かの神しん劒けんであるらしい。
　無論、疑わしい話だ。神しん璽じは南朝に奪われたままだが、神劒は清水寺で北朝が取り戻している。その島の言い伝えを真とするならば、北朝帝の下にある神器は贋作ということになってしまう。
　ではその四騎はいったい如何なる劒冑なのか。島民達はいう。御神器には呪いがかけられている。封印を解いてはならないと。何にせよ、それはまた別の物語である。
　足利将軍の演説は最高潮に達しようとしていた。
「諸将、今こそ秋ときである。足利の旗のもと、我らが帝を戴いて雌雄を決すべし。いざ起たん、奮わん、刃を持て！　八や幡わたの神かみの加護は我らにあり！」
　漆黒の劒冑を纏った将軍の声は朗々と彼らの胸に迫り、かつて彼を、総大将の器にあらずと内心貶めていた者でさえ、熱に浮かされたように鬨の声をあげる。彼は今、天下に隠れもなき北朝総大将であった。
　威厳と自信に満ちた兄の姿を、弟は誇らしげに見上げる。
　ああ、村正は、この兄に何とよく映えることか、と──。

　演説を終えた足利将軍の元に、彼の弟が寄ってきた。
　いよいよ決着の時が近い。そう考えるとふたりとも気分の高揚を抑えきれなかった。
「兄上、お見事でございました。兄上のお言葉で、北朝の結束は巌いわおの如く固まりましたぞ」
「そうか。此度の出陣が最後の戦となるだろう。お前にはもう少しだ

け迷惑をかけるな」
「水臭いことを仰れますな。それがし、骨を粉にし身を砕いて兄上に尽くす所存。共に新しい時代を築きましょうぞ」
「うむ、曙の光に照らされた正しき時代よ」
「では、兄上。今宵の宴までごゆるりとお過ごしくださいませ」
「そうだな、しばらく休むとしよう。戦にでれば忙しくなる」
「酒など用意させましょう。兄上、失礼仕ります」

「誰か。誰かおらぬか」
「はい、あなた。何か御用でしょうか？」
　兄のために酒を用意させようと人を呼ぶ。そこに現れたのは身重である彼の妻だった。
「……お前。身重のからだで何をしておる。寝ていろと言っただろう。お腹の子に障ったらどうする。奥向きの仕事は我が妹に任せておけばよい」
「大丈夫でございますよ。いずれ立派な益ます荒ら男おになろう子が、このしきのことでどうにかなるはずがありませんもの」
　妻の物言いに思わず彼は苦笑した。
「まったく。お前まで生まれてくるのが男子おのこだと決めつけておるのか」
「あら？　わたくしまで、とはどういうことですか？」
「いや、何でもない。それより、兄上に酒のご用意を……」
　仲睦まじい夫婦の横を、一組の男女が通り過ぎていく。
　だが出陣前の慌ただしさの中、印象の薄いそのふたりに気づく者は、皆無であった。
　ふたりは御所内を奥へ、奥へと進んでゆく。その先にあるのは将軍の部屋。

×　　　　×　　　　×

　身を隠すわけでもない。息を潜めるわけでもない。さも当然のように涼しい顔で、南朝の十三騎がひとり上嶋は進む。敵地の真っ直中、足利将軍が住まう花の御所を。
　しかし誰も気に留めない。すれ違う誰もが、彼を見過ごしてしまう。これはいったい如何なる幻術、妖術によるものか。
　いや、そうではない。これは純然たる技術。相手の視線、動き、呼吸を読んでその隙を突く。本質的には武術と変わらない。
　上嶋の姿が見えないわけではない。ただ意識に残らないのだ。人間は関心を向けている対象以外の事柄には極めて鈍感だ。上嶋はそんな意識の死角に付け入る。誰にも気づかれずに潜入任務を遂行する。
　すなわち間者。隠密。細さい作さく。もしくは後の世で一般化するこの言葉が、彼を表すのに最も適しているのかも知れない。
　──忍者。
　上嶋は影の仕事を専門とする、十三騎唯一の忍者である。
　今彼に付き従っている女も、彼の薫陶を受けている。南朝が彼女を拾ったときに、いずれ利用するため、上嶋が鍛えたのだ。
　ふたりの目標は北朝主将、足利将軍。目的は無論、暗殺である。
　北朝に村正がある以上、戦では勝ち目がない。村正を直接狙うにしても、あの小竜景光を纏う楠木ですら倒せなかった相手。正面からでは敵うまい。
　ならば装甲していない隙を狙って暗殺するしか他にない。
　無論、危険な任務である。敵地の真っ直中、味方の助けは期待できず、生きて帰れる保証は何もない。要は捨て石であった。
　しかし上嶋は意に介さない。己は楠木の影に過ぎぬ。影は見えず、聞こえず、意思もなく、屍拾う者とてない。ただの道具である。どうして命を惜しむことがあろうか。
　ふと上嶋は足を止めた。将軍の部屋まであと少し。だが見張りの目

が厳しい。今までのように進むのは無理だった。
「ここからはごまかせません」
　傍らの女に小声で語りかける。手筈は既に打ち合わせ済みである。あとは時間の勝負。
「すみやかにおわらせます」
　上嶋は堂々と見張り達の前に姿を現した。
「ごくろうさまです」
「え？　ああ……」
　見張り達が不審に思うよりも早く、隠し持っていた刃物がきらめく。見張り達は声もなく、喉を裂かれて絶命した。
「いきます。しょうぐんは、あなたがやりなさい」
「はい、必ずや。わたくしがこの手で自ら」
　答える女の瞳に宿るのは、澱む泥のように暗い妄執だった。

　絹を裂くような女の悲鳴に、足利は自室を飛び出した。
　見れば腰を抜かしたか、廊下に座り込んだ侍女が恐怖に震えている。
「何事か！」
「人が……殺されて……！」
　侍女が指差す先には、凄惨な光景が広がっていた。ここを見張っていたはずの護衛達が喉から血を流して倒れているのだ。
「侵入者か！」
　刀の鯉口を切りながら、侍女を守るように前に出る。だが。
《御堂！　その女、懐に匕首あいくちを呑んでおりますぞ！》
　村正の警告に、彼は間一髪で飛び退いた。腕に鋭い痛みが走る。倒れていた侍女が短刀を手に斬りつけてきたのだ。
「くっ、ぬかったわ」
「お命頂戴いたしまする！」
《御堂！》

　仕手あるじを助けるため村正が飛び出す。だがその行く手を、黒い影が阻んだ。二体は激突し、激しい金属音を鳴り響かせる。
《これは……劒冑！》
　影の正体は、大おお甲かぶと虫むしの姿を持つ村正によく似ていた。黒光りする甲鉄を持つ昆虫。しかし村正と違って角は無く、体軀は平たい。巨大な油虫──御器嚙ゴキカブリである。
《冑うての探査かんかくで捉えられぬとは。隠いん遁とんの業か》
　月山鍛冶の一派がそのような業を究めていると、村正は聞いたことがあった。そのような劒冑を用いるとなれば仕手は無論、隠密の類だろう。
　はたして、いつの間にか大油虫の横に、ひとりの男が佇んでいた。
「いかせません」
　男──上嶋は、村正を正面から見据えて思考する。足利将軍の首を取れば勝ち。斬られても村正の呪いを発動させれば勝ち。だが最上なのは──
「むらまさをこわす」
　将軍をここで討ち取っても、後を継ぐ者が再び村正と結縁する可能性は高い。そうなれば戦況が覆るところまではいかないだろう。
　ゆえにここで村正を破壊する。装甲する前ならば、それも可能だろう。
　何故ならば劒冑が十全に能力を発揮するためには、仕手の熱量を必要とするからだ。如何なる名甲も仕手がいなければ脅威にはならない。まさに宝の持ち腐れだ。
「おかくご」
　上嶋が刀を逆手に抜き放ち、構えを取る。
　──装ソウ甲コウノ構カマエ。

「太たい陽ようのきらめきも
　月げっ光こうの蒼そう明めいも一いっ瞬しゅん
　死しのしらべとかわる　わがさだめ

　されどつらぬく　けものみち」

　大油虫が爆ぜて、無数の甲鉄片が宙に渦巻いた。
　鋼の竜巻は上嶋を囲み、彼の全身をくまなく鎧う。
　仕手が劒冑の銘を呼んだ。
「あやだち　みちむね」
　一騎の武者がここに顕現した。村正と同じ黒い冑。だがその印象は正逆である。
　王者と暗殺者。最高位の座に君臨する者と最底辺の影に潜む者。村正を何ものにも染まらぬ不動の闇とするならば、この劒冑は何ものにも融け込む不定の影だ。
　──音もなく、影の武者が動く。
　駆けるわけでもなく、むしろゆっくりと。だが一瞬で間合いが詰まった。
　鋭く冷たい一撃が、鋼の大甲虫を襲う。

×　　　　×　　　　×

　何たる不覚。こうも容易く侵入を許すとは。
　もうひとりの刺客が劒冑を装甲したのを見て、足利は焦る。身のこなしから判断するに南朝の隠密か。しかも相当の手練である。楠木の直属である可能性も高い。

　この手の裏工作は南朝のお家芸ともいえた。かの大楠公が遊撃戦を得意としたのも、影の技に通じていたからだという。その技は秘密裏に受け継がれ、今もなお南朝の暗部を支えているのだ。
「ふん、楠木もなりふり構っていられんと見える！」
「わたくしの知ったことではない」
　女刺客は斬りかかる。迅く、鋭い。足利は舌打ちした。━この女、かなりできる。だが、それだけか？　女の剣には鬼気迫るものがある。こちらを怯ませるほどに。
「父の怨み、我が身の怨みを込めたる刃。いざ受けよ！」
「……どういう意味だ？」
　その言葉を不審に思った足利は、このときはじめて女の顔を真っ直ぐに見た。
　━すぐにはそうだと気づかなかった。
　頬は痩け、瞳は濁り、顔は憎悪に歪んでいる。血を吐くような声。幽鬼のような形相。
「お怨み申し上げます……殿！」
　心を病んだ者の顔であった。かつての面影はどこにもない。
「おぬしは、よもや……」
　そう、かつては違った。その声は甘く、彼を包み込んでいたはずだ。その顔は優しく、彼に微笑んでいたはずだ。そのはずなのに。
「御お高たか！　お前なのか！」
　彼女は、かつて愛したはずの━
「お願い……死んで……死ね！」
　動揺し追い詰められた足利に、憾うらみの刃が煌めき、迫る。

×　　　　　　　×　　　　　　　×

《輪廻転生いのち・めぐる》

　上嶋の刃は、村正に届かなかった。突然足下が崩れ、体勢が崩れたからだ。

「なんですと？」

　床を突き破り、人の背丈を超える石柱が生えてくる。

　飛び退きながら、上嶋は石柱を斬り払う。砕け散った破片が綺羅綺羅と輝いていた。

「水すい晶せう？　いや……」

　さらに続けて上嶋を取り囲むように、幾本もの石柱が突き出す。上嶋が再び石柱を破壊し、囲いから逃れようと刀を振り上げたその時。

「なんと」

　石柱は一斉に炎上した。業火に呑まれ、上嶋の姿が見えなくなる。

《目眩ましならば、これで充分》

　無論、この程度では武者を倒すことはできないが、この隙に仕手を助けるができる。装甲さえすれば、隠密如きに後れを取ることはない。

《御堂。装甲を──》

　そのとき、女の悲鳴があがった。

×　　　　×　　　　×

　愛しき人。
　武人なのに戦が苦手な、優しい御方。
　風流を好み、舞や絵がお上手で。そんな貴方様をお慕いしておりました。
　貴方様の腕の中に抱かれ、わたくしは満ち足りた安らぎを得ることができました。
　されど、一族と共に裏切り者の汚名を着せられ、親を失い、貴方様の愛を失ったわたくしに、もはや安息の地はありません。
　憎にっくき人。
　貴方様はわたくしに全てを与え、そして何もかも奪っていきました。奪われるために、与えられました。優しくて、何とも惨い御方。
　いまのわたくしには憎しみしか残されておりません。恨みを晴らすことでしか、本懐を遂げることはできません。
　愛を失ったわたくしは、憎しみでしか貴方様と繫がることが許されないのです。
　お怨み申し上げます。愛しき人。憎き人。
　わたくしの刃で果てられよ。そしてもう一度添い遂げるのです。

―高たか嶺ね御前。
　かつて足利将軍の深い寵愛を受けた女である。
　だが彼女の一族が南朝と通じていたために、主だった者は死罪。高嶺は将軍の側室だったこともあり、追放の処分となった。
　将軍にとっては高嶺の命を救うための苦渋の決断だった。
　親を殺され、汚名を着せられた怨みは理解できる。それでも彼女にはわかって欲しかった。あれほど深く愛し合った彼女にだけは。
　諸将の裏切りには慣れている。武人はしょせん弱肉強食だ。機会が

あればいつでも寝首を掻こうと狙っている者ばかりだ。武人を束ねるには力を示すしかない。
　それは村正を纏うことでさらに痛感した。だからこそ、このような殺伐とした時代を終わらせなければならないと、理想を抱いた。
　だが将領に幾度と裏切られた彼でも、愛した者に殺意を向けられるこの事実は受け入れられなかった。
　怨まれるのは仕方ない。だが南朝に降り、刺客となって、命を狙ってくるとは。それほどに激しい憎悪を、かつて愛し合った自分に抱いているのか。
　目の前が暗くなるほどの衝撃だった。自分がまともに立っているかもあやふやだ。訳もわからず、這ほう々ほうの体ていで転がるように刃を避ける。
　だがついに、高嶺の刃が、彼の喉元に――
　彼は戦が苦手だった。殺すことに嫌悪感があった。戦場においてでさえ完全には割り切ることができなかった。
　だがそれでも彼は武人だった。将であった。戦うべき時を誤ったことはなかった。
　相国寺流甲冑礼法。彼自身が如何に己の凡才を嘆こうと、修めた技術は骨の髄にまで深く刻み込まれている。敵を殺すための技術。

　相国寺流甲冑礼法〝孔ク雀ジャク〟

　それは見事な、居合の技だった。
　かつて愛した貌かんばせが、血の雨に濡れる。
　夜ごと愛おしんだ身体が頽くずおれ、血の海に沈む。
「　　　　　　　　　　　」
　最期に彼女が、彼の名を呼んだ、ように聞こえた。
　気のせいだったかもしれない。

×　　　　×　　　　×

（たかねが、しくじった）
　上嶋の判断は素早かった。
　村正を装甲させるわけにはいかない。炎の中から飛び出して、刀を抜いた体勢のまま呆然と佇む将軍を襲う。
「さがらんか、下郎！」
　戸をぶち破り、一騎の武者が上嶋に飛びかかった。刀を手にしていた右腕が斬り落とされる。失った右腕には構わず、さらなる追撃を躱すため、上嶋は大きく飛び退いた。
　部屋に突入してきたのは薙刀を構えた劒冑──骨喰藤四郎である。仕手の、怒りに震える金打声が、上嶋に叩き付けられた。
「貴様ァ！　肥溜めの蛆虫にも劣る下賤の分際で、よくも！」
　上嶋は思索する。骨喰藤四郎を躱して、村正もしくは将軍を仕留めるのは、たとえ捨て身をもってしても不可能。この場は退いて、次の機会をうかがうべし。それに高嶺が一応の目的を果たしている。
　身を翻して、上嶋は逃げる。骨喰藤四郎が金打声を飛ばして、周囲の武者に指示を出す。
「曲者は武者だ！　逃すな、追え！」
　出陣前なので武者の数は多い。混乱に乗じようとしても、御所の外へは出られないだろう。彼はそう判断した。
「兄上！　ご無事ですか！」
「あ……？　ああ……」
「その女は兄上を狙った刺客の片割れでございますか。ええい、どこまでも卑劣な。腸はらわたが煮えくり返るわ！」
　怒りに震える弟は、倒れているのが高嶺御前だとは気づかなかった。いまだ呆けている兄に向かって、語り続ける。
「それがしも逃げた曲者を追います。兄上には武者の護衛を……」
　──その時であった。

足利の手が自然に、顔の前へと持ち上げられた。彼自身、自分が何をしようとしているのか理解できない。
続けて、口が勝手に動き、言葉を発する。
「……鬼に逢うては鬼を斬る……」
「兄上？」
「……仏に逢うては仏を斬る……」
心臓が激しく脈打ち、呆けていた頭の中が明快になった。
これは……装ソウ甲コウノノ構カマエ！
身の毛がよだつ気配に彼は震えた。鋼の大甲虫が凝じっと彼のことを見守っている。
《御堂。誓約を果たされよ》
──村正？　おぬしは何を言っている？
《善悪相殺の掟、よもやお忘れではございますまい》
──善悪相殺。もしや。
《我ら、村正は善と悪を共に断つもの》
──確かに誓った。だが、それは。
《御堂は、悪と見做して一人を斬った》
──御高は私が愛した女で……
《よって──御堂は、善と見做す一人をも斬らねばなりませぬ》
──待て。待て。どういうことだ。
《御堂は、一人の敵を斬った。よって、一人の味方も斬らねばなりませぬ》
──そんな。おぬし、まさか。
《御堂は、憎んで一人を斬った。よって、愛する一人も斬らねばなりませぬ》
──嫌だ！　できぬ！　私にはできぬ！
《……それが村正の法。御堂が誓った不破の約定》
──やめろ！　やめてくれ！
《さあ、御堂あるじよ。一つの善を。一人の味方を。愛する一人を》
持ち上げた手を前方に突き出す。誓いの言葉を口にする。

「ツルギの理ことわりここに在り」

　漆黒の武者──夜の闇よりも冥くらく──振り上げる野太刀──炎に紅く照らされて──振り下ろされる野太刀──心の中で絶叫する──刃は止まらない──彼は最後に弟の顔を見届けようと──最後？　最後とは何だ？　そんなことは認められない──刃は止まらない──弟の顔は兜に覆われ、見えない──刃は止まらない──もう二度と、その顔を見ることは叶わない──刃は止まらない──刃は止まらない──刃は──

《誓いにかけて……殺しなされ》

　血に紅く染まる世界。
　絶望は、無明の闇よりも深く。

　かつて愛した女を失った。かけがえもない弟を失った。
　心の奥にあった何かが、断末魔をあげて死んだ。
　そして、彼は彼ではなくなった。
「ああ……いけない」
　横たわるふたつの骸を見て、彼は呟いた。
「お前達。そんなところで寝ては風邪を引く」
　足下の弟を起こそうとして、彼が纏っている劔冑に気づく。骨喰藤四郎。足利家の誇る業物のひとつだ。しかしその甲鉄は一刀の下に断たれている。
「……困ったなあ。壊してしまった」
　どうしよう、コレくっつかないかなあ。バレたら父上にこっぴどく□られてしまう。うーん……いっそ隠しちゃおうか。
　──そのとき、絹を裂くような悲鳴が彼の耳じ朶だを打った。
「……あなた？　あなた！」

　ああ、遅かった。今のを見られたか。どう言い訳しよう。

「義兄あに上うえ様、何ということを！　血を分けた弟に手をかけるなど、義兄上様は人でございますか！」

　えーと……誰だっけ？　ああ……たしか弟の……。

「もしや、力ある劍冑を手に入れた途端、この人が邪魔になったのですか！」

　まあ、落ち着いて。話を聞いて。これには深い訳があるんだ。

「仲のよいふりをして心の底では妬んでいたのですね！　ご自分より優れた、我が夫を！

　なんと卑劣で、なんと非情な！」

　……私が、弟を？　馬鹿言うな。何も知らないくせに。

　裏切りだらけの、肉親すら信じられぬような世の中で、何とか生き延びてきた。お互いを支え合って。

　それはこれからも永遠に変わることはない。そう信じていた――そのはずなのに。

「義兄上様の所業はまるで鬼！　貴方は……」

……もういい、うんざりだ。
「貴方は悪鬼です！」
──黙れ。
あまりにも五月蠅いので首を刎ねた。首だけで喚かれたら堪らないので、ちゃんと踏み潰しておいた。
ふう、これで安心。ようやく静かになりおった。なんと造作もない。我を軽んずる者など、一太刀で口を噤むではないか。
……はて？　何かを忘れておるような。
おっと、そうであった。善悪相殺。一人殺したのだから一人殺さねば。
しかし困った。弟の他に愛する者といえば……
──見つけた。
さて、どうだろう。生きておればよいが……良かった。まだ息がある。だったら殺せる。
どれ……我が取り上げてやろう。父の代わりに抱いてやろう。

駆けつけた兵達が見たのは、酸鼻極まる光景であった。
屍の山……喉を裂かれた見張り達に、女の骸。しかも、あそこに斃たおれている劒冑は骨喰藤四郎──将軍の弟君までもが。
そして燃える炎に照らされて、血の海に浸りながら、漆黒の武者が首無しの屍体を玩もてあそんでいる。
その姿は、屍を貪り食らう悪鬼の如し。まさしく地獄絵図であった。
やがて悪鬼は、屍体の腹から、赤黒い肉の塊を引きずり出した。肉の塊は細い尾で、屍体の股と繋がっている。
鬼の手の中、肉の塊は孵りたての雛のように震えている。噫ああ……あんな出来損ないの態ざまも、あれは生きているのだ。

おぎゃあ。

　肉の塊が泣いた、ように聞こえてた。
「見よ……この醜き肉の塊が、足利の世継ぎとなるはずだった、愛しき愛しき赤子よ！」
　肉の塊を掲げて、鬼が咽むせび泣く。血を吐くような慟哭はやがて、哄笑に。
　きひ、きひひ、きひひひひひひ……。
　鬼の手の中、蠢く肉の塊が弱々しく痙攣する。
「殿……御乱心めされたか！」
「乱心？　戯たわけたことを申すな」
　不思議なことが起こった。肉の塊が急速に灰になって崩れていくのだ。灰の中に残されたのは、ほんの小さな宝石のかけら。鬼はそれを、慈しむように握り締め――
「曙だ。闇夜に迷う大和に夜明けをもたらすのだ。それが我の進む道ぞ。そうでなくては……何のために、我われが愛した者達は死んだのだ！」
　怒声と共に炎が勢いを増した。渦を巻き、転がる骸を呑み込んでいく。
「ああ……だが、しかし。そのためには、また愛する者を失わねばならぬ……嫌だァ！　このような想いはもう二度と！　どうすれば……どうすればいいのだ！　教えておくれ、弟よ……」
　頭を抱え、苦悩する。兜の奥から啜り泣きが聞こえてきた。
　兵達は金縛りにあったかのように身動きが取れない。何が起こっているのかまるで理解できない。我らが将はいったいどうなってしまったのか？
「そうか！　ならば愛する者を殺してしまえばいい！　さすれば我は憎にっくき敵を殺す天命を得ることができる！　おお！　これぞ妙案！　どうして今まで気づかなんだ！」
　歓声をあげたかと思うと頽れ、骨喰藤四郎に縋りつきながら泣く。
「ああ……もっと早く気づいておれば……お前を殺しておけば、お前

を殺さずに済んだのに！　愚かな兄を、どうか許しておくれ……」

　──彼らの将は、狂ってしまった。

　将軍に対する恐怖が、兵達の金縛りを解いた。この地獄から一刻も早く逃げだそうと、背を向けて走り出す。

　だが時すでに遅し──などとは言うまい。

　遅かろうが早かろうが、もはや京に逃げ場はないのだ。

「さあ、曙の光で大和を照らすために！　救世を始めよう、村正！」

《承知》

　噫ああ、憐れなるかな。哀しき狂気が伝播する。

《くるわし》

　京の都は、地獄と化した。

×　　　　　×　　　　　×

　状況は上嶋の理解を超えていた。

　──京が、燃えている。

　あちこちで火の手が上がっている。北朝軍の所業であった。

　将も兵も皆、狂していた。法悦の表情を浮かべながら京の民を、嬲り、殺し、泣き、叫び、喰らい、犯す。尋常ならざる事態であった。

　上嶋は冷静に判断する。吉野に戻りこのことを報告せねば。混乱に乗じて、京から脱出する。だが──

「見つけるのに苦労したぞ。まったく隠密というのは厄介なものよな」
　まずは目の前に立ちふさがる漆黒の武者から逃れねばならない。
「だがさすがにその怪我では、隠遁の業も満足には使えまい」
　絶望的な敵。だが足利将軍は何故か単騎。配下は引き連れていない。不可解ではあるが、好機には違いない。この場は何としても逃げ延びる。
　上嶋が動いた。まずは飛び退き、間合いの外へ。
　漆黒の武者は無造作に野太刀を抜き──
「え？」
　──上嶋の両脚が斬り落とされた。
　着地する足を失い、無様に地面に叩きつけられる。それでもすぐさま何が起こったかを確認する。上嶋が見たものは。
「──かたなではない？」
　漆黒の武者が抜いたのは野太刀ではない。鉄を長く、薄く伸ばした帯状の刃だった。この刃を鞭のように振るうことで、上嶋を斬ったのである。なるほど、この武器の間合いならば、確かに逃げる上嶋にも届くだろう。
　だが奇妙だ。刃は確かに野太刀の鞘に収まっていた。しかし、鞘に較べてこの刃は長すぎた。到底、収まりきるものではない。いったいどうやって──
「おっと。まだ左腕が残っておるではないか」
　再び刃が振るわれ、上嶋の左腕が肩から斬り落とされる。激痛が上嶋を襲う。
「安心せよ。殺しはせぬよ。ちゃんと吉野に帰してやるとも」
　上嶋の劔冑に届く金打声は優しかった。そのことが何より彼を戦慄させた。
　倒れる彼の元に、漆黒の武者が近寄ってくる。
「おぬしには楠木殿への言こと伝づてを頼みたいのだ。南朝の御歴々にも知ってもらわねばならぬ。我の征く道を。大和の曙へと続く道

を」
　いつの間にか漆黒の武者は野太刀を手にしている。先ほどの奇抜な刃はどこにも見あたらなかった。
　刃が振り下ろされる。忍耐不能の激痛が上嶋を襲う。自分が何をされているのか、理解できない。
「きひ！　きひひ！　きひひひひひひひひ！　そうよ。我が道、それすなわち――！」
　狂将の哄笑が、燃える京に響き渡る。

「愛！」

　京の惨劇は南朝方の耳にも届いた。北朝の兵士達が発狂し、住人を虐殺したのである。
　楠木にはわかった。これは村正の仕業であると。
　はたして楠木邸の門前に、鎧櫃が届けられた。
　鎧櫃に収められたものを見て、一同絶句した。狭霧は目を背け、篝は眉をしかめ、傑堂は歯を食いしばり震えた。そして楠木は憎悪に燃える悪鬼の表情で、それを見つめる。
「……上嶋」
　──活け作りであった。
　砕かれた劒冑の甲鉄は皿の代わり。そこに四肢を斬り落とされ、胴体を解剖ひらかれた上嶋が盛りつけられている。内臓は切り分けられ、綺麗に並べられている。心臓が弱々しくも脈打っているのがはっきり見て取れた。信じ難いことに、彼はまだ生きている。
　上嶋は何かを伝えようとしていた。だが声は出ない。陸に揚げられた魚のようにぱくぱくと口を開くだけだ。
　だが傑堂にはわかった。唇の動き、目の動き、瞬きの回数から伝言を読み取る。隠密に伝わる暗号術である。
　その意味するところは──
「許せ、上嶋！」
　傑堂が上嶋の心臓に刃を突き立てた。前触れのない突然の凶行に誰もが目を見張った。
　──だが、遅かった。
　上嶋の切り刻まれた臓腑は奇妙に脈動し、砕かれた劒冑は異様な光を発する。
　光り輝く甲鉄がどろどろに熔けた。だが熱は発していない。熔けた甲鉄は意思を持つように独りでに動き、上嶋の身体を呑み込んでいく。

　臓器が、骨格が、筋肉が熔鉄に覆われ、金属の質感を持つそれへと変貌する。開かれた腹と胸を厚い甲鉄がふさいだ。失われたはずの四肢もまた鋼を素材に組み立てられる。
　上嶋が新たな存在へと鍛造される。
　危険を感じた傑堂が刀を手放し、飛び退いた。そのことは気に留めず、上嶋だったものはゆっくりと起き上がり、胸に刺さったままの刀を引き抜いた。
　その姿は漆黒の劒冑を纏った武者のように見えた。だが上嶋の劒冑ではない。甲鉄の形状、質感、色合い、それして何より禍々しい気配が、この存在の由来を如実に物語る。
「……村正！」
　きひひ。
　上嶋だったものが嗤った。
　大地を蹴って、空へと舞い上がる。合当理を噴かさずとも武者の跳躍力は驚異的である。
「逃がすでない！　あれは〝波〟を放つぞ！」
　一同の中、最も早く反応したのは篝だった。傑堂の叫びが意味することを一瞬で悟り、己の劒冑を喚よぶ。
「囁き──詠唱──祈り──招来！」
　兎の独立形態を持つ劒冑が、邸の塀を跳び越え、仕手の元へと駆けつける。鋼の兎は着地と同時に無数の甲鉄片となって解け、篝を鎧った。
「吉野御流〝昇ショウ竜リュウ〟！」
　飛んだ上嶋──村正もどきを追って翔躍する篝。合当理で逃げられる前に、篝が矢のように襲いかかる。その斬撃を何とか受け止める村正もどき。足場のない空中での鍔迫り合い。
「きひ！」
　村正もどきが蹴りを放つ。即座に篝も蹴り返す。互いを蹴り飛ばし、弾かれ合う。空中で体勢を整え、合当理を噴かし、そのまま双輪懸へと移行する。

上空の双輪の軌跡を見守りながら、楠木は傑堂に問うた。
「御坊。上嶋はどうなったのです？」
「……すまぬ。全ては拙僧の失策だ」
上嶋が伝えた内容で、傑堂は全てを知った。

わな
わたし　ころせ
わたし　なみ　はなつ
みかた　ほろぼす

上嶋は足利将軍に捕まり〝波〟に汚染されたのだ。あの村正に似た姿はその影響に違いない。村正と同質の存在となった上嶋は、吉野山の中心で〝波〟を放つ。巧妙な罠だ。

だが、それだけならばまだいい。それはただ策に敗れたというだけだ。相手の方が一枚上手だったというだけだ。業腹ではあるが、謀はかりごとの常だ。

問題なのは、最後の伝言だった。傑堂は激しく後悔した。策士策に溺れる……などでは決して済まされない。傑堂は己の企みが、大和に地獄をもたらすことを悟った。

あしかが　くるった

×　　　　×　　　　×

京は死で満たされている。
路という路は、罪なき者の屍肉で埋め尽くされた。
御所の門前──室町通に並べられているのは、串刺しの骸。
これらは将兵達の身内である。親兄弟、妻に子、それに友……彼らが愛して止まなかった人々である。
将兵達は嗤い、哭き、酒を飲み、殺戮に酔い痴れる。踊り狂い、血に狂う。
必勝祈願の宴であった。
「皆の者、もっと飲め。歌え。舞え。それは生の歓よろこびである。愛した者達のためにも、我らはこの世を歓びで満たさねばならん。これは天命である！」
狂兵達の哄笑は空に甲高く響き、慟哭は地に深く轟く。
「兄様……どうして、こんな……」
狂宴の中心、赤々と燃える燎かがり火びに照らされて、女が怯えている。将軍の、年が離れた妹であった。
「来たか。お前はまこと美しゅう育ったな。兄として誇らしい」
妹を見る瞳はどこまでも温かく、優しい。そのことがなお恐ろしい。そもそも、その手に抱いているものは──
「兄様……その首は……」
「うむ。弟は、村正をより強き劒冑とするために、身を捧げたのよ」
「ああ……何ということを……」
「こうしてずっと眺めているのだがな。もうあいつがどんな顔をしていたのかも思い出せない。確かにこれは弟のはずなのに……」
彼の手の中で生首がぐにゃりと形を変えた。
「鼻はもっと高かったのではないか？　瞳はもっと大きかったのではないか？　唇はもう少し薄かった気がするぞ。額は広すぎないか？　耳たぶは？　歯並びは？　ううむ、ますますわからなくなっていく。お前はどう思う？」

　生首の顔は福笑いのように歪み、もはや人間のそれではない。生理的な嫌悪感に女は嘔吐した。
「食べ物にでも中あたったのか？　それはよくない。身体をいとえよ、お前にはやってもらわねばならんことがあるのでな」
　危険を感じた。尻餅をつき、それでも兄から逃れようと足掻く。腰が抜けている。だが、立たねば。立って逃げねば。兄はもう正気ではない。
「大和の明日のため、我らはこれより南朝の逆臣どもと戦わねばならぬ。兄の必勝、お前の命で願うてはくれぬか？　愛しいお前を殺せば、憎き敵を一人殺す天命を得られるのだ」
　女は転がるように駆け出した。足利は遠ざかる背中を不思議そうに眺めていたが、やがて得心がいったように微笑んだ。
「そうか！　お前とはこうしてよく鬼遊びをしたものだな。懐かしいのう」
　おもむろに立ち上がり、妹の後を追う。
「それ逃げよ。とく逃げよ」
「ひぃっ！　ひぃぃ……！」
「お前は幼かったからな。足がおぼつかなくて、すぐに追いついてしまった。こんな風に」
　つんのめって転ぶ。右足の脛から下が斬り落とされていた。だが悲鳴をあげる間もなく、兄の影が彼女を覆う。
「ほぅら……つかまえた」

「……痛かろう。辛かろう。わかる。わかるとも。この兄も辛い。涙が止まらない」
　足利は妹に優しく囁きかける。その声は確かに嘆きに満ちていた。嗚咽し、何度も洟はなをすすりながら、妹の頭を撫でてやる。むかし、そうしてやったように。
「この苦しみは愛ゆえだ。我は今、確かに愛の実在を知った。我が愛

を代償に、村正はまた強くなる。この世の全てを救えるほどに」
　妹は何も答えない。然もあらん。舌を切られては言葉を繰れまい。喉を焼かれては声を出せまい。そもそも肺が潰れては呼吸ができまい。それでも何故か生きている。生かされている。なるべく苦痛が長引くように。
　愛する者が苦しむ姿を見て心が痛む。心の痛みに愛を知る。そう、愛を知らねばならない。愛なくしては、敵を斬る資格がない。
　──おお、これぞ善悪相殺の理なり！
「きっと大和の曙は来る。無数の悲痛な願いの果てに、きっと──」
　はらはらと涙を流す。失ったものを心の底から嘆きながら。その顔に浮かぶのは──
　きひひ。
　悪鬼の笑み。

×　　　　×　　　　×

　業物であっても名甲とは呼べまい。歴史に銘を残すことも、おそらくはあるまい。
　小竜景光、郷則重、蛍丸等々──陰義すら操るこれら南朝の名甲に較べれば、やはり見劣りはする。篝の纏う劒冑はそういうものだった。
　だが篝は、己の劒冑を良いものだと思っている。生涯の一領──劒冑鍛冶の作品は生涯一領。武者の駆る劒冑もまた生涯一領のみであるべ

し。武者の美風。戦乱の世にあっては理想論に過ぎないが──に相応しいと思っている。

良い劒冑とは何か？　それは役目を遂げる劒冑である。役目を遂げるためには、己が何ものであるかを知らねばならぬ。

篝の劒冑は己が魂の形を知っている。ならば陰義など無くともこの劒冑は十全。あとは仕手の魂の形が、劒冑のそれに沿うかどうかに過ぎない。

心甲一致という。劒冑と仕手が完全に一体の存在ものとなる。武者が目指すべき境地である。無論、その極峰に至った者はいまだ存在しない。

だが篝は思う。自分とこの劒冑は、なかなかに良い線まで達しているのではないかと。

なまじな名甲風情に後れを取るつもりはない。妖甲もどきならばなおのこと。

「吉野御流〝渡ワタリ〟」

優美で悠長ですらある篝の騎航。だがそれは擬態に過ぎぬ。篝の動きは全て、必勝の流れへと繋ぐための布石。気づいたときには追い詰められている。

だが敵騎は手の内を完全に読んでいた。異形に変貌しようとも、上嶋本来の記憶は失われていないらしい。全ての欺瞞を看破し、無防備となったところに必殺の一撃を──

「──と思ったけどなんか気分が変わったから〝踊オドリ〟！」

……村正もどきは吹き飛んだ。

ちなみに〝踊オドリ〟ですらなく〝巡メグリ〟である。

「──化けて出るなよ、上嶋」

容赦のない追撃。体勢を整える前に斬り捨てる。

これで決着のはずだった。今の一撃は致命傷に至っている。だが──

きひひ。

上嶋の傷がみるみるふさがっていく。その様子に楠木が舌打ちした。

「やはり村正と同じか！」

　心臓を潰されても甦るほどの蘇生力。どうやらこの村正もどきにも備わっているらしい。

　幸い、と言っていいものか、村正本体ほどの回復速度はないようだった。傷はまだふさがりきってはいない。

「ならば、これで！」

　一閃。篝の太刀が村正もどきの首を刎ねる。

きひきひひひひひひひひひひひひひ！

落ちる首が嗤い続ける。これでも駄目なのか。篝は戦慄する。

きひひひ、きひひひ……きひひ……きひ……き……ひ……。

だが声はやがて、か細くなっていく。ついに首無しの劒冑が動きを止めた。

名甲を纏おうと、妖甲に祟られようと、空を飛ぶ武者の最期はおおむね同じだ。

──奇跡つばさを奪われ、地に墜ちる。

×　　　　×　　　　×

「……これは人なのですか。それとも劒冑なのですか？」

墜ちて砕けた村正もどき──上嶋だったものの屍体を検分しながら、越智が気味悪そうに訊ねた。

奇妙な屍体だった。生身の部分は金属の質感を持ち、逆に甲鉄は生物らしい生々しさがある。人と劒冑が融け合い、区別が曖昧になっている。

「わからん」

考える素振りさえ見せず、菊池は即答する。

「首を落とせば殺せる。それさえわかれば充分だ」

阿蘇の返答も明快である。越智は深く溜息をついた。

「足利将軍も同じだと良いのですが」

「生きている以上、死ぬ」
　菊池の言葉に、阿蘇が頷いた。
「不死身だろうが何だろうが、我々にできることはひとつ。斬る……それだけだ」

「足利将軍は善悪相殺の代償として愛する者を殺し、挙げ句狂った。京の惨事はつまりそういうことだろうて」
「室町殿の狂気が、村正の汚染波なみで北朝軍全体に感染した。今の北朝軍は、ただ殺すばかりの獣の群れということになる」
　上嶋の報告と現在の状況を照らし合わせ、傑堂と楠木は真相をほぼ把握した。
　ふたりの表情は悲痛である。恐れていた事態……いや、想像よりもなお酷い。妖甲村正が大和全土を呪い、滅ぼそうとしている。
「上嶋を送ったのは、拙僧の独断。もはや詫びようもないが、せめてもの、この命で償わせてもらう」
「御坊、頭を上げられよ。過ちを責めている場合ではない」
「そうだよ。誰が和尚の汚い首を欲しがるかよ」
　篝が大きく溜息をつく。狭霧も頷き、楠木の言葉を引き継ぐ。
「それよりも今は、北朝への対処を考えねばなりません。錯乱した足利の軍勢が吉野に攻め入るのも時間の問題……」
「だけど村正が〝波〟をばらまく以上、戦えば南朝軍こっちも仲良しこよしで皆殺しだ。対抗するなら……」
「こちらも村正を纏うより他あるまいて」
「傑堂和尚、何を言い出すのですか！」
　傑堂の言葉に、狭霧が反発する。
「敵の〝波〟から身を守るには、こちらも村正を用いて味方全体を〝波〟の支配下に置くしかない」
「それでは被害が広がるだけです！」
　その方法ならば確かに足利将軍が放つ狂気の〝波〟は南朝軍に届か

ない。だがそれは同時に、全軍が村正の呪戒に囚われることを意味する。敵を殺すたびに味方を殺す、善悪相殺の呪戒にだ。楠木が懸念したとおり、戦場は地獄と化す。だが──

「このままじゃ、どのみち全滅だ」

「篝、貴方まで！」

「……斯かる事態を招いた拙僧に言えた義理ではない。だが選ばねばならぬ」

　傑堂は姿勢を正し、楠木に向かって平伏する。真っ直ぐに楠木を見る。

「殿、御決断を」

　楠木もまた正面から傑堂を見つめ返す。相変わらずの凶相であった。

「……村正は俺を仕手とは認めまい。結縁が成るかどうか」

　その顔は、鬼が哭いているようにも見えた。

×　　　　×　　　　×

　村正の〝波〟によって狂兵の群れと化した北朝軍は、だが南朝方の予想に反し極めて緩やかに進軍を開始した。その気になれば一日で駆け抜けられるはずの距離を、数日かけて踏破し、あるいは、思いもかけなかった迂回路を取って進む。

　北朝軍の足取りに、南朝の斥候ものみ達は混乱した……が、すぐに

その理由は明らかになった。
　狂将は各地に散らばる南朝諸将の領地を、手当たり次第に落としにかかったのである。

「きひひひひひ！　堅固で名高い橿かし原はら城じょうも、我がちからの前では鎧袖一触。そうよ、何人たりとも我が道を阻むことはできぬ！」
　戦ではない。ただの惨劇であった。
　開戦と同時、足利将軍は〝精神同調〟の波を無差別に放散した。将軍の狂った精神は、元より狂気の軍団である北朝軍はもちろんのこと、敵方である南朝軍の無防備な精神をも捕らえ、伝播していった。
　両軍共に敵味方の区別無く、ただ殺戮を繰り広げるばかり。
　辛うじて甲鉄に守られている武者達だけが無事だった。彼らは空での戦いを諦め、正気の者たちのみで籠城することを選んだ。
　だがそれも長くは保たない。今まさに大手門が破壊されようとしている。
「殿。橿原城より降伏の使者がやって来ております。姫君御自ら赴かれた様子。自らと引き換えに城の者を助けて欲しいと」
「おお……何と健気な……」
　足利は感動に打ち震えた。姫の献身に対して、深い敬意の念を抱いた。ゆえに命じた。
「では姫を城の前にて裸に剝いて、辱めよ。ならば城の者達も血涙を振り絞って、討って来よう」
「御意」
「そうだ。気高く美しいその心には、愛を以て応えねばならぬ。皆で、姫を愛するのだ。愛がなければ、我らは敵と戦えぬ。姫への愛を胸に我らは進むのだ。曙へと！」
　彼は泣いた。姫への愛に。その愛を失わなければならない悲しみに。滂沱たる涙の中で訴える。

「姫のために戦う橿原城の兵つわもの達を愛せ。その勇気は敬意に値する。愛して、殺すのだ。さすれば我らは再び、敵を斬る天命を得ることができる！　より多くの愛で、より多くの敵を！」
「では早速、愉快な余興を御覧に入れましょうぞ。御期待あれ」
　きひひひひひひひひひひひひひ。
　北朝軍の哄笑が、橿原城に響き渡る。

　将軍の狂気に導かれた北朝方の進軍は、長期に及んだ。その間に落とされた南朝方諸将の領地、実に二十あまり。南朝に属した各将領も負けじと防戦に努めたが、狂将の敵味方を問わぬ〝精神同調〟によって、一方的に飲み込まれていった。
　牛歩であるものの着々と兵を進める北朝軍は、吉野に迫りつつあった。
　だが南朝方もこの間、ただ手をこまぬいていたわけではない。北朝の〝波〟に対抗する術を用意していた。
　そう。その手段を用いることを決意したのだ。

×　　　　×　　　　×

　宝物庫の闇に、光が差し込んだ。
　人の気配を感じて、白銀の大蟻は誰何すいかする。

《──何者か》
　宝物庫に封じられた二世村正の前に立つのは、小柄な人影。
「篝だ」
　答えて、篝はその場に座り込んだ。真っ直ぐに村正を見すえ、にっと笑う。
《楠木様の部下か。何用か？　冑あれを潰すよう命じられたか》
「いや、何。一度話してみたいと思ったのさ」
《……冑あれとか？》
「他に誰がいるっていうんだ」
《……変わった奴よな》
「武人が劒冑に興味を持つのは別段不思議なことではあるまい」
《おのれらは冑あれを妖甲と云う》
「ああ、まさしく村正は妖甲だ」
《その妖甲にわざわざ近寄るのか》
「妖甲だから面白いんじゃないか」
《……まあ、良い》
　村正の、毒気を抜かれたかのような空気が伝わってくる。
《それで……横にいるのは何だ？》
「ああ、こいつか？　篝の劒冑だ」
　篝の横には、鋼の兎が鎮座していた。黙って見つめ合う兎と蟻。珍妙な光景であった。
《良い劒冑だな》
「そう言ってくれるか」
　篝が破顔する。我がことのように嬉しそうだった。
《ああ。その劒冑は己を知っている。だから強い。だが妙だな》
「何がだい？」
《冑あれら村正一門と同じ関鍛冶衆の系統と見るが、造りが常道から外れている》
「村正も相当に外れていると思うけど」
《ならばこう云おう。その劒冑はちぐはぐだ。使われている技術に一

貫性がない。おそらく正規の鍛冶師ではないな》
「御慧眼。この劒冑を打ったのは蝦えみ夷しじゃない。大和やまと人びとだよ」
《ほう？》
　蝦夷は生まれついての鍛冶師である。名甲と呼ばれるもののほとんどは蝦夷の手によるものである。
　大和鍛冶の技術が蝦夷鍛冶に劣るわけではない。だが根本的に種族としての適正が違うのだろうか、大和鍛冶による劒冑は蝦夷鍛冶のそれには及ばないのだ。
　数少ない例外のひとつが天下第一等、相州五郎入道正宗だ。かの劒冑は大和鍛冶によるものである。しかしこれは極めて特殊な事例である。
　篝の劒冑が業物と認められながらも名甲の域にまで至らないのは、大和鍛冶であるためだろう。
「元は篝の一族の者だ。鍛冶師の生まれではない」
《それは大層な変人だな。なれも相当なものではあるが》
　武家に生まれながら、鍛冶の道を選び、我が身を甲鉄とする。確かに常軌を逸しているといえた。
「鍛冶場が好きな奴だった。熔けた鉄が流れる様子や鎚を打つ音。熱気……そういった雰囲気が楽しかったらしい。よく先帝の御番鍛冶に付きまとっていたよ」
《……御番鍛冶？》
「京を奪われて心が決まったらしい。帝の無念を晴らすために劒冑になると。剣才がない自分が、世話になった鍛冶師の恩に報いるにはそれしかないとも言っていた」
　白銀の大蟻は沈黙した。なぜ篝が自らの劒冑を連れてやって来たのか、その理由に気づいたのだ。
「こいつに良くしてくれた御番鍛冶は、伊勢國の出。そう……」
　篝は、白銀の大蟻に向かって、深々と頭を下げた。
「勢州桑名千子村の鍛冶師だ。村正一門には世話になった。礼を言

う」
《そうか……なれらは》
　村正の金打声こえはひどく静かで。如何なる想いが込められているのか、推し量ることはできない。
《冑が夫を、知っているのか》
　二世村正の夫は、先帝に仕えた御番鍛冶の一人だった。だが赤松の裏切りによって京と先帝は北朝の手に落ちた。帝を見捨て逃げることを良しとしなかった彼の運命については、語るまでもない。
「やっぱりか。南朝方こちらの村正が二代目だと御大将から聞いてね。そうじゃないかと思った。いい人だったよ。こいつが敬愛したのもよくわかる」
　鋼の兎は何も語らない。劒冑には生前の人間らしい感情は残されていない。ただ黙って、白銀の大蟻を見つめているだけだ。
《なれらにそう言ってもらえるならば、冑あが夫も浮かばれよう》
「篝は村正を妖甲であると思う。だが同時に篝は村正に敬意を示そう。さて、ここからが本題だ」
　篝は己の劒冑を一瞥し、頷く。再び村正を真っ直ぐに見つめて告げた。
「二世千子右衛門尉村正に希こいねがう。この篝と結縁して戴きたい」
《何ゆえ？》
「室町殿が狂った。村正の〝波〟によって狂気は広がり、北朝軍は手当たり次第に殺す獣けだものの群れと化している」
　村正は沈黙した。狂将の劒冑として災禍を広げる始祖村正に何を思ったか。自身が訴えたとおり、ただ荒ぶるだけのちからと化した父に。
　ややあって、村正の不敵な金打声が篝に届いた。
《なるほど。御父の〝波〟から軍を守るには、冑あれを用いるより他ない。そういうことか》
「うん。それが唯一の方法だ」

《だがわかっているのか、冑あれと結縁することの意味を》
「もちろん。だからこそ御大将に任せるわけにはいかないんだ。あんな化け物みたいな面つらをしているくせに、思いのほか繊細なんだよ。それに、まあ」
　篝は笑う。その表情は一点の曇りもなく晴れ晴れとしていた。
「御大将ともあれば、我ら南朝の顔でもある。吉野の里は人を喰らう悪鬼に取り憑かれていると噂が立てば、北朝に鬼退治という大義を与えてしまう」
《左様か。凶刃ハガネとなる覚悟があるならば、村正は武人を拒まぬ》
「うん。悪鬼は篝だけで充分だ」
　言って、鋼の兎を優しく撫でる。
「生涯一領の誓いを破ってはしまうが。でも仕手を寝取ったのが、かの村正ならばこいつも文句は言えないだろうさ」

×　　　　×　　　　×

　掲げられた錦旗は血と汚物に穢れている。
　同時に掲げられているのは、串刺しにされた娘の骸。迎え撃つ南朝の兵つわもの達は気づいていた。あれは橿原城の姫君ではないか。そして穢れた旗の下に集うのは──
　きひ、きひひ、きひひひひ！

橿原城の兵達であった。足利将軍が放つ〝波〟によって狂わされたのだ。
狂兵を率いるのもまた、橿原の将であった十とお市ちである。橿原城に立て籠もった武者はほとんどが殺されたが、彼だけは生かされた。その理由は明白だった。
きひひひひひひひひひひひひひひひひ！
哄笑と共に十市の身体が鎧冑ごと熔けて、新たな存在として鍛造される。漆黒の甲鉄に鎧われた魔物。上嶋の時と同じ、村正もどきである。
哄笑に載せて、村正もどきが〝波〟を放つ。目には見えない猛毒の狂気が南朝軍を飲み込んでゆく。
……きひ？
狂気に冒されながらも村正もどきは訝しんだ。〝波〟が届かない。たちどころに発狂するはずだった南朝軍は一切の動揺を見せなかった。
一糸乱れぬ南朝軍の先頭に、ひとりの武人が立っている。その横に控えているのは白銀の大蟻だった。
武人は掌てのひらで己の眼を覆い隠した。装ソウ甲コウノノ構カマエである。
その眼の奥に無数の感情━躊躇、怒り、悲嘆、決意━が浮かんで、消える。
そうして、彼は口ずさんだ。恐ろしい詩うたを。

「鬼に逢うては鬼を斬る。
仏に逢うては仏を斬る。
ツルギの理ことわりここに在り！」

その瞬間、十市だったものは白銀ぎんの流星を見た。
それで、終わりだった。
吉野御流に伝わる当身の技であった。敵騎と交差する瞬間、鉤状に

曲げた腕を相手の顔面に引っ掛け、その勢いを以て、敵騎の頸骨を潰す術。

　極まれば最後。決して醒めない夢の底へ、沈みゆく。

　事実、そうなった。十市だったものの首がへし折れた。否、千切れ飛んだ。蘇生の力が働く暇すら与えなかった。

　これほどの破壊力を実現したのは、小竜景光の陰義にさえ匹敵するほどの速力である。

　刮目せよ。この奇跡の存在を。

　月の美貌を。魔の武威を。狂気の光を。全て備えて。白銀の劒冑は此処にいる。

　──二世千子右衛門尉村正。

　この光輝が今、此処に在る。

　そして、音に聞け。月の光輝を纏う仕手の武名を。

「吉野御流堂上礼法──当身の七段目〝夢ユメ枕マクラ〟」

　吉野最強の武者。大楠公の生まれ変わりと称されし、南朝軍の総大将。

　──鬼神、楠木。

　月の魔物と地獄の悪鬼が結縁し、白銀の武者は此処にいる。

×　　　　×　　　　×

「何人たりとも村正に触れてはならぬ。そう命じたはずだ」

　時は少し遡る。二世村正との結縁を成そうとしていた篝の背後に、楠木は立っていた。暗がりに佇むその姿は、本物の鬼と見まがうほどである。
「……驚かすなよ。心臓に悪い」
「どういうつもりだ、篝」
「どうもこうもない。御大将もわかっているはずだ。他に手段はないと」
「お前が気にすることではない」
　咎めるような篝の視線を完全に無視して、楠木は白銀の大蟻と対峙する。
「妖甲村正」
《何用か、悪鬼？》
　次に楠木の取った行動は、村正にとっても意外なものだった。その場にひざまずき、土下座したのだ。南朝の全軍を束ねる主将が、劒冑に対してである。
「この前の無礼を詫びる。すまなかった、二世千子右衛門尉村正よ」
《どういうつもりか、楠木様》
「篝から話は聞いたかと思う。北朝の足利将軍が乱心した。狂気の〝波〟から身を守るには、こちらも村正を装甲せねばならん」
「うん。だから篝が……」
「ならん」
　面は上げずに、楠木は篝を一喝した。
「これは主将である俺が果たさねばならぬ責務だ。一介の武者が出しゃばることではない。身の程をわきまえよ、篝」
「御大将！」
　反論しようとする篝を黙殺する。
《それがなれの答えか》
「そうだ。俺はお前との、帯刀タテワキの儀を望む。だがその前に……重ねて詫びる。すまなかった、村正」
　再び楠木は、額を床につけて、深く平伏した。

「お前達の思想は、俺にとって到底受け入れられるものではない。だがそれでも、己が身を鋼とし、心鉄に刻み込んだその想いを侮辱すべきではなかった。俺が間違っていた」

《……覚悟はあるのか。正邪を諸共に断つ凶刃ハガネとなるその覚悟が》

「お前とは決して相容れぬ。だが結縁する以上、武人おれは武器おまえに敬意を示す。村正、お前は魔物だ。ならば俺は悪鬼と生なろう」

　楠木が面を上げる。凶相であった。まさしく悪鬼の顔であった。

　──蘭陵王はその美貌を鬼面で隠して戦ったという。

「悪鬼は俺だけで充分だ」

　──己が心を、悪鬼の顔で隠して……。

《……良かろう。悪鬼よ。ならば冑あれを──この魔物を手にせよ。冑あれはおのれが半身となり、武を示そうぞ》

　楠木は立ち上がり、鯉口を切った。わずかに刀身を覗かせ、右手親指の腹を斬る。これは太刀を扱うに欠かせぬ指である。

　血が溢れるそれを劔冑へと向ける。劔冑もまた肢あしを差し伸ばして応える。

　血が甲鉄を染める。水晶の鐘を打つような楽がくが、一度。楠木と村正の間を渡った。

　斯くして悪鬼と魔物は結ばれ、一人と一領は一騎の武者と成った。

　篝はその様子をずっと見守っていた。もはや口を挟めることは何もなかった。

　篝は悟った。己はこの物語の顚末を見届けることになるだろうと。

　未来の幸運を祈ることはできまい。ならば、せめてもの救いを。

　踏みにじられてゆく、無数の悲痛な願いの果てに、どうか──。

×　　　　　　×　　　　　　×

　日はすっかり暮れた。橿原城の狂兵達との戦いは、呆気なく決着した。
　元々数が少なかったこともある。何より〝波〟さえ届かなければ、狂うばかりの獣など統率の取れた楠木軍の敵ではなかった。
　しかし戦いを終えた兵達に、勝利を喜ぶ気配は皆無であった。皆が皆、悲愴の表情を浮かべ、不気味に沈黙している。
　装甲を解き、楠木は兵達の前に立つ。そしてただ一言、命じた。
「やれ」
　かけ声と同時に、兵達は互いに殺し合った。慟哭と悲鳴。生き残ったのは半数か、それをやや下回るほど。死んだのは倒した敵の数とおおよそ等しい。
　友を殺した悲しみと罪悪感に、兵達は啜り泣いた。だが楠木は一瞥もくれず、その場を立ち去る。
　楠木もまた一人を殺した。やらねばならぬことがある。

「終わったか」
　待っていたのは傑堂であった。楠木は黙って頷く。
「さすがは村正。天下第一の劒冑よ。これならば室町殿にも後れは取るまいて。ふぅ、やれやれ」
　大きく伸びをする。ばきばきと肩が鳴った。
「あいたた……まったく、歳は取りたくないの。さてと」
　傑堂は、楠木と正面から向かい合った。
「命で償うと言った。さあ、やるがよい」
「……御坊」
　楠木の凶相が醜く歪む。子供が見れば、怯えて泣き出すだろう。敵が見れば、恐怖のあまり戦意を喪失するだろう。

「……悪鬼の顔ではないな」
　だが傑堂は看破する。その顔に浮かんだのは、怯え。
「何を今さら人間のふりをする？　苦にがることはない。笑うがよかろう」
　楠木の心に反して身体は動く。刀を抜き放つ。
《──御堂。誓約を果たすがよい》
　その切先は、ほんのわずかに震えている。
《一つの悪には一つの善を。一つの憎しみには一つの愛を》
　震えが止まる。刃の切先に殺意が宿る。
　殺意──彼自身の意思。
《誓いにかけて。殺してもらう》
　振り下ろす。最後にその顔を見届ける。目は逸らさない。絶対に。
「……全部、お前さんに押し付けてしまったな。すまんのう」
　傑堂はわずかに笑って、目を閉じた。
　その微笑みが、血の雨に濡れる。
　老いてすっかり細くなった身体が頽くずおれ、血の海に沈む。
「　　　　　　　　　　　　　　　　　　　」
　最期に傑堂は、彼の名を呼んだ。
　それは弱々しく零れる吐息に過ぎなかったが、楠木にははっきりとわかった。
　応えて楠木はたった一言、声をかけた。
「父上」
　届いたかどうかはわからない。永遠に。

　全てが終わって、楠木の元にもうひとりの人影が近寄ってきた。背の高い、女の影。
「狭霧か」
「はい」
　その横を楠木は通り過ぎる。すれ違い際に、言った。

「御坊を斬った」
「はい」
「向こうに骸が転がっている。弔ってやれ」
「御館様」
　楠木が足を止めた。お互いに背を向けたまま、狭霧は問うた。
「泣いてらっしゃるのですか？」
「いいや？」
　振り返る楠木の顔は、きっと――。
「狭霧。勘違いは、迷惑だ」
　狭霧は振り返らない。だから彼の顔を見る者は、誰もいない。この世界のどこにも。
「呪いのせいではない。俺の意思で殺した。泣いてなどいない。今の俺は――」
　誰にも確かめようがないのなら、彼の言うとおりに違いないのだ。
「きっと、笑っているのだろうよ」
　笑っているに違いない。たとえその頬が濡れていようとも。それはきっと夜露のせいに違いない。
　楠木は去る。狭霧は最後まで振り返らなかった。
　狭霧は悟った。彼の魂は生涯、救われないだろうことを。
　彼を癒すことはできまい。ならば、せめて代わりに苦しもう。
　踏みにじられてゆく、彼の行き場のない慟哭を、せめて私だけでも――

　このように。
　北朝に一騎。南朝に一騎。村正は顕現した。
　さて、そろそろ地獄を語らねばなるまい。
　狂気の村正が、人を殺す。嘆きの村正が、人を殺す。その結末は明白である。
　断言する。この物語に救いはない。全てを救う英雄はやって来な

い。

×　　　　　　×　　　　　　×

　これは英雄の物語ではない。

　デウス・エクス・マキナはあらわれない。

「総大将のおなりである。方々お控えなされよ」
　吉野の里。南朝の諸将が揃う間に、朗々と響き渡る狭霧の声。
　皆が見守る中に現れたのは悪鬼の形相。村正を従えた楠木である。
　殺気すら放つ凶相に、強者揃いの諸将でさえ震え上がった。あるいはこれから幕を開けるであろう地獄を恐れているのだろうか。
　村正に冒された足利将軍に対抗するため、南朝方こちらもまた村正を纏う。それが何を意味するのか、彼らに理解できないはずがない。
「これより全軍を汚染する」
　地の底から響くような、低く暗い声だった。
「拒絶は許さん。理由を問うことも。貴様らは何も考えなくていい」
　有無を言わせぬ口調で、楠木は続ける。
「貴様らはただの道具だ。道具に罪などない。心を閉ざし、時が過ぎるのを待て。それができぬというのなら……」
　悪鬼の形相がますます歪む。その顔は笑っているのか、それとも。
「三千世界にただひとり、この悪鬼だけを憎め」
　白銀の大蟻が〝波〟を放つ。南朝軍は悲愴の軍勢と化した。

　そして今、楠木の前に麾下の十三騎──二人減って十一騎だが──が並ぶ。
　一同を睥睨し、命じる。
「総員、装甲せよ」
　十三騎が一斉に装ソウ甲コウノノ構カマエをとる。
　闘争の誓いを込めて、各々が装甲の口上を高らかに唄う。

「大海の磯もとどろに寄する波
　われてくだけて裂けて散るかも」

「つくりおける罪を蛍のこの世にて
　尽くす炎を見るぞ悲しき」

「鉄心百錬磨為鋒テッシンヒャクレンマシテホコサキトナル
　欲向中原殪虎狼チュウゲンニムカッテコロウヲタオサントホッス」

　新田が金色に輝く劒冑、海竜王を纏う。
　阿蘇が纏うのは来らい国くに俊としが鍛えし名甲、蛍丸。
　菊池は武者としては珍しく槍を扱う。劒冑もまた千本槍の銘で呼ばれる。
　他の十三騎もまた続々と装甲してゆく。篝の妖幻なる声が響いた。

「囁き──詠唱──祈り──招来！」

　最後に狭霧の美声が祝詞のように響き渡る。

「花の雪の庭につもると跡つけじ
　かどなき宿といいちらさせて」

　鋼の兎が、鋼の馬が解けて、甲鉄が仕手を包み込んでいく。まるでその心までも護ろうとするように。
　装甲する十三騎を見て、楠木は頷いた。自らもまた装ソウ甲コウノノ構カマエをとり、村正を纏う。
　白銀の武者が顕現した。その手には光り輝く球がある。
「〝卵〟……〝波〟の結晶だ」
　琴キン……と、甲高い音が空気を震わせた。〝卵〟は十一に増えて、楠木の周囲を漂った。
「受け取れ。上嶋の如き醜態をさらさずに済む」
　かつての忠臣を侮辱するような発言。だがそれを咎める者はいな

い。
「拝領」
　進み出たのは新田であった。楠木は〝卵〟を金色の劒冑に押しつける。瞬間、〝卵〟は甲鉄の中へと吸い込まれていった。
　新田に表面上の変化は見られない。楠木に一礼し、そのまま後ろに下がる。
　阿蘇と菊池が〝卵〟を受け取る。越智は一瞬躊躇い、だが意を決して前に出る。
　井伊、大塚、児島、忽こつ那な、名和──次々と前に出る。拒む者は一人としていない。
　篝が前に出る。村正を纏う楠木と視線を合わせ、頷いた。〝卵〟が埋め込まれる。
　狭霧が前に出た。楠木の掌から最後の〝卵〟が離れ、郷則重に吸い込まれていく。
　そして、狭霧は知った。
　──これが汚染波なみか。あまりにも凶暴なちから。狭霧の意思を吹き飛ばす、感情の暴風。
　狭霧は自分の心魂が、他者のものに侵されていくのを感じた。
　だからこそ気づく。この暴風の奥にあるもの。暴威の核に。すなわち。
「……これが御館様の心」
　死闘。苦闘。悲嘆。苦痛。想い。願い。祈り。決意──彼の全てがそこにあった。
〝波〟の嵐に隠されたそれを、狭霧は受け入れる。悪も、善も、何もかも。
　そうして彼女は、彼と一体のものになった。これよりは共に戦い、共に傷つく。
　願わくばこの身、彼の敵を滅ぼす刃金ハガネとならんことを。彼の心を護る甲鉄はがねとならんことを。

×　　　　×　　　　×

　斯くして南北両軍が善悪相殺の掟に支配されるという異常な状況下、南北朝の争乱は地獄化していく。
　北朝軍は兵力を分散して、広く展開する。汚染波を無差別に撒き散らす敵を捨て置けず、南朝軍もまた十三騎率いる遊撃隊を派兵、迎撃する。

「皆の者、これより殺戮を始める」

　狭霧もまた幾度となく北朝軍と戦った。幾人もの敵を殺した。それと同じ数の仲間を、あるときは守るべき民を殺した。
　楠木は村正の力を借りて、始祖村正を纏う足利将軍の気配を探る。この地獄は狂気の源を断たねば決して終わらない。楠木は足利の本陣を突き止めた上で、強襲を仕掛ける腹積もりでいた。
　だが狂った足利将軍の動きを読むのは至難であった。単騎で戦場に現れ、軍を壊滅させることも度々である。神出鬼没の魔王に南朝軍は大いに苦しめられた。
　戦の常識は一切通用しない。楠木は決心した。全軍の指揮を新田に任せ、自らもまた単騎で行動する。

「大和を地獄に変えた、生きる災厄！　黒夜の魔王！　悪鬼！」

「悪鬼……悪鬼……悪鬼！　きひ、きひひ、きひひひ！　如何にも、如何にも！　きひひひひひひひひひ……！」

　ついに当たりを引いた。始祖村正の香気けはいを追って、楠木は駆けつける。そして物語は最初の場面に戻る。

「「──村正！」」

　南朝主将楠木と北朝主将足利、二度目の決闘である。

「村正」
《何だ？》
　足利の野太刀を躱しながら、楠木は二世村正に問う。
「何度も訊くようだが、刀は……」
《無い》
「……やはりか」
　二世村正には武器がない。まったくの徒手空拳である。無論、吉野御流には無手の技も伝わってはいる。だがそれは不利を覆すものではない。
《御堂。冑あれを装甲するならば、武者の常識を捨てよ》
　確かに武者の常識では計れない劒冑である。通常、武者は合当理と母衣を使い、風を操って飛翔する。だが二世村正がその儚げな翼に託すものは、風ではない。
《双輪懸の術理は無意味。ただ君臨すればよい。空を制する覇者として》
「うむ、ならば村正よ。一指し舞ってはくれないか」
《承知》

「きひひひひひひひひひ！」
　足利の哄笑が空を震わせた。構えは武者上段。高度は優勢。敵騎の下に抜けて、振り下ろす理想的な一撃。だというのに。
「ぐお！」
《胸部甲鉄に被撃。損害は軽微》
　足利は打ち負けた。高度に劣る楠木の、しかも素手による攻撃に、だ。
「ぬぅ、今のはいったい？」
《御堂、呆けている場合ではない！》
「なに──」
　間髪を入れず、背面に重い一撃。激痛に悶える暇もなく、今度は右。次は左。再び背面。下方からの突き上げ。直上からの打ち下ろし。正面激突ツキウシ──上前下後左右左右五連撃七連撃さらに三段突き！
《背面甲鉄損傷！　右肩甲鉄小破！　右前腕部に損傷！　左上腕部に重度の損傷！　胸部甲鉄中破、内部骨格に被害あり！》
　──何だというのだ。何だ、これは？　我は、攻撃されている……のか？
　滅多打ちであった。だが足利には理解できない。己が今、どのように敵騎からの攻撃を受けているのかを。
　然もあらん。武者が次の攻撃に移るためには、背後に抜けた敵騎を追って旋回しなければならない。互いにその騎航を行うからこそ、武者同士の戦いは双輪を描くのだ。このように立て続けに攻撃を加えることなど不可能。
　ならば敵騎は、双輪懸の理の外に存在することになる。
《見事なり、二世右衛門尉村正。我が娘ながら恐ろしき劒冑よ！》
「村正！　何なのだ、あの劒冑は！　あやつは何をしておる！」
《陰義でございます。我が娘、二世村正は──》

《冑あれは、辰気を操る》
「しんき？」
　二世村正が語るのは、楠木の知らぬ言葉であった。
《天地万物に吸引の力有り。この作用を引イン辰シン、力を辰シン気キと称す》
「すまん。もう少しわかりやすく」
《万物には、他の物体を引き寄せるちからが備わっている。物が落ちるのは大地の辰気が引き寄せているからだ》
　意味はわかったが、理屈はわからない。だが楠木にとって重要なのはそこではない。
「物が落ちるのは辰気のちからであると、そう言うのか。つまりお前にとって高度の優劣は関係ない！」
　双輪懸において、高度優勢にこだわるのは、落下の勢いを突進力に変えるためだ。それは、村正の言葉を借りるならば、大地の辰気を利用することを意味する。
　そして、二世村正は辰気を操るのだ。
「いや、それどころではない。落ちるちからを操るというのなら、それは自在に空を動けるということ！」
　武者にとっては、世界が覆るほどに衝撃的な事実だった。
　双輪懸において、勝敗を左右する四つの要因がある。上昇性能、最大速力、加速性能、旋回性能だ。
　高度優勢の確保には上昇性能が必要になる。激突後は迅速に反転しなければならないため、旋回性能が鍵となる。
　最大速力に優れる騎体は敵より強力な一撃を敵よりも先に放つことができる。激突によって失われた速力の回復は、加速性能にかかっている。
　万能の劒冑は存在しない。母衣──翼を大きくすれば旋回性は増すが、加速性が失われる。母衣を厚く強固にすれば速力は高まるが、上昇性能を犠牲にする。これらの矛盾に挟まれながら、鍛冶師は何を求め、何を捨てるかを見極めなければならない。

だが二世村正には、その理が通用しない。高度にも大気かぜにも縛られず、誰よりも速く飛翔し、誰よりも先じて旋回し、襲いかかる。

それが何を意味するかは、この一方的な戦いを見れば、一目瞭然である。

《何なん人ぴとも冑あれらに触れることさえ叶わぬ。ならば重くて鈍のろいだけの刀など不要。辰気を重ねた拳を最高速で叩き込めば事足りる》

間合いの不利も、速攻で懐に入り込めば関係ない。拳に辰気を集中すれば、甲鉄を貫く威力を得ることができる。ゆえに振り回す手間の分遅くなり、しかも攻撃の軌道が限られてしまう太刀は、文字どおり無用の長物──二世村正はそういう設計思想に基づく劒冑であるようだ。

「なんて極端な！」

彼の愛騎である小竜景光も相当に極端だが、二世村正はより酷い。これほどに常軌を逸した設計思想についてこれる仕手が、はたして何人いることか。

楠木ですら辛うじて制御するのが精一杯だった。何しろ骨の髄にまで刻み込まれた武者の常識が、ことごとく覆されていくのだ。目まぐるしく変わる騎体状況に翻弄されるばかりである。

「お前はやはり物狂いよ、村正！」

応えて、不敵に笑う二世村正。

《正気のままでは武の大業は成せんのだ、御堂！》

そのとおりかも知れないと、楠木は思う。狂った敵と戦うため、全軍に呪いを強いる己もまた、まぎれもなく物狂いであろうと。

そしてさらに思う。ならば大業を成さんという志が、足利将軍を狂気に追いやったのか。

狂気の淵で彼は何を想ったのか、それを知る術はもうない。知ったところで意味もない。

死闘。苦闘。悲嘆。苦痛。想い。願い。祈り。決意──全て否定する。

俺は悪鬼なのだ。悪鬼はただ踏みにじり、貪り尽くすのみ。
—殺す。
善悪相殺の呪いも一切省みない。そんなものはただの不純物だ。愛にも似た殺意で、敵だけを想う。愛さねば、殺せない。
そうだ。ただ相手のことのみを想うという一点で、愛と殺意は等価のものだ。
憎む—敵を—殺す—敵を—愛して—殺す—愛—憎——殺—
楠木の思考が純化し、加速する。自身の思考を劒冑の性質に最適化していく。
四肢は空に投げ出すように力を抜く。武器を用いず打撃力は辰気のちからに委ねるため、腕力は必要ない。全てを流れに任せるように、拳を放つ。
「吉野御流〝酸漿カガチ〟！」
始祖村正の甲鉄が爆ぜた。足利の右肩と左脇腹が弾け飛んだ。足利の絶叫が響き渡る。
《お見事》
「だが……！」
ごっそりとえぐれた傷口に蠢く肉の塊が湧いた。みるみる膨れ上がり、傷口をふさいでいく。砕けた甲鉄もまた、赤く輝き急速に再生していく。
「きりがないな！　あれも始祖村正のちからなのか」
《左様。あれが御父おとの陰義だ》
始祖村正のちからの正体は、二世村正から既に知らされている。だがそれは、とてもではないが信じ難いことだ。二世村正が言うことが本当ならば、足利将軍はもはや人ではない。鬼ですらない。彼は—
「おのれ、楠木ィ！　小癪な真似を！」
足利の怒声が〝気〟の爆発を伴って轟いた。強大なちからが足利を中心に渦巻いている。
《御堂！》
二世村正の警告より早く、楠木は悪寒を感じていた。即座にその場

から退避する。
　間一髪、灼熱の業火が目の前を薙いでいった。熱せられた大気がチリチリと白銀の甲鉄を灼く。
　悪寒は止まらない。通常の武者ではありえない軌跡を描き、楠木は次に襲い来るであろう危機から逃れる。
　またも間一髪、今度は白銀の甲鉄に霜が降りた。超低温の冷気がかすめていったのである。直撃を喰らえば瞬時に氷結し、砕け散っていただろう。
　最初は業火。次は冷気。これらは無論、始祖村正の陰義によるものである。その正体はいったい何か。──熱操作？　否、そうではない。
「逃すかァ！」
　正面から足利が突撃してくる。構えは体たい側そくに、体と平行に太刀を構える八相。ならば意図するのは刺突か。一点に集約された武者の剛力は甲鉄を容易く貫通する。
　しかし、高速で飛来する武者を刺し貫くのは至難の業。ましてや超常の機動をこなす二世村正相手ならばなおのこと。
「相国寺流甲冑礼法〝蛇蠍ダカツ〟が村正崩し──〝姦ミダラ〟！」
　異なことに、足利は間合いのはるか遠くから刺突を繰り出した。躱すまでもない距離である。やはり狂気に冒された足利は、正常な判断力を失っているのか。然さに非あらず。
　突き出された野太刀の剣先が──伸びる。数倍の長さ──五間けんほどにも及ぼうか──になった野太刀が真っ直ぐに楠木の心臓を狙った。
　怪異なる技、だがそれすら楠木は読んでいた。最小の動きで迫る切先を躱す。
《御堂、後ろだ！》
　振り返りもせず、騎体を横転させる──楠木は覚えていた。足利がまだ正気だった頃の、最初の決闘。仕留めたと思った、その心の隙を突かれたあの一撃。小竜景光の母衣はねを斬り落とした、うねる剣閃。
　瞬時に野太刀の性質が変化した。刃が薄く、帯状に──ぐにゃりと曲がり、背後から楠木を襲う。

　今回は一躱した！
「足利ァ！」
　これ以上の追撃は許さない。正面からの突撃を仕掛ける。辰気を重ねた手刀を最高速度で抜き放つ。完璧な狙い。このまま足利の首を刎ねるはずだった。だが。
「きひひひひひ！」
　甲高い金属音が響き渡る。硬い手応え。足利は健在。厚い甲鉄に弾かれたのだ。
　しかしあり得ない。何故なら楠木は、甲鉄の隙間、関節部を狙って打ったからだ。
　またしても最初の決闘を思い出す。上段からの振り下ろしを完全に耐えきる、異様に堅牢な甲鉄。
　純粋な甲鉄の強度とは考えにくかった。今ので確信に変わった。これも陰義！
　野太刀を自在に変形させる能わざ。武者の一撃を無傷でしのぐほどに甲鉄を強化する能。鎧っていない関節部の防御。不死身に近い再生能力。業火と冷気の使用。そして〝精神同調〟一これら全てを可能にする、始祖村正の陰義。その正体は。
《冑あが御父は一》
　暗雲が垂れ込めて、稲光が瞬く。だがそれは足利と楠木の周囲だけ。足利の哄笑と共に、稲妻が楠木を襲う。

《一始祖村正は創気を操る》

×　　　　　×　　　　　×

　村正一門が操るちからの由来。
　そのことを語るには、浦うら夢むという怪僧について触れる必要がある。
　浦夢は鞍馬山の学僧であり、陰の相談役として長らく南朝に仕えていた。
　傑堂が重宝したこともあり、楠木も彼のことをよく知っていた。妖しげな呪まじない師というのが正直な感想だ。恐らくは大和の人間ですらない。
　他の者も同様の考えだったのだろう。浦夢の朝廷内での立場は良くなかった。それをいつも庇っていたのが飽間だ。
　やがて飽間は浦夢を吉野山から連れ出した。向かったのは勢州桑名。そう、浦夢を村正に会わせるためである。
　当時、村正は至高の劒冑を求め、試行錯誤していた。浦夢の知識がその助けになると飽間は考えたのだ。
「村正どの。あなたが至高の劒冑を求めるなら、三つの源気チカラについて知らなくてはなりません」
　浦夢が教えたのは宇宙の根源的なちから。磁気。辰気。創気。
　磁気は磁石が引き合い、反発し合うちからである。辰気は二世村正の言ったとおり、万物が引き合うちからである。そして創気は──
「基素を結び合わせ、物体を造り上げているちからのことです」
「基素？」
　始祖村正の疑問に、浦夢は答える。
「物体をひたすら細かく細かく砕いていった時、最後に残るもの──もうこれ以上は砕けないものを基素と呼びます。万物の素材です。これを多種多様に組み合わせて、草花や、鉱物や、昆虫や、私たちを生み出すちからが創気です」
「それは……神仏の御み業わざのことか？」

「そう言っても構いません」

　稲妻は楠木には届かなかった。二世村正が生み出した辰気の壁が稲妻をねじ曲げたのだ。
「これも始祖村正のちから」
《そうだ。御父の陰義は万物を操る》
　大気を構成する基素に干渉すれば、気象を操ることも、温度を急激に変化させることもできる。
　自身の甲鉄を操ることはなお容易い。甲鉄を一点に集中すれば、武者の剛力を以てしても突破は難しい。得物の長さや性質を変えれば、対敵の裏を掻くことができよう。
　驚異的な蘇生力については、もはや説明するまでもない。
　今まで見せた現象の全てが、それぞれ単体でも陰義として成立するほどのちから。それを自在に操る始祖村正は、劒冑の枠に収まらない規格外の存在である。
「つまり今の室町殿は、神にも等しいというわけか」
　狂った神だ。最悪である。
「……なるほど。なるほどのう。そうか。そうよな。この程度では殺せんよな。うむ、今回は我の負けよ」
　先ほどの興奮状態からは一転して、落ち着いた、低く静かな声で足利は語りかける。
「諦めてくれるか。ならば死ね、魔王。それで全てが終わる」
「つれないのう、楠木よ。愛が足りんではないか」
　きひひ、と心底嬉しそうに嗤う。
「もっとだ。もっともっと村正を強くせねば、おぬしを斬る天命を得ることができぬ。また逢おう、愛しき宿敵てきよ。今度はより相応しい空で。より相応しい村正を纏って」
「逃がすと思うか？」
「きひひひひひひひ！」

騎体を翻し、始祖村正が撤退する。無論、逃す気はない。神の如きちからを揮う始祖村正ではあるが、騎体そのものの性能は劒冑の範疇を超えるものではない。
極上の業物には違いない。関鍛冶衆の流れを汲むため、特に旋回性は目を瞠みはるものがある。だがそれは同時に、速力が犠牲になっていることも意味するのだ。小竜景光との戦いがそのことを証明している。
ましてや辰気を操る二世村正の速力あしから逃れるのは不可能──
「相国寺流〝蠅聲サバエ〟が崩し──〝貪ムサボリ〟！」
足利が脇差を抜刀、投擲する。だが狙うのは楠木ではない。脇差は地上、騎航も不可能なほどに傷ついた狭霧に向かって飛来する。
脇差を薙刀で切り払おうとする狭霧。だが脇差は無数の小さな鏃やじりと化し、降り注ぐ。
《辰シン気キ収シュウ斂レン》
二世村正が辰気を操り、鏃の軌道を歪めた。狭霧は無事。だがこの間にも漆黒の騎影は遠のいていく。
「きひひ！　そうだ。それで良い。しっかりと守れよ、楠木。大切な、大切な仲間ではないか。ちゃんと残しておかないとなあ？」
「この程度で時間稼ぎになると思ったか！」
辰気による加速を駆使し、逃げる始祖村正を追う。瞬く間にその背中を間合いに捉える。
「尻追い戦は武者の恥ぞ！」
狙うは武者の生命線である合当理。如何なる異能を持つ劒冑も、これを破壊すれば墜ちるしかない。創気による修復が始まる前に、首を落とす──！
「吉野御流〝剔テッ抉ケツ〟！」
神速の貫手が──空を切った。
楠木の目を以てすら追えぬ速度。始祖村正の騎体ははるか遠くへ。これほどの速力あしを始祖村正は隠していたのか。だが合当理に加速の気配は見られなかった。

「村正、今のは？」
《ちからの流れを感じる。創気を操ったのだろう。だが……わからぬ。御父が何をしたのかまでは》
　辰気で翔ける二世村正でさえ追いつけぬ異常な速度。どうやら始祖村正には、娘でさえ知らぬ秘奥があるようだ。
「始まるのだ。冷たい無明の夜は終わり、黄金こがねの曙がやって来る。さあ、歓喜の時だ」
　きひひひひひ。哄笑を残して、漆黒の魔王は去った。

　地上に降りた楠木の元に、狭霧が身体を引きずるようにやって来た。
「御館様、御無事ですか！」
「お前は些ちっとも御無事ではなさそうだな」
「いえ、大事はありません」
「呪いの帳尻は？」
　楠木の言葉に、狭霧はわずかに震えた。
　ややあって短く「既に済ませております」とだけ答えた。
「そうか」
　楠木はそれ以上追求しなかった。周囲を見回す。あるのはただ骸の山ばかり。敵兵に友軍、そして村人達。ふたりを残して皆、死に絶えてしまった。
「……申し訳ありません。兵をみすみす死なせたのは私の責任です」
「構わん。敵の村正と遭遇したのだ。お前が生きていただけでも儲けものだ」
　この光景はいまや大和の至るところで繰り広げられている日常だ。足利将軍を討つのが先か、大和が滅びるのが先か。それまで地獄は終わらない。
　だが楠木は確信する。敵将は必ずこちらを討つために、大合戦を仕掛けてくるであろうと。南朝北朝、共に全軍を投入しての大合戦。

　全ての武人が殺し合う。己が敵を鏖みなごろしにするために。

×　　　　×　　　　×

　東ひむかしの野に炎かぎろひの立つ見えて
　かへり見すれば月傾かたぶきぬ

　阿あ騎き野のは古来、朝廷の狩場が置かれていた地である。有名な歌にもあるとおり、その風景は雄大で美しい。だがその絶景も血で穢されようとしている。
　阿騎野の原に迫る血に濡れた錦織。串刺しの屍体や切り刻まれた屍体。団子刺しにされた生首等々。思い思いに掲げて、狂獣と化した北朝の大軍勢が行進する。
　その様は鎌倉時代中期、大和を襲った蒙古軍を彷彿とさせる。まさしく悪鬼の所業。だが蒙古は人であった。彼らもまた人であった。悪鬼はいつも、人より生ずる。
　阿騎野は吉野山とは目と鼻の先である。北朝軍がついに南朝帝の御膝元に迫っていた。
　追い詰められた南朝方は、もうこれ以上は退けない。狂した北朝方はそもそも退くことを知らない。
　ならば、ここが決戦の地である。

×　　　　×　　　　×

　──決戦前夜。

　夜空を見上げる楠木の元に、狭霧がやって来た。

「御館様、北朝の軍勢が阿騎野の原に向かっておるとの知らせが」

「来たか」

　彼女の方は振り向かずに夜空を眺め続ける。しかし月を楽しんでいるわけではない。

「荒れるな」

　雲の動き、風の匂いから楠木は察する。明日は恐らく嵐になる。天候が荒れれば、劒冑の探査かんかくが著しく制限される。武者にとっては辛い戦いになりそうだ。

　だが狂った北朝の武者達は意に介さないだろう。こちらも覚悟を決めなければならない。

「狭霧。飛べるか？」

「万全ではありませんが、戦えます」

　そうは言うものの、狭霧の劒冑は先の戦いで破壊寸前までに深く傷ついた。これより始まる大合戦にはたして耐えきることができるだろうか。しかし狭霧の心に迷いはない。

「新田殿より秘策を授かっております。足手まといにはなりません」

「そうか」

　それきりで楠木は黙る。狭霧は少し逡巡し、だが意を決して語りか

ける。
「時代の闇に迷う私を導いてくださったのは御館様です。この狭霧、今こそ御館様の御恩に報い、正しき道に身を投げ打つ所存にございます」
　相変わらず楠木は振り返らない。背を向けたまま、ただ一言告げた。
「この先に正しき道など、ない」

×　　　　×　　　　×

　──決戦前夜。
　足利将軍は夢を見ている。狂気に身を委ねてより、夜毎見続ける悪夢。
　光のない闇の中。だというのに気配は感じる。それはおびただしい数の怨念。
　彼が殺してきた人々であった。見知った顔も見知らぬ顔も。敵も味方も、愛した者も憎んだ者も。
　皆が皆、彼を責め立てた。引きずり倒し、嬲り物にした。
　彼にはどうすることもできない。抗おうにも力が出せず、護ってくれるはずの劒冑もない。今の彼は〝武〟を喪失している。ただの無力な個人として蹂躙されるのみ。彼が今までそうしてきたように。
　何も狂ってからの話ではない。彼は常に踏みにじってきた。なぜな

らば彼は武人なのだから。より弱い者から奪い続けてきた──財産。権利。尊厳。そして生命。
　やがて彼は刃を突き立てられる。苦痛の中で彼は絶命する。虫けらのように力尽き、果てる。だが目覚めは、はるか遠い。
　気づけばまた闇の中。そして何事もなかったように同じ夢を繰り返す。幾度でも幾度でも。甦っては殺される無間地獄。今宵はいくつの死を迎えるのか。
「殿」
「お前か、御高」
　──高嶺御前。たとえ闇の中でも彼女の気配を間違えるはずがない。それほどに深く愛していたのだから。
「ようも毎晩入れ替わり立ち替わり現れよる。先ほどは弟が来てな、私の心臓をえぐり取っていった」
　胸に触れれば、ぽっかりと穴が空いている。まあ、心臓を潰されるのはこれが初めてではない。それよりもむしろ吹き抜ける風の冷たさが堪こたえる。ここは酷く、寒い。
「お前はどこを切り刻もうというのだ。腹か、それとも首か」
「殿……いえ」
　彼女は愛し合っていた頃のように、彼を抱き締めた。冷え切った彼の身体が温もりに包まれる。夜毎抱き合った肌の温もり。柔らかさ。
「愛しき人」
「なんと。一族を根絶やしにして、お前を斬り殺した私を、愛しいと申してくれるのか」
「戦は苦手ですけれどお優しゅうて、舞がお上手な、わたくしの愛した御方」
「お前は私が憎くて殺そうとしたのではないのか？」
「憎にっくき人」
　がらんどうであるはず彼の胸が、彼女の流した涙で濡れる。
「憎うございました。お怨みいたしました。物狂いになってしまうほど」

「物狂い。私と同じだな」
「ですが、わたくしは貴方様が憎いと同じほど恋しゅうございました。二度とお目にかかれない、二度と貴方様の元へ戻れないと思えば、胸が焦げるほどに恋しゅうて恋しゅうて、やがて憎うて」
　その想いが自分への殺意と変わったのか、と彼は知った。ただ相手のことのみを想うという一点で、愛と殺意は等価なのかもしれない。
「このような最期を迎えてみれば、愛しきと憎きは分かち難く裏表なのだと悟ります。人の心とは、まこと因果なもの」
　愛と憎しみは裏表。それではまるで──村正の呪いではないか。
「わたくしは今、幸せでございます」
「幸せだと？」
「肉体を失って残ったのは、ただ貴方様への想いばかり。このような自由、肉体の枷の中で得られはしません」
「そうか。今のお前は、そんなにも自由なのか」
「はい。それはそれは、軽やかな心持ちにございます」
「羨ましいな。それは」
　彼は悟っている。もう二度とこの闇からは逃れられないことを。曙の光が彼を照らすことは永遠にあるまい。
　牢獄……牢獄だ。手足を縛る、枷は無い。世界を隔てる鉄格子も、無い。
　それでも、ここは牢獄だ。この私を封ずる檻だ。
　私はずっとここにいて、同じ夢を見続ける。
「だから、愛しき人。憎き人」
　首筋に、温もりめく冷気。彼女の刃が、彼の喉を引き裂いた。
「……今度こそ、添い遂げましょう」
　夢が終わる。闇へ戻る。また、すぐに始まるだろう。ここでの時間はその繰り返しだ。
　またひとつの死を迎える。また新たな夢が始まる。逃れられない狂気の夢が。
　正気を失った彼にとって、この夢は現うつつか幻か──

×　　　　×　　　　×

　楠木の予想どおり、その日、決戦の地は篠つく雨が降り込めていた。
　それぞれ悲愴の覚悟を胸に、迎える南朝軍、その数一万三千。
　軍を率いる総大将は、鬼神楠木。その傍らに寄り添うのは白銀の大蟻。
　雨の中、憎悪に燃える眼で彼方を睨むその姿はまさしく、悪鬼。
　悪鬼は掌てのひらを持ち上げ、己の眼を覆い隠す。装ソウ甲コウノノ構カマエ。

　それぞれ狂気の笑みを浮かべ、挑む北朝軍、その数三万。
　軍を率いる総大将は、魔王足利。その傍らに寄り添うのは漆黒の大甲虫。
　雨の中、裂けるような笑みを浮かべるその姿はまさしく、悪鬼。
　悪鬼は掌てのひらを持ち上げ、己の口を覆い隠す。装ソウ甲コウノノ構カマエ。

「──鬼に逢うては鬼を斬る」

　闘争の決意を込めて、悪鬼が歌う。

「──仏に逢うては仏を斬る」
　殺戮の歓喜を込めて、悪鬼が歌う。

「「ツルギの理……ここに在り！」」
　怨敵必殺の誓いを込めて、悪鬼と悪鬼が歌う。
　ふたりの村正が、互いを宿敵として並び立つ。
　ふたりは相あい食はむ剣。互いを倒すために打ち上げられた親子刀。
　鈍にび色いろの空に稲妻が走ったのを機に、決戦の火蓋が切って落とされた。

　月ヶ瀬の渓谷から下る北朝軍を、南朝軍が迎え撃つ。風光明媚な阿騎野の原は、一瞬にして血しぶき舞う修羅場と化した。
　善悪相殺の掟に怯まず、果敢に戦う南朝の勇兵達。
　善悪相殺の掟に呪われ、殺戮に酔う北朝の狂兵達。
　剣戟が鳴り響くたびに首が転がり、手足が飛ぶ。南朝軍の猛者達が獅子奮迅の働きをしようとも、足利将軍の狂気によってまとめられた北朝軍の勢いを止められない。
「殺せ。殺さねばならん。我らが愛した者どもの命に報いるため。愛がもたらした天命を今こそ全うせよ！」
　感極まった足利将軍の慟哭が、呪詛のように戦場を呑み込んでゆく。
　彼と精神を共にしている北朝の兵士達もまた一斉に泣き叫ぶ。裂けるような笑みを浮かべたままで、殺戮の手を止めることなく。
　周囲の地獄には構わず、楠木はただ足利将軍ひとりの首を求めて翔

ける。
　劒冑の探かん査かくが利かない嵐の中でも、足利が放つ強烈な〝波〟は隠しようがない。圧倒的な存在感を誇示して、戦場に君臨する。
「来るかァ、楠木ィ！」
　足利もまた迫る宿敵の気配を察する。楠木が放つ鮮烈な殺意を見落としようもない。恐怖の化身となって、嵐の空を引き裂き、迫る。

「ならば、目に物見せてやろう。やれ、村正！」
《輪廻転生いのち・めぐる》
　足利は並んで飛ぶ武者の頭を鷲掴みにして──そのまま力尽くで引き千切った。
　ふんぬ、と。大きく振りかぶり、手に持った首を投げつける。首は中空で爆ぜ、砕けた兜の甲鉄が散弾となって楠木を襲う。
「効かぬわ！」
《辰気収斂》
　辰気の壁が爆風を退ける。万物を操るというその陰義を恐れたりはしない。たとえ神の如きちからといえども、当たらなければただの大道芸に過ぎない。
　足利の怒りに満ちた金打声が、楠木に叩きつけられる。
「避けるでない！　その首は我が忠実なる側近！　おぬしが墜ちねば、善悪相殺の釣り合いが取れぬではないか！」
　足利は野太刀を抜き、近きん習じゅの武者達の首を刎ねた。十を超える首を童が手鞠で遊ぶが如く扱う。
「相国寺流〝蠅聲サバエ〟が崩し──〝髑髏ドクロ〟！」
　否、こんなものが技であるはずもない。理り合あいも道理みちもない、ただ荒れ狂うばかりの狂気。しかし、確かにちからである。
　連射される首大砲が、楠木のみならず空の武者、地上の兵士両方を襲う。戦場のそこかしこで爆音が鳴り響いた。引き裂かれるのは何も南朝軍だけではない。北朝軍も多数巻き込まれていた。
「さあ、歓喜を歌え！　生命賛歌である！」
　無論、狂将は一切気にとめない。哄笑を以て、迫る楠木を迎え入れる。
「吉野御流堂上礼法、楠木！　鎧うは二世右衛門尉村正！　いざ参る！」
　楠木は、もはや人ではないものに名乗りを上げる。それは狂将に対する最後の敬意か。
　楠木の騎航は愚直なまでの正面突撃。二世村正の神速の前には、あ

らゆる術と策は無意味と化す。速力という名の暴力にまるごと粉砕されるまで。
「きひひひひ！　来い、白銀ぎんの村正！」
　だが狂将には端から術も策もない。野太刀を武者上段に構え、圧倒的速度で襲いくる敵騎を真正面から迎え撃つ。
　鬼将の咆吼と狂将の咆吼が重なり、迅き拳と猛き剣が激突――
　――しなかった。
「何？」
　漆黒の魔王の振り下ろした野太刀が空を切った。二世村正の姿が忽然として消えたのである……否。
「今のは！」
　打つと見せて躱す吉野御流〝虎コ眼ガン〟――この期に及んでこの術技！　剣術とはどこまでも化かし合い！
　そして躱した二世村正の代わりに飛来するのは一本の矢――心鉄の軸を狙って放たれた武者弓箭の一撃！
《飽間様ァァァァァ――！》
　始祖村正の金打声さけびが、荒れ狂う空に響き渡った。
　嵐が災いしたのだ。豪雨により探査かんかくを狂わされていた始祖村正は、楠木の背後に控える飽間の気配に気づかなかったのだ。
「……すまんな、村正。わしはぬしを欺あざむくばかりであった」
　飽間の矢が甲鉄を貫き――始祖村正の全身がひび割れる。心鉄を傷つけられ、劒冑の機能はたらきが崩壊しようとしているのだ。
　だが楠木は油断しない。敵騎は万物を操る魔王。死の淵からでも甦る怪物だ。殺しきるまでは終わらない。
「征ゆけ、我が手足たる十三騎！　かの魔王を討ち滅ぼすのだ！」
　呼びかけに応え、足利の直上より篝が太刀を振り下ろした。
「吉野御流合戦礼法〝雪颪ナダレ〟！」
　強力な打ち下ろしである〝雪颪〟ならば、ひび割れた甲鉄を断つのは容易い。肩口を深く斬られ、鮮血が噴き出す。
「御命頂戴！」

続けて迫る三日月の剣閃。狭霧が振るう薙刀である。深く傷ついた郷則重といえども、今の始祖村正にならば後れを取ることはない。

首を狙った斬撃は寸前で躱される。だがそこに石突による強烈な打撃。始祖村正の顔面甲鉄が砕かれ、足利の狂気に濁った左眼が剝き出しにされる。

追撃を恐れて、足利は退く。そこに楠木麾下の十三騎が次々と襲いかかった。

──端から一騎打ちを挑む気などなかった。己を囮にして、十三騎と、村正をよく知る飽間による不意打ちを仕掛ける。この荒れた天候だからこそ可能な策だ。

名乗りを上げたことさえも罠であった。武者にあるまじき卑劣な戦法。しかし今の楠木には関係ない。俺はただの悪鬼。善に非ず、義に従わず、正道を征かず。我は一振の凶刃ハガネ、邪しき妖しき村正也なり！

「おのれ、おのれ、おのれぇ！　村正、しっかりせい！」

十三騎の猛攻から逃げ惑いながらも、始祖村正は創気による蘇生を試みる。足利の傷が、ひび割れた甲鉄が少しずつ再生していく。だが遅い。本来の機能を発揮できないのは明白だった。

「やらせんぞ、妖甲！」

阿蘇が蛍丸の陰義を発動させる。その気配に気づいた十三騎は巻き込まれないよう、始祖村正と距離を置いた。

「此し岸がんの水は苦く、彼ひ岸がんの水は甘し──来たれ、蛍火」

蛍丸から無数の淡い光が放たれ、始祖村正に向かっていった。触れると光は儚く弾けて、消え──始祖村正の甲鉄が瞬時に錆びて、崩れる。

蛍丸国俊の陰義は〝腐蝕〟──あらゆる甲鉄を蝕み破壊する〝劒冑殺し〟のちから。

〝蛍火〟が一斉に始祖村正を襲う。あれほど豪壮であった甲鉄が、見

るも無惨に朽ちてゆく。創気による蘇生も追いつかない。
「悪鬼、滅せよ！」
　合当理を噴かせ、菊池が吶喊する。構える槍が甲高い唸りをあげた。穂先が高速で振動しているのだ。
　武者の槍は甲鉄をも貫く。だが菊池の槍はそれ以上──如何に堅固な甲鉄も、まるで豆腐を砕くが如し。

「血迸奔湍噴紅雪チハハンタンニホトバシッテコウセツヲフク！」

　迅はやく鋭い菊池の一槍。避けられる速度ではない。ついに狂気の魔王は墜ちるのか。
　──否。

《時間加速ときかけ！》

　始祖村正が消えた。先の楠木との決闘でも見せた異様な速度である。その姿を捉えることは叶わない。ただ漆黒の颶風が吹き抜けていくのを感じるばかり。
《何と……御父のちからはこれほどまでに！》
　恐れ戦おののく二世村正。始祖村正の秘奥、そのからくりにようやく気づいたのだ。
《御父は時間を加速している！》
「……時間を？」
《御父は今、我々よりも速い時の流れにいるのだ。冑あれらにとっては刹那に過ぎぬ時間の中を、敵騎は翔ける！》
　楠木にはまるで想像がつかない。時間とは全てのものに平等に流れているのではないのか。そうでなければ辻褄が合わない。
「創気とやらは、それほどのちからなのか……！」
《如何に御父の陰義とてあり得ぬ！　これはもう、この世の外の理！》

　違う時の流れにいるならば、始祖村正は現世このよではなく常世とこよの理に存在していることになる。死し人びと。鬼。そして、神。
《だが、御父の劒冑には浦夢殿から授かりし、あの……》

KYYYYYYYYYHHHHHHEE-HHHHHHHHEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE!!

　怪鳥の鳴き声が戦場の空を引き裂いた。加速された足利の哄笑である。
　体内時間の加速は周囲の時間との軋轢を生む。骨が軋み、肉が切れ、血が煮える。
　剝き出しになっていた左眼が爆ぜて、血飛沫が噴いた。血煙を炎のように靡なびかせて、魔王は翔ける。黒の流星と化す。
「村正、蘇生なんぞにちからを割くでない！　全て太刀に回すのだ！」
《……御堂……しかし……》
「それでは勝てぬのだ！　最大の武力ちからを以て制せねばならぬ！　敵はあの鬼神楠木……そしておぬしと同じ村正なのだぞ！」
《……承知！　輪廻転生いのち・めぐる！》
　始祖村正は急上昇し、十三騎をほぼ直下に見おろす位置を取る。足利は野太刀を武者上段に構え――
「天稟の剣を、天命の剣にて破る！　この戦乱を終わらせるのだ。永い闇夜は明け、曙の光が世を照らす。それが私の――」
　今までとは比べ物にならないほどに強大なちからが、始祖村正から放たれる。始祖村正の生むちからの嵐が、空の嵐を呑み込んでいく。

《蒐窮開闢おわりをはじめる
　終焉執行しをおこなう
　虚無発現そらをあらわす》

　悲鳴をあげる肉体。崩壊が進む劒冑。ただ足利の狂った心は静かだった。ただ一心に武の遂行を誓う。武の成就を願う。
　丹田を軸に血の時計を回す。加速し収拾し編成する。
　熱量を偏移。必要箇所に必要量を。
　我が体内に機関を造れ。己と千子右衛門尉村正の最大規模・極限値・絶対量・完全武力の破壊行使のために。
　ちからを、ときはなつ。

「相国寺流甲冑礼法〝悪アク竜リュウ〟が崩し──〝瞋ウラミ〟！」

　野太刀が疾はしった軌道──そこには虚空が現れた。
　虚空は領域を広げ、無をもって有を侵食し、森羅万象セカイを食い破った。

　この日、阿騎野の原は一度、地上より消滅した。

×　　　　　×　　　　　×

　相国寺流甲冑礼法〝悪アク竜リュウ〟──背に触れるほど大きく振りかぶった太刀から繰り出される技であり、南朝の吉野御流においては〝雪颪ナダレ〟の名で伝えられている。
　その変化型──村正崩しである〝瞋ウラミ〟は、斬撃に劒気操作の陰

義を重ねる。
　陰義が組む術式は──〝基素分解〟。
　万物は基素の組み合わせによって作られている。ならば基素同士の結びつきを解ほどいてしまえばどうなるのか。その答えは今の阿騎野が教えてくれる。
　全て、無くなった。山も河も木々も鳥も獣も。南朝軍も北朝軍も──全て極細塵に砕けて、消えた。
　空にいる少数の武者が辛うじて被害を免れた。だが楠木と十三騎は直撃を受けた。何も残さず、残せず、虚無に呑まれたか。
「……否いや」
　漆黒の魔王は知る。宿敵の気配を。同じ呪いで結ばれた、もう一振の村正を。
《……敵騎……二七〇度上方とりのかみ……》
　始祖村正の金打声はか細い。陰義の無理な運用が崩壊を早めているのだ。
　武人は己の劒冑に願う。もう少しだけ堪こらえてくれ。討たねばならぬ敵がいる。白銀の月がそこに在る。
「アシカガァァァァ──！」
　辰気による超加速で〝瞋ウラミ〟から逃れたのであろう。絶叫をあげて月の魔物が翔ける。
　無惨な姿だった。翼は裂け、美しかった甲鉄はみるみる崩れて白銀ぎんの煙を噴いている。だが劒冑への負荷は省みず、加速に加速を重ねる。
　武人は己の劒冑に願う。もう少しだけ堪えてくれ。討たねばならぬ敵がいる。漆黒の闇夜がそこに在る。
　殺意だけを縁えにしとして、二振の村正は互いを求める。
　月の光と、月のない闇夜が激突する。

　白銀の武者が辰気による超加速、超旋回で死角から襲えば、漆黒の

武者は時間を加速させ、全てを見抜いて躱す。
　反撃──加速した時間の中で振るわれる野太刀。しかし躱される。
　漆黒の武者の主観では全てが緩慢に動く世界、だが白銀の武者だけが迅はやい。時間加速を以てしても、捉えきれぬ速度。
　神の如きちからと神を超える速さの激突。〝神域〟対〝神速〟の戦いは何ものにも侵せぬ極峰へ至ろうとしていた。しかし──
「足りぬ」
　白銀の武者は悟る。これでは足りない。対敵を殺しきれない。
　両騎とも既に崩壊寸前だ。あと一撃加われば、粉と砕けて空に散るはずだ。それでも彼の直感は否定する。
　対敵を殺すに足りる論理がない。理合がなければ、技は成立しない。
　構築せねばならない。敵の殺害を可能にする、論理と術技を。
　たとえば〝倶ク利リ伽カ羅ラ〟──先の機を見抜き、圧倒的な速力で敵を討つ魔剣。二世村正ならば小竜景光に匹敵する速度を得ることができよう。
　……だが不可能だ。今の彼にあの技は使えない。
〝倶利伽羅〟の土台となった技術は〝月ツキ片カケ〟である。敵に対して高位を奪った形勢から相撃するに際し、直前で前転の動作を加える事で、打ち下ろしの太刀に威力を乗せると共に相手を幻惑する技である。しかし二世村正には太刀がない。
　工夫の余地はあるだろうか。たとえば太刀ではなく拳……否、蹴りならば。
　……やはり不可能だ。〝倶利伽羅〟の威力を蹴りに掛ければ、脚が砕け散る。やはり机上の空論に過ぎぬか。
　そもそも〝倶利伽羅〟は一度敗れている。さらに時間を加速させた対敵は〝倶利伽羅〟さえ見抜くかもしれない。目前で悠長に前転する敵を斬り捨てるなど、蠅を叩き落とすより容易い。〝倶利伽羅〟をはるかに凌駕する速度が出せるならばともかく。
　ならば、どうやって──

「相国寺流〝狐キツネ火ビ〟！」
〝神域〟が〝神速〟をわずかに上回った。始祖村正の野太刀が二世村正の翼をかすめる。
　傷ついた翼がついに砕けた。辰気を捕まえることができずに、白銀の武者は墜ちる。
〝神域〟に至ろうと〝神速〟を翔けようと、空を飛ぶ武者の最期は同じ。奇跡つばさを奪われ、地に墜ちる──
「東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾ぬ」
　漆黒の武者は、静かに詠った。
「曙が来て、月は傾くのだ。月の魔物よ、ここで墜ちるがよい」
　止とどめを呉れるため、野太刀を構えて──来る。
　白銀の武者は動けない。彼の無敵を保証する〝神速〟は失われてしまった。もはや翔けることは叶わぬ。〝神域〟には敵わぬ。
　ゆえに──論理が完成した。
　──理解する。心得違いであったと。元より、時を超える対敵に速力で挑んでは勝てぬのだ。ならば翼など要らぬ。空に居場所など要らぬ。
　これより放つは、二世右衛門尉村正最大の武器を捨てた──されど、まがうことなき村正崩しの一手！
　迫る対敵の殺意。冷たい死の刃が振るわれる──よりはるかに早く。
　掌打を、繰り出す。

「吉野御流堂上礼法〝釈シャク掌ショウ〟が村正崩し──〝羅睺ラゴウ〟」

　掌打は何もない空を叩く。当然である。対敵が持つ野太刀の間合よりはるか遠くから放つ空拳が届くはずがない。そう、掌打は対敵には触れない。
　もう一度言おう。何もない空を叩くだけである。

「キ……ヒ……？」

　漆黒の武者は異変に気づいた。心臓の辺りを熱い何かがえぐったのだ。
　だが胸に穴が空いたわけではない。見た目は何も変わらない。
　それでも熱い衝撃は波のように全身に広がっていく。そして次の瞬間、彼の意識は白く灼け──二度と戻らなかった。
　漆黒の甲鉄の下、彼の身体が爆ぜた。肉片もろくに残さず、ただの血溜まりと化した。
　ひび割れた甲鉄から血が噴き出す。それはまるで夜明けの炎かげろいのように赤く、赤く。

×　　　　×　　　　×

　裏当てという。
　打撃の威力を直接内部に伝える技術だ。〝羅睺〟はそれと同じである。
　違うのは打撃を伝えるのに、辰気を利用する点だ。辰気による裏当ては、対敵の体表面のみならず空間さえも通り抜けて、体内で炸裂する。
　たとえ時間を加速しようと、目に見えず形もない攻撃を防ぎようもない。いや、それさえも始祖村正が万全であったなら凌いだかもしれ

ないが。

　だとすれば、この一撃を届けたのは彼ではない。善悪相殺の呪戒を受けてさえ、彼と共に戦うことを選んだ仲間達の執念こそが、魔王を討ったのだ。

　ここまで付き合ってくれた仲間達を想う。斬った父を想う。共に剣を磨いた篝を想う。

　そして──

「狭霧」

　皆、始祖村正の陰義に呑まれてしまったのか。逃げ延びた者がいれば良いのだが。

　何にせよこれで終わりだ。もはや全てのちからは尽きた。飛ぶことはおろか指一本、満足に動かせない。

　だがそれで良い。このまま墜ちて、砕けてしまおう。そうすれば──愛する誰かを殺さずに済む。

「この空が、俺の湊川よ」

　すべて、おわる──

「悔い改めよ。天国は近づいた」

　──なんだ？

　胃の嘔むかつきが、楠木を現実に引き戻した。

　焦燥感。とてつもない、邪悪の気配。

「天に在ましますす我らの父よ。御名が崇められますように」

　途方もないちからが、始祖村正から溢れ出している。

　それなはずはない。楠木の技は完膚無きに足利を殺し尽くした。

　あの中身には、もうただ血が詰まっているだけだ。

　──貴様は、何ものだ？

「御国が来ますように。御心が天に行われるように、地にも行われますように」

　光が、あった。
　そして──阿騎野は甦った。
　山が創られ、河が流れた。

「我らの日ごとの糧を、今日もお与えください」

　草木が大地が芽吹き、急激に成長し、森になった。
　土から虫が湧いた。どこからともなく獣が現れた。鳥が羽ばたいた。河では魚が泳いだ。

「我らに負い目がある者を赦したように、我らの負い目をお赦しください」

　そして──にんげんが、うまれた。
　兵士達が甦った……否、違う。
　おとこが、いた。おんなが、いた。みんな、若々しくうつくしかった。みんな、しあわせそうに、ほほえんでいた。

「我らを試みにあわせず、悪よりお救いください。国と力と栄光はとこしえにあなたのものなれば」

　阿騎野の原は歓喜に包まれた。
　花が、木が、鳥が、獣が、にんげんが──うたう。
　よろこびの、うた。

「かくあれかしアーメン」

　吐き気がこみ上げる。

　今、阿騎野に響き渡るうた──そう、これは汚染波うたに似ている。

　だが始祖村正が放っていた〝波〟とは比べ物にならぬほどに濃い──武者の甲鉄すら超えて届くほどに。

　それは畏怖の念を禁じ得ないほどに荘厳で、おぞましい光景だった。わずかに生き残っていた武者達が、うたを浴びて、水晶の像と変質していくのだ。

「何だ、あれは」

《らぴす・さぎー》

　二世村正の弱々しい金打声が返ってきた。

《御父が浦夢殿より授かった物質。神の血肉だ》

「神、だと。ならばあれはいったい何なのだ！」

　天空の、漆黒の劒冑を見上げながら、楠木は問う。

「足利将軍なのか？　村正なのか？　それとも本当に──」

「我はアルパでありオメガである」

×　　　　×　　　　×

　──浦夢殿は、何ゆえ劒冑に興味を持たれる？　森羅万象を窮めた御方がどうして武具などにこだわられるのか……今ひとつ得心がゆかぬ。

—私はまだ何も知りません。私が本当に知りたいことは、まだ遥か遠くにあります。
神の愛あがペ。
何処にあるかわかりません。どんな形をしているのかも。
しかし私は信じているのです。劒冑は人間に与えられし翼。天へ至るただ一つの方法。
なら、これを極めた先に、求めるものはあると。
村正どの。あなたに巡り合ったのは天命でした。私はあなたに会うために、この東の果ての国までやって来たのです。
どうか私を導いてください。黄金の夜明けへ！

×　　　×　　　×

—あくまで、仮定の話である。

南北朝の争乱より千年以上も昔、天竺よりもさらに西の果てにある地で、とある白蝦夷ユーデアの女が、水晶とも金属ともつかぬ奇妙な鉱物を素材に劒冑を鍛造した。
だができたのは劒冑ではなく、赤子だった。
赤子はやがて成長し、民衆に奇跡を施した。皮膚がただれた者がいれば、その皮膚は癒された。熱病に苦しむ者からは、熱が引いた。足

が萎えた者は起き上がり、歩けるようになった。盲目の者は、目が見えるようになった。
　海に嵐が起こったとき、空と海を操り、これを収めた。飢えた群衆がいれば、パンを生み出し、みなに分け与えた。まさしく万物を操る神の御業である。
　最終的に彼は、その奇跡を恐れる人々に陥れられ、十字架クルスにかけられた。
　彼の遺物は今もなお、西方の地においては信仰の対象である。人とも劔冑ともつかぬ彼の聖骸。
　ならば全ての劔冑は、彼の━神の模造品。神の血をわけた存在といえる。
　ブラッド・クルスだ。

　━あくまで、仮定の話である。
　しかし、そうであるならば。西方から来た不老不死の賢者より、謎の鉱物である神の血肉ラピス・サギーを与えられ、それを元に鍛造された劔冑━創気操作を陰義とする千子右衛門尉村正とは、何ものなのか。何ものになろうとしているのか━

×　　　　×　　　　×

　あれの中身が足利将軍なのか、始祖村正なのか、あるいは本当に神

なのか、楠木にはわからない。わかることはひとつ。あれは世界を滅ぼすということだ。神は神でも荒あら魂みたま――祟り神だ。

　――あれを止めなければならない。

　だが楠木は動けない。熱量はとうに尽き、仕手も劒冑も半死半生の有様。しかも汚染波うたは楠木をも汚染している。手足から少しずつ水晶化が進行しているのだ。

　どうすることもできない。万事休す、か。

「仰願あおぎねがわくは内ない海かい外げ海かいの竜神八部、臣しんが忠義を鑒かんがみて、敵意を万里の外ほかに退け給え！」

　その時、金色の輝きが楠木を庇うように飛び出した。海竜王を纏う新田である。

　同時に清浄なちからが楠木を包み込み、汚染波うたから護った。

　海竜王の陰義〝金きん城じょう鉄てっ壁ぺき〟――陰義のちからを無力化して退ける、守護まもりの技である。〝基素分解〟の直撃を受けて無事だったのも、この陰義のおかげだろう。

　しかし守りに優れる海竜王でさえ満身創痍。〝金城鉄壁〟を以てすら、始祖村正の陰義を防ぎきれなかったのだ。

　いつ力尽きてもおかしくない状況。いつまで陰義を維持することができるか――

「吉野御流合戦礼法〝飛ヒ蝗コウ〟！」

　投擲された一本の脇差が、始祖村正だったもの――荒ぶる〝神〟の喉元に突き刺さった。

　間髪を入れずに一騎の武者が斬りかかる。篝だ。新田の陰義で守られたのだろう。

　篝の太刀は〝神〟の肩口を裂いた。傷口から光り輝く血が噴き出す。

　本能的な危険を感じ、篝は血を浴びぬよう逃げる。ほんの数滴の飛沫が、篝の劒冑にかかり――その箇所が水晶化した。

「南無八幡大菩薩！　もう少しだけ頑張ってくれよ、相棒！」
　自らの劔冑に檄を飛ばし、篝は再び〝神〟に挑む。そう、全ては時を稼ぐために。
「御館様！」
「狭霧！？」
　楠木の元に駆けつける騎体は郷則重。しかし手にする得物は薙刀ではなく、一本の太刀だった。これこそが新田より授かった秘策である。
　郷則重は新田義貞の弟、脇屋義助の劔冑。すなわち本来は新田家に関わる劔冑である。
　郷則重の本体と薙刀は大山祇神社に奉納されたが、太刀は新田家に預けられ、今日まで伝えられてきたのである。
　そして郷則重の陰義は、太刀を用いる。その正体は──
「御免！」
　突然の乱心か。狭霧は太刀を、楠木の胸に突き刺した。
　しかし血は一滴も流れない。代わりに郷則重の太刀から楠木に、大きなちからが流れ込んでいく。
　狭霧が太刀を引き抜くと同時であった。
「村正ァァァァァ！」
《諒解！》
　騎航はおろか指一本動かせなかったはずの楠木と二世村正が、頭上の〝神〟を目指して、翔ける。その体内には荒れ狂わんばかりのちからが漲っていた。
　これが郷則重の陰義〝生イク太刀タチ〟──郷則重の太刀は、日々少しずつの熱量を仕手から奪い、刀身に蓄える。そして蓄えられた熱量は刃を通して、他者に分け与えることができるのだ。
〝生イク太刀タチ〟により与えられた熱量を用いることで、その武者は限界を超えた陰義の行使も可能になるだろう。
　兄、新田義貞を助けた弟、脇屋義助。主君楠木を助ける忠臣狭霧。郷則重は、義に厚き武者にこそ相応しい劔冑といえよう。

「御館様……御武運を」
　狭霧が墜ちる。たび重なる戦いで傷つき果てた郷則重がついに力尽きたのだ。
　新田もまた陰義の連続使用によって熱量を使い果たし、墜ちる。
　墜ちるふたりに一瞥もくれず、楠木は飛ぶ。あの〝神〟を討つ。それだけがふたりの忠義に報いる方法なのだから。

　篝は幾度となく〝神〟を斬った。その全てが通常の武者ならば致命傷。
　だが殺せぬ。どれほどの深手を負おうとも〝神〟は痛痒も感じないらしい。むしろ光る血飛沫を躱しきれず、劔冑の水晶化が進むばかり。
　首も刎ねた。だが首が落ちる寸前、切断面から茨が溢れ、これを繋ぎ止めた。
〝神〟は篝のことを一切気に留めていないようだった。ただ〝汚染波うた〟を発し続けるばかりである。
「まいった。これじゃ時間稼ぎにもならない」
　篝が途方に暮れたその時だった。裂帛の気合と共に、二世村正を纏う楠木が突撃してきたのは。そして〝神〟に変化が生じた。
《──ムラマサ》
〝神〟が野太刀を構えた。一閃。今まで無視していた篝を、煩わしいとでも言いたげに斬り捨てた。
　劔冑を破壊されて、篝は墜ちる。だが無念ではない。
「御大将」
　我らの将が間に合った。この世の全てを憎んで止まない、恐ろしい形相の悪鬼が。
　だから、もう大丈夫。何の心配もいらない。

　──吉野の里に取り憑いた悪鬼は、神よりも怖いのだ。

〝神〟は見た。白銀ぎんの輝きを。
〝神〟は感じた。悪鬼の殺意を。
〝神〟は理解した。不倶戴天の怨敵を。
　ゆえに――
〝神〟は恐怖した。
　迫る脅威を排除するために、最も正しい選択をした。

《蒐窮開闢おわりをはじめる
　終焉執行しをおこなう
　虚無発現そらをあらわす》

〝神〟が持つ最大の武力ちから――〝基素分解〟の術式。森羅万象を無に還す、神の裁きだ。神威カムイの前には、鬼も月も、塵芥に等しい。
　だが〝神〟よ。御身は知るまい。森羅万象を無に還す神威の執行権は、対敵も有しているのだという事実を。

《蒐窮開闢おわりをはじめる
　終焉執行しをおこなう
　虚無発現そらをあらわす》

　悪鬼と月の魔物が生み出したのは、〝神〟の甲鉄はだよりも暗い漆黒。
　一切の光を赦さない、黒の渦。
《KYYYYYYYYY-HEEEEE-HEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE!!》
〝神〟が絶叫する。悟ったのだ。この闇を完成させてはならないと。全神全霊を賭して、神なる剣を解き放つ。

《相国寺流甲冑礼法〝悪アク竜リュウ〟が崩し──〝瞋ウラミ〟！》

　森羅万象セカイを食い破る虚空が──生まれなかった。

　野太刀は振るわれなかったのだ。

《……楠木ィ！》

　身体の自由が利かない。あまりにも強大な辰気によって、動きを封じられたのだ。

　そして、闇が完成する。

「飢餓虚空」

　黒の渦。何を吸ってか。何を喰らってか。際限もなく膨れ、膨れてゆく。

　渦は渦。闇は闇。

　変質せず、規模だけ拡げて。何を喰らっているのか。空クウか。気キか。それとも己オノレか。

　渦は渦。闇は闇。

　何を喰らおうと、そこには何も生じない。

　無。無のままに膨張だけを遂げる。

　何もかも喰らいながら、変わらぬ飢えを哭き続ける。

　飢餓の虚空。辰気の地獄だ。

　──〝神〟は光すら逃れることのできない、因果の果てに消えた。

×　　　　×　　　　×

　彼が何ものであるのか。それは彼自身にもわからない。
　足利将軍と呼ばれていた彼。千子右衛門尉村正という名の蝦夷だった彼。浦夢であり、ニコラ・フラメルであった彼。さらには宇宙そとより来たる客人神──全ての記憶が融け合い、無貌の混沌と化していた。
　彼にわかるのは、ここが相変わらず闇の中であること。もう二度とこの闇からは逃れられないこと。ここはあの辰気の地獄にそっくりだ。曙の光が──黄金の夜明けが、彼を照らすことは永遠にあるまい。
　だというのに。今日は、光があった。曙のような温もりめく光ではない。もっと冷え冷えとした──だけど清浄な光。
「……月」
　月光に照らされる人影があった。人影は太刀を構えて立つ。今日もまた始まるのか。甦っては殺される無間地獄が。月下の影は、まるで地獄の悪鬼にも似て──
「吉野御流堂上礼法。馳走」
　──噫ああ。
　悪鬼の声を聞いたとき、彼は〝彼〟になった。起き上がり、いつの間にか手にしていた太刀を構えて、悪鬼に告げる。
「相国寺流甲冑礼法。参れ」
　お互い、太刀を右肩上に構える。武者正調、上段の太刀取り。
　睨み合い、動きが止まる。回転する独楽の静止。向き合うだけで息の根を止められそうな対敵の殺気を受けて〝彼〟は思った。
　──やはり、彼奴あやつの剣は天稟よ。
　この凡才の剣で、天稟の剣を如何にして破ろうか。
　天命の剣──そんなものは信じぬ。心得違いであった。人を斬って得られる天命などない。どうして斯様な愚かしい幻想を抱いてしまったのか。その結果、私は愛する者を失ってしまった。これこそ、まさに

善悪相殺。

　──ついに〝彼〟は、自らの剣に開眼した。

「……何のつもりだ、室町殿」
　月下の悪鬼が、〝彼〟の行動を見咎めた。
〝彼〟は──構えた太刀を、投げ捨てたのだ。
「おぬしを殺すほどに憎む理由がないからだ」
　それが〝彼〟の答えだった。
　南朝と北朝。文字どおり倶ともに天を戴かぬ敵同士であった。だが、それが何だというのだ。
　わかっていたはずだ。敵は人を喰らう悪鬼ではない、時代の苦難を乗り越えようと足掻く、同じ人間に過ぎないのだと。
　──己の刃を善と云い、敵の刃を悪と云うも、世に善悪の定めは単一ならず。故に誰もが己の善なるを信じ、敵の悪なるを憎む。故に武が一殺するならば、一善一悪共に滅ぶ。
　村正が言っていたとおりだ。そして、こうも言っていたではないか。覚悟がないのならば武を揮うべきではないと。武を捨てるべきだと。
　何故その道を選ばなかった。戦は苦手だと言いながら、どうして死シに耽溺した。
　もっと早く気づいておれば、愛する者を殺さずに済んだのに──
「私は、おぬしを殺さぬ」
　殺さず。奪わず──武人として生まれて、はじめて選んだ道かもしれない。
「俺は、不愉快だ」
　太刀を下ろさずに、月下の悪鬼は告げた。
「狂気のままに殺し尽くしたはずの貴様が、大和を恐怖に陥れた貴様が、何ゆえそのように穏やかなのだ」
「泣いておるのか、鬼よ？」

　月光に刃はきらめいて。悪鬼の太刀が〝彼〟を殺害する。
　鎖骨。胸骨。そして。〝彼〟の心臓を両断する。
　全ての形が崩れ去り、全ての流れが静止する。何もかもが消えていく。あらゆる〝彼〟が霧散し、溶け、失われる。

　最期に〝彼〟は自らの掌を見た。
　刃ではなく、ほんの小さな宝石のかけらがあった。
　慈しむように、握り締める。

×　　　　×　　　　×

　うたが、止んだ。
〝神〟は辰気の地獄に呑み込まれた。草木は枯れ、獣は老いて死に絶え、鳥は落ちた。
　にんげんたちは、ただの土つち塊くれになって崩れた。
　何もかもが一度甦り、そして死に絶えた阿騎野の原を、狭霧は進む。装甲は既に解けてしまった。一歩進むごとに生身の身体が悲鳴をあげる。
　それでも歩みは止めない。郷則重の太刀──陰義でちからを使い果たした後、すっかり錆びてしまった──を杖代わりに、彼の元を目指す。
　雨はいつの間にか止み、雲間からは月が覗いている。月光に照らされて、ひとりの悪鬼が立ち尽くしている。砕けた白銀の甲鉄が、月光

を反射して輝く。凄惨な、美しさ。
「御館様」
「来るな」
　拒絶の言葉。だが狭霧は止まらない。一歩、一歩、前に。
　気おされるように悪鬼は後ずさる。
「……来るな」
「泣いてらっしゃるのですか？」
　悪鬼は、答えない。狭霧はついに彼の元へとたどり着く。
　悪鬼の頬に手を伸ばし、拭ぬぐい、ひどく穏やかな面持ちで微笑みかけた。
「御館様……いえ」
　彼女は彼の名前を呼び、その胸に寄りかかって、一言問うた。

「──自惚うぬぼれてもいいですか？」

　篝もまた満身創痍の身体を引きずって進む。その隣で鋼の兎が、ついに崩れてただの鉄塊と化した。白く綺麗な甲鉄は、いのちを失い、黒くくすんでしまった。
「ありがとう」
　劒冑は最後の最後まで完璧に仕手の望むちからをくれた。最高の相棒に、篝は心よりの敬意を示す。お前こそが我が生涯の一領である。
　誓おう。今後、篝は他の劒冑と決して縁を結ばない。お前以外の劒冑に肌を許さない。
　雲間から月光が差す。篝はまず月を見上げ──そして気づいた。月光の下で抱き合う男女の姿に。何も知らぬ者が見たのなら、それは美しい愛の光景だっただろう。
「いや」
　篝は考え直す。やはりそれは美しい光景なのだ。たとえ、どんな無惨な呪いの結末であったとしても。この愛は、まぎれもなく美しい。

「篝はいつも、一番欲しいものばかり持っていかれる」
　切なげに自嘲し、篝はいつまでもふたりを見守っていた。

　女の身体が頽くずおれ、大地に倒れる。
　だけど女の顔はいつまでも、男の胸に抱かれている。
　男は世にも恐ろしい声で泣き叫ぶ。鬼哭啾啾。

　斯くして南北朝の時代は、その最後に未曾有の殲滅戦争を巻き起こし、わずか一年で当時の全人口の一割とも二割以上ともいわれる死者を出して、閉幕へ至った。
　災厄の劒冑。三代で絶えた妖甲の一門、千子右衛門尉村正の銘なを歴史に刻んで。

　──いまや大和では人よりも、死肉を食らう犬猫の方が栄えている。

×　　　×　　　×

　──そなたが村正の孫、三代目か。
　既に聞いておろうが、村正、そなたの家門はこれを断絶する。一切の継承は許さぬ。
　劒冑鍛冶右衛門尉村正は、そなたをもって終えよ。
　始祖村正は粉々に砕かれ、既に跡形もない。楠木の二世村正は深く傷ついたが、まだ滅びておらぬ。
　近いうちに砕き、鋳潰す。さよう心得よ。

　──お待ちを。陛下！　どうか、その儀ばかりは！

蝦夷にとり、劒冑となるは本望。戦いくさ場ばにて斃され、土に朽ちるもまた本望。

されど、ひとたび劒冑となりながら、戦なき場所で鉄屑に戻され棄てられるは──蝦夷として、鍛冶師として、死にも堕獄にも勝る痛哭！

どうか、陛下。この首を献じて、お願い申し上げます。

土に埋めて頂いても構いません。海に沈めて頂いても構いません。ですがどうか、鋳潰しだけはお許しを！

──首を献ずるとの言葉に、嘘はあるまいな。

宜しい。ならば三世村正、そなたに命ずる。劒冑を打て。そなたの母に比肩する劒冑となるのだ。そして、母と共にいずこかの山陰で眠れ。願わくば永劫。

将来、何者かが封印を破り、二世村正を手にした時。そなたもまた、仕手あるじを求めよ。そして母を監視するのだ。そなたの祖父が願った通り、世に和を導く力として用いられるなら良い。だがもし当世と同様、災いの武者となり果てし時は──そなたが二世村正を討たねばならぬ。

祈っておるぞ、千子右衛門尉村正。そなたと母が、二度と目覚めぬよう。

長き刻の果て、解き放たれることがあっても、その時こそは、そなたの祖父の願いを叶えるために使われるよう。

そなたと母が相争うことなどなきよう、天地神明に祈っておく。

×　　　　×　　　　×

　吉野山を発つ日が来た。
　部下達の支度はほとんど済んでいる。そもそもさしたる荷物もない。三つの鎧櫃を除いてだが。
　旅立ちを見送る者は少ない。阿騎野の戦いで、吉野山はすっかり寂しくなってしまった。
　北朝との和睦がようやく成ったとはいえ、大和の傷が癒えるのは当分先の話となるだろう。前途は多難だ。
「篝殿」
「飽間か」
　見送りには飽間の姿があった。阿騎野の数少ない生き残りだ。
　結局、阿騎野を生き延びたのは、水晶化を免れた武者が少数。あとは十三騎の内、新田の陰義が間に合った数人だけであった。正真正銘の殲滅戦争となった。
　よくもまあ生きて帰れた。まったくお互いしぶといものだ、と篝は苦笑する。
「律儀に見送りに来てくれたのか。みんな恐れて、近寄りたがらないというのに」
　言って、ふたりとも鎧櫃の方に視線を送る。
「わしなりのけじめだ。友であったからな」
　鎧櫃の中には妖甲と恐れられた劒冑が眠っている。ひとつは白銀の大蟻、二世村正。
　ひとつは帝の命により鍛造された、深紅の蜘蛛――三世村正である。
　妖甲を預かり、封じる任を受けたのは篝だった。自ら申し出たことだ。篝は村正との奇妙な絆を感じていた。他の者には任せたくない――まあ元々、進んで妖甲に関わりたがる物好きは篝以外にいなかったのだが。
「ひとつ多いな？」

「ああ、あれは篝の劒冑だ。もう死んでいるけどね。手放すのは忍びない」
　三つ目の鎧櫃には、篝の相棒が眠っている。死に劒冑ではあるが、生涯、一緒にいてやろうと思う。
「さて。そろそろ行くよ。息災でな、飽間」
「いいのか。楠木殿の姿が見えないが、挨拶くらいは」
「別にいいさ、永遠の別れでもあるまいに」
　去りゆく篝の背中に、飽間は声をかけた。深々と頭を下げる。
「篝殿、どうか村正をよろしく頼みます」
「おうよ。頼まれてあげるよ」

　花の季節だ。この時期の吉野山は美しい。咲き誇る桜を愛でながら、篝は山を下りる。
　一陣の風。桜の花びらが舞う。
「み吉野の高嶺のさくら散りにけり嵐もしろき春のあけぼの……だな」
　ふと予感があった。篝は足を止める。
　はたして吹き抜ける花吹雪のその向こう、桜の樹の下にひとりの鬼が佇んでいた。
「驚いた。こんなところに悪鬼がいる。この世の全てを憎んで止まない、恐ろしい形相だ」
　鈴を転がすような声で篝は笑う。
「篝」
「うん、そうだ。御大将。相変わらず化物じみた面つらだな」
　楠木は、老いた。
　あの地獄は彼からあまりにも多くのものを奪い去っていった。眉間の皺はなお深く、目は落ちくぼみ、髪は白いものが目立つ。彼の凶相はより一層、陰惨なものとなった。
　──でも、それでいい。

　何を思ったか、篝は刀を抜いた。
　応えて、楠木もまた刀を抜く。
「吉野御流──〝砕〟の型にて」
「応」
「馳走」
「参れ」
　篝が仕掛ける。楠木が迎える。
　剣が閃き、太刀風に桜の花びらが舞った。
　刃は──お互い、首筋の手前で止まっている。
「篝」
「何だ？」
「今のは〝砕〟の型ではない。〝奉〟だ」
「そうだな」
　微笑んで、楠木の顔をじっと見つめた。
　何とおぞましき凶相か。まさしく悪鬼の顔だ。
　──でも、それでいい。
　彼の凶相は、悪鬼の如き容貌は、苦闘の証明あかしである。たくさん殺した。たくさん失った。それは本当に愚かなことだったけれど。英雄にはなれなかったけれど。
　それでも、戦った。その涙も傷も、彼の凶相に刻まれている。だというのなら、愛するよりほかにない。
　──悪鬼、大いに結構。
　先に退いたのは篝だった。刀を納めて歩き出す。楠木の前を、篝が通り過ぎていく。
「ゆくか」
「ゆくよ」
　無愛想なやり取り。だがそれで充分だ。
　お互い振り向きもせず、別れの言葉を告げる。

「愛しているよ、御大将」
「ありがとう。皆みな斗と篝かがり」

×　　　　　×　　　　　×

　南北朝時代の後に訪れた平和はしかし長くは続かず、やがて戦国時代へと突入する。
　そして五百年の時を経た今もなお、大和は戦乱の只中にある。
　そう、双輪が描く軌跡のように因果は巡るのだ。

文庫版あとがき

　ゲーム『装甲悪鬼村正』から六年、Nitroplus　Booksの『妖甲秘聞鋼』から四年の歳月が流れました。まさに光陰矢の如しであります。

　さて、はじめましてな人に改めて説明をば。本作はニトロプラスから発売されたＰＣゲーム『装甲悪鬼村正』の外伝小説になります。今回、星海社様より文庫本として出版いただきました。

　原作である『装甲悪鬼村正』の企画＆脚本は奈な良ら原はらーいっ鉄てつ。空を翔け、身にまとう者に異能の力を与える鎧、劒冑つるぎ。中でも妖甲と忌まれ、恐れられた村正をめぐる物語です。

　劒冑をまとった武者同士の空中戦という超人的アクションに、剣術家でもある奈良原の濃密な剣術描写が融合した大傑作です。

　本作は村正が如何にして妖甲と呼ばれるに至ったのかを描いた作品となります。時は南北朝。しかし我々の知る歴史とは違い、百年に及ぶ戦乱が続いています（『村正』は架空の歴史をシミュレートする要素もあるのです）。その戦乱に最悪のかたちで幕を下ろすのが妖甲村正なのです。

　さて村正の銘めいから想像できるように『装甲悪鬼村正』に登場する劒冑には、五郎入道正宗、長なが曽そ祢ね虎こ徹てつ、同どう田た貫ぬき、骨ほね喰ばみ藤とう四し郎ろう等々、現実の世界における名刀と同じ銘がつけられています。

　ちょうど二〇一五年現在、弊社ニトロプラスが製作として参加しているブラウザゲーム『刀剣乱舞』が稼働中です。『村正』から『刀剣乱舞』へ、『刀剣乱舞』から『村正』へと両方に興味を持っていただけたなら幸いです。

『装甲悪鬼村正』は自分個人としても非常に思い入れが強い作品です。六年経って今もなお、その火が消えず続けていることに感謝します。

　それではまたの機会にお会いしましょう。

鋼屋ジン

Illustration　なまにくATK（ニトロプラス）
3DCGI　石渡マコト（ニトロプラス）
ロゴデザイン　yoshiyuki

カバーデザイン　相京厚史＋大岡喜直（next door design）

編集担当　岡村邦寛

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2015年5月、小社より星海社文庫として刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合があります。

装甲悪鬼村正　妖甲秘聞 鋼

2020年12月1日発行（01）

著
者　鋼屋ジン（Nitroplus）

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社
〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp